青森県埋蔵文化財調査報告書　第256集

新納屋(1)遺跡

－県道尾駮有戸線改良事業に伴う遺跡発掘調査報告－

１９９９年３月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書　第256集

新納屋（1）遺跡

－県道尾駮有戸線改良事業に伴う遺跡発掘調査報告－

１９９９年３月

青森県教育委員会

新納屋（１）遺跡全景（東から）

新納屋（１）遺跡全景（北から）

序

青森県教育委員会は、遺跡の登録、遺跡地図の作成、分布調査や発掘調査など、埋蔵文化財保護について諸施策措置を講じております。

このたび、県道尾駮有戸線改良事業の実施に伴い、青森県土木部道路建設課から委託を受けて、平成９年度に当教育委員会が発掘調査を実施した上北郡六ヶ所村に所在する新納屋（１）遺跡の発掘成果がまとまり、ここに報告書を刊行することになりました。

調査の結果、縄文時代の溝状土坑などの遺構や、縄文時代早期を中心とした土器、石器が出土し、六ヶ所村及びその周辺地域の歴史を知る上で、貴重な資料が多数得られました。

この発掘成果が、広く文化財の保護と研究に活用され、また、地域社会の歴史学習や地域住民の文化財保護の意識の高揚につながることを期待したいと存じます。

最後になりましたが、平素より埋蔵文化財の保護に対し、御理解を賜っている青森県土木部道路建設課並びに六ヶ所村教育委員会、また、発掘調査の実施と報告書作成にあたり御協力、御指導を賜りました関係各位に対しまして、厚く御礼を申しあげます。

平成11年３月

青森県教育委員会

教育長　松森　永祐

例　　言

1　本報告書は，県道尾駮有戸線改良事業に伴い平成８年度に実施した上北郡六ヶ所村新納屋（１）遺跡の発掘調査報告書である。

2　この遺跡は、平成４年３月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に、遺跡番号５０１０７として登録されている。

3　執筆者の氏名は文末に記してある。

4　資料の分析、鑑定については、下記の方に依頼した（敬称略）。

　石器の石質鑑定　　青森県立板柳高等学校教諭　　山口　義伸

5　本書に掲載した地形図（遺跡の位置）は、建設省国土地理院発行の５万分の１地形図を複写したものである。

6　挿図の縮尺は、図ごとにスケールを付した。

7　遺物写真の縮尺は不統一である。

8　堆積土の色及び土器の色については『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄　1993）を用いた。堆積土中の混入物の大きさについては便宜的に次のとおり表記し、それ以外のものは適宜形状と大きさを記した。

粒状のもの

「粒」＝粒径２㎜以下のもの、「中粒」＝２～５㎜程度のもの、「大粒」＝５～10㎜程度のもの

塊状のもの

「小塊」＝粒径10㎜以下のもの、「中塊」＝10～20㎜程度のもの「大塊」＝20～50㎜程度のもの

9　本稿で使用した遺構の略号はＳＫ＝溝状土坑または土坑とした。

10　引用文献については、第2章第1節については節末にそれ以外は巻末に収めた。

11　発掘調査における出土遺物、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

12　発掘調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々から御教示、御指導をいただいた（順不同、敬称略）。

　田中　寿明　瀬川　滋

目　次

序
例言
目次
挿図目次・写真図版目次

第１章　発掘調査の概要 …… 1
　第１節 調査要項 …… 1
　第２節 調査の方法 …… 2
　第３節 調査の経過 …… 2

第２章　遺跡の環境 …… 3
　第１節 遺跡周辺の地形及び地質 …… 3
　第２節 周辺の遺跡 …… 6

第３章　遺構と遺物 …… 8
　第１節 概要 …… 8
　第２節 縄文時代の遺構と遺物 …… 8
　第３節 遺構外出土遺物 …… 51
　　1　土器 …… 51
　　2　石器 …… 54

第４章 考察とまとめ …… 59
　第１節 遺構、遺物の分布について …… 59
　第２節 新納屋(1)遺跡出土土器について …… 60

写真図版
引用・参考文献
報告書抄録

挿図目次

図１　六ヶ所村南部地形図 …… 3
図２　遺跡周辺の地形分類図 …… 4
図３　基本土層 …… 5
図４　新納屋(1)遺跡と周辺の遺跡 …… 7
図５　遺構配置図 …… 9
図６　遺構内出土土器 …… 31
図７　遺構内出土石器 …… 31
図８　溝状土坑（ＳＫ１、２）…… 32
図９　溝状土坑（ＳＫ３、12）…… 33
図10　溝状土坑（ＳＫ４、５、30）…… 34
図11　溝状土坑（ＳＫ６、７、８）…… 35
図12　溝状土坑（ＳＫ９、10、13）… 36
図13　溝状土坑（ＳＫ11、31、14）… 37
図14　溝状土坑（ＳＫ15、16、21）… 38
図15　溝状土坑（ＳＫ17、18、19）… 39
図16　溝状土坑（ＳＫ20、22、23）… 40
図17　溝状土坑（ＳＫ24、25）…… 41
図18　溝状土坑（ＳＫ26、27、28）…… 42
図19　溝状土坑（ＳＫ29、33、51）…… 43
図20　溝状土坑（ＳＫ32、34、35、36）… 44
図21　溝状土坑（ＳＫ37、38、39）…… 45
図22　溝状土坑（ＳＫ40、41、42）…… 46
図23　溝状土坑（ＳＫ43、44、45）…… 47
図24　溝状土坑（ＳＫ46、47、48）…… 48
図25　溝状土坑（ＳＫ49、50、52、53）… 49
図26　溝状土坑（ＳＫ54、55、56、57）… 50
図27　遺構外出土土器(1)…… 53
図28　遺構外出土土器(2)…… 54
図29　遺構外出土石器(1)…… 56
図30　遺構外出土石器(2)…… 57
図31　遺構外出土石器(3)…… 58
図32　遺構外出土土器分布図 …… 59
図33　口唇部断面模式図 …… 60

表　目　次

表１　遺構内出土土器 …… 32
表２　遺構内出土石器 …… 33
表３　遺構外出土土器 …… 52
表４　遺構外出土石器 …… 55

写真図版目次

写真１　調査区全景、基本土層他
写真２　溝状土坑（ＳＫ１～５、12、30）
写真３　溝状土坑（ＳＫ６～９）
写真４　溝状土坑（ＳＫ10、11、13、14）
写真５　溝状土坑（ＳＫ15～19、21）
写真６　溝状土坑（ＳＫ20、22～24）
写真７　溝状土坑（ＳＫ25～28）
写真８　溝状土坑（ＳＫ29、32～34）
写真９　溝状土坑（ＳＫ35～38）
写真10　溝状土坑（ＳＫ39～42）
写真11　溝状土坑（ＳＫ43～46）
写真12　溝状土坑（ＳＫ47～50、52～54）
写真13　溝状土坑（ＳＫ53～57）
写真14　遺構内出土土器、石器、遺構外出土土器
写真15　遺構外出土土器
写真16　遺構外出土石器

第１章　発掘調査の概要

第１節　調査要項

1　調査目的

県道尾駮有戸線改良事業の実施に先立ち、当該地区に所在する新納屋(1)遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財活用に資する。

2　調査期間　　平成９年５月１日～平成９年６月25日

3　遺跡名及び所在地　　新納屋（１）遺跡（青森県遺跡台帳番号　50107）
上北郡六ケ所村大字鷹架字道の下29-203、外

4　調査面積　　４，０００平方メートル

5　調査委託者　　青森県土木部道路建設課

6　調査受託者　　青森県教育委員会

7　調査担当機関　　青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査協力機関　　六ケ所村、六ケ所村教育委員会、上北教育事務所

9　調査参加者

調査指導員　　村越　　潔　　青森大学教授

調査協力員　　久保　　源　　六ケ所村企画開発課長
橋本　　寿　　六ケ所村教育委員会教育長

調査員　　天間　勝也　　東北町立清水目小学校校長（考古学）
佐々木　辰雄　青森県立八戸南高校教諭（地質学）

調査担当者　　青森県埋蔵文化財調査センター
調査第一課
次長兼
調査第一課長　成田　誠治
主　　査　　太田原　潤
主　　事　　野村　信生

調査補助員　長内　礼二、太田　文世
西方　敏子、松館　深雪

第２節　調査の方法

次節で述べるように、本遺跡は前年度既に試掘調査が実施されているため、その時点で設定したグリッドをそのまま使用した。基準としたのは道路建設用中心杭で、杭№100と杭№101を通る線を延長して基準線とし、グリッドを設定した。軸方向はN85°Wである。１グリッドは４ｍ×４ｍとした。南北方向にはアルファベットを使用し、北から南にＡ・Ｂ・Ｃ…と設定した。東西方向には算用数字を使用し、西から東に１・２・３…と設定した。グリッドの呼称は北西方向を基準に行った。

なお、このグリッドは本遺跡の西に隣接し、前年度発掘調査がされた幸畑(1)遺跡から連続するものである。

遺構検出は随時行い、発見順に遺構名を付し、１／20で実測図を作成した。遺構以外の出土遺物の取り上げは、グリッド単位で行った。

調査にあたっては、土層の堆積状況を観察するため適宜セクションベルトを設定し、土層注記は『新版標準土色帖』を用いた。土層の名称は、基本層序については表土から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に算用数字を付した。

写真撮影は適宜行うこととし、カラーリバーサル、ネガカラー、モノクロームの各種類のフィルムを使用した。

（野村　信生）

第３節　調査の経過

本遺跡は県道尾駮有戸線改良事業に伴う発掘調査であるが、同路線上には多数の遺跡が所在する。平成8年度には隣接する幸畑(4)遺跡、幸畑(1)遺跡の発掘調査が実施され、その成果は青森県埋蔵文化財調査報告書第236集として報告書が刊行されている（青森県教育委員会　1998)。

新納屋(1)遺跡は、幸畑(1)の発掘調査と並行して平成８年９、10月に試掘調査が実施された。その結果、新納屋(1)遺跡には多数の溝状土坑が存在することが確認され、平成９年度に発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は平成９年５月１日に着手した。前年度の試掘調査の状況を踏まえつつ遺構確認面までの表土を除去し、グリッドを前節のごとく設定した。

調査は遺跡の西側から順次進めることとし、５月中旬には調査区西半の遺構確認を終えた。５月末までにはそれらの遺構精査を完了し、あわせて調査区東半の遺構確認も済ませた。６月前半までには全ての遺構確認、遺構精査を完了し、６月18日空中写真撮影を実施した。

その後は全測図の作成、危険個所の埋め戻し等を行ったが、６月24日までにはそれらの作業も全て終了し、６月25日撤収を完了した。

今回の新納屋(1)遺跡の調査終了をもって、県道尾駮有戸線改良事業にかかる一連の発掘調査も一段落することとなった。

（太田原　潤）

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡周辺の地形及び地質

新納屋（１）遺跡の所在する六ヶ所村は下北半島の基部に位置する。村は東西約14km、南北約33kmと細長く、北部と南部では地形的にも大きな差がある。北部は吹越烏帽子を始めとする標高400～500m前後の山地が連なり、南部は広大な洪積台地からなる。北部は山地がそのまま海まで迫り、北端の泊地区では断崖で太平洋に接している。周辺には奇岩も多く海食洞、海食崖で特異な景観を見せている。この吹越烏帽子山系に源流をもつ河川は、老部川以外はいずれも長さが３～４kmと短く、標高差があるわりには延長が短いため概して急流となっている。

一方南部は段丘が発達し、台地を開析して流れる河川は、村の西端に南北に連なる分水嶺に源流をもつものである。太平洋に直接注ぐ川はなく、それぞれ東流して、室ノ久保川と後川は鷹架沼へ、市柳川は市柳沼へ、平沼川は田面木沼に注いでいる。田面木沼からはさらに東に前川が流れ出し、小川原湖から高瀬川に合流した後太平洋に注ぐ。

海岸沿に幅約１km、長さ約20kmの砂丘が発達しているのもこの地域の特徴である。

図１、２は六ヶ所村南部の地形分類図である。図示した部分以北は吹越烏帽子山系が広がり、その縁辺には吹越烏帽子段丘群と呼ばれる２段の段丘の分布が見られる。図示した吹越烏帽子山系より南

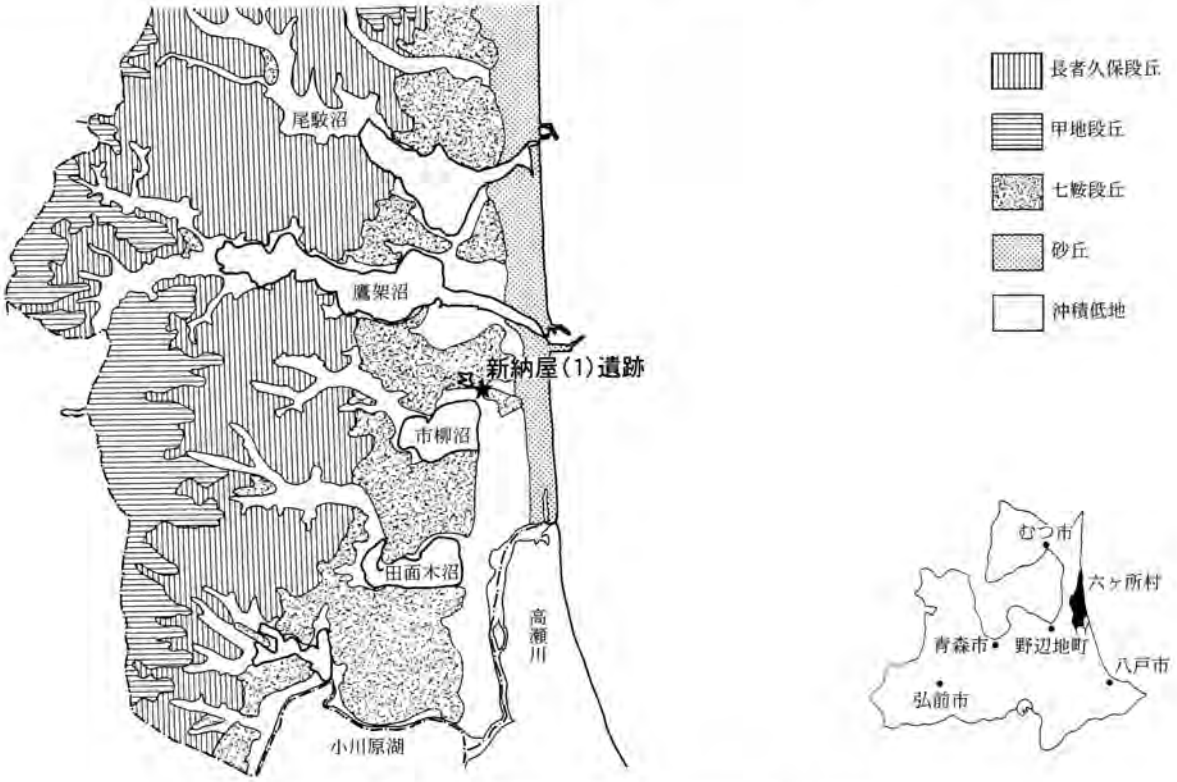


図１　六ヶ所村南部地形図（佐々木 1998をもとに作図）

の地域では、高位から低位に長者久保段丘、甲地段丘（千歳段丘）、七鞍平段丘などが分布する。

長者久保段丘は標高80～90mで、豊原、睦栄、千歳、庄内など村西部の南北方向の分水嶺付近に見られる。現状は放牧地等として利用されているが、平坦面の保存状況はあまり良くないようである。

甲地段丘は長者久保段丘の下位の段丘で、標高は約50～70m、弥栄平、芋ヶ崎、六原など長者久保段丘の東側に広がっている。平坦面は比較的良く残っているが、河川や湖沼により東西方向に寸断されている。

七鞍平段丘は甲地段丘の下位の段丘で、標高は約20～40m、村の北端から南端までほぼ全域に分布する。村北部の泊、出戸付近では吹越烏帽子段丘群の東縁に沿うように南北に連なり、それ以南の尾駮、大石平、鷹架、新納屋、幸畑、七鞍平では甲地段丘の東側に広がる。また、これらから離れて二又、室ノ久保にも散在する。この段丘面は平坦面がよく残っており、現在の集落や耕地の大半を載せる。村内におけるこの段丘の構成層は他地域に比べると堆積が薄く、鍵層となる千曳浮石層も尾駮沼以北ではブロック状程度の堆積になるようである。

六ヶ所村内の遺跡の多くは甲地段丘上から七鞍平段丘上に分布し、特に後者に集中する。甲地段丘上には富ノ沢遺跡、後者には大石平遺跡、上尾駮遺跡、家ノ前遺跡、発茶沢遺跡、鷹架遺跡、表館遺跡、新納屋遺跡などが立地している。なお、これらの段丘を八戸周辺の段丘と比較すると、甲地段丘は天狗岱段丘に、七鞍平段丘は高館段丘に対比される。

下北半島の頸部の基盤をなす構成層は、新第三系中新統の泊安山岩類と鷹架層であるが、泊安山岩類は村北部の吹越烏帽子山系周辺に限られ、村南部の各段丘周辺の基盤は鷹架層となっている。鷹架層は礫岩、粗粒砂岩、貝殻石灰岩、砂岩と泥岩の互層、青灰色シルト岩からなる。

市柳沼北方の七鞍段丘では、基盤層の上に浜田層、野辺地層が重なり、その上を火山灰起源の段丘堆積物が覆っている。野辺地層は礫岩、粗粒砂岩、中粒砂岩、泥岩などからなり、ナウマン象の臼歯

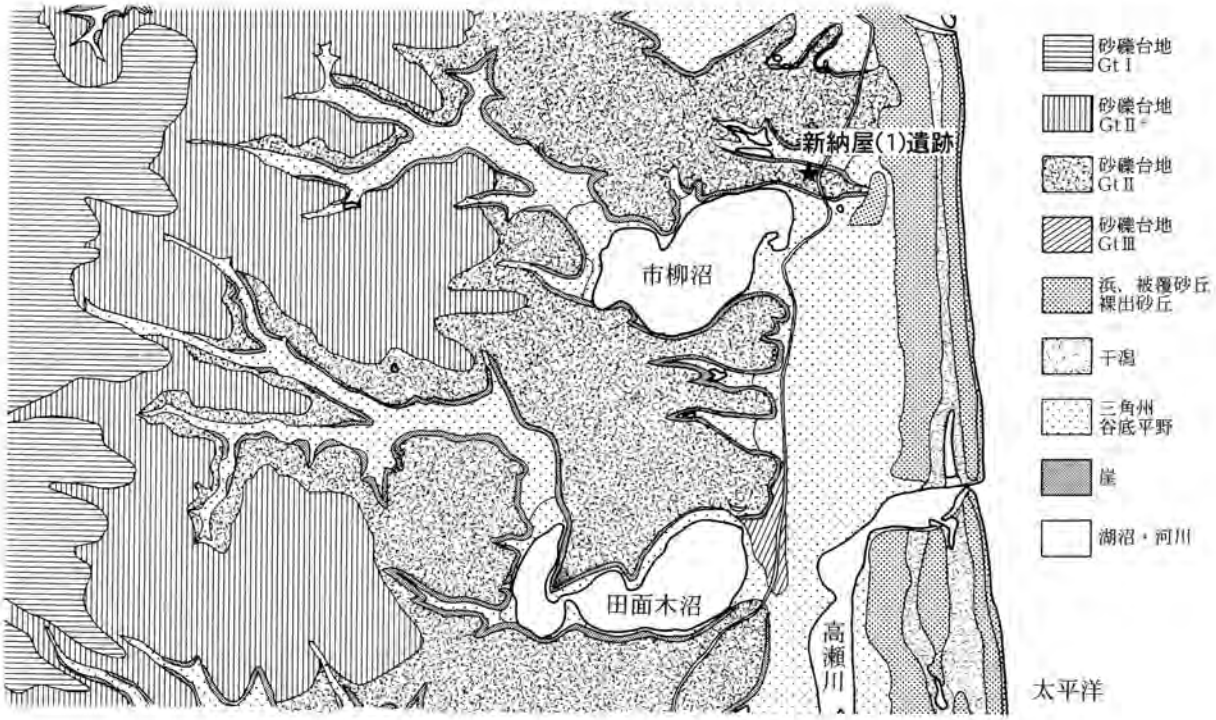


図2　遺跡周辺の地形分類図（水野他 1971をもとに作図）

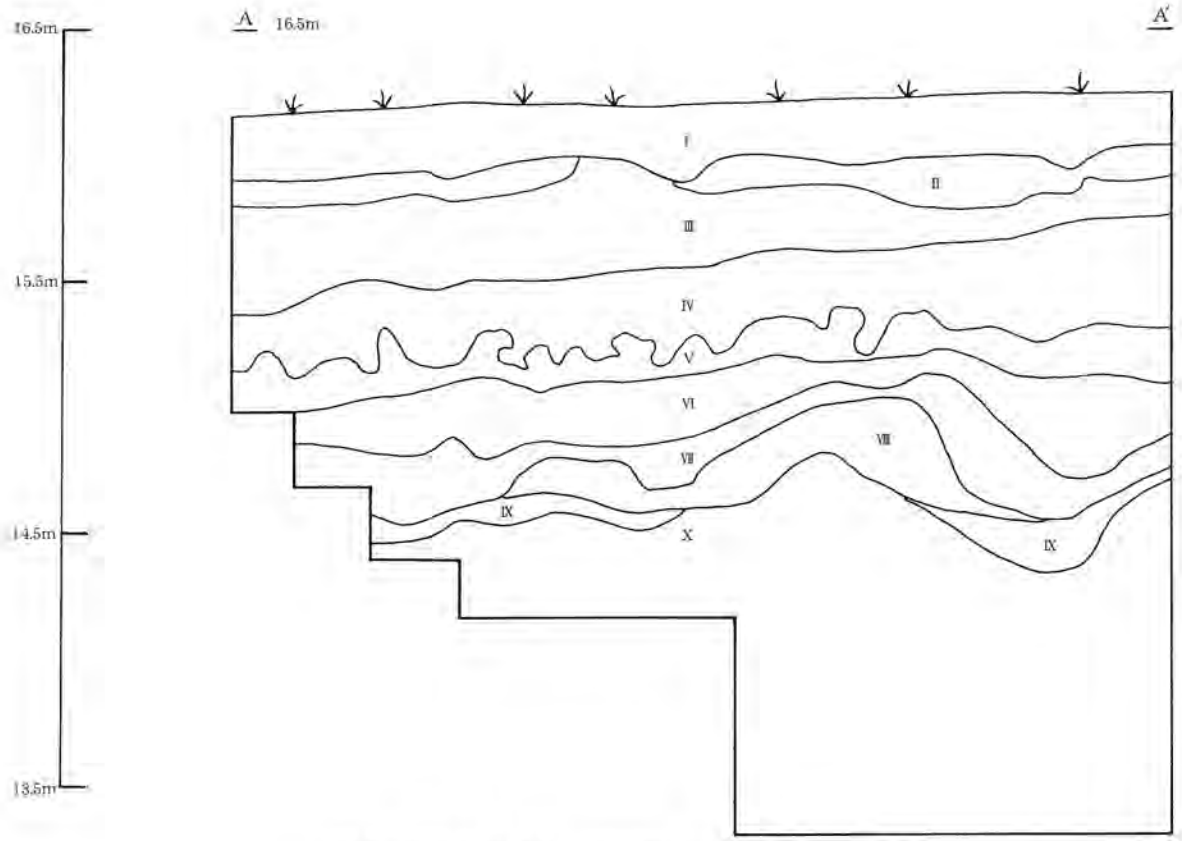


図３　基本土層（Ａ－259グリッド南壁）

Ａ－259グリッド南壁深掘りの土層注記

Ⅰ層	10YR1.7/1	黒色土　現表土。
Ⅱ層	10YR2/3	黒褐色土　Ⅲ層に似るがやや褐色がかる。
Ⅲ層	10YR2/2	黒色土　全層中最も黒い。Ⅴ層粒子を僅かに混入。遺構は本層中から掘り込まれている。
Ⅳ層	10YR5/6	黄褐色土　Ⅲ層土からⅤ・Ⅵ層土への漸移層。Ⅲ層土を基調にⅤ層土粒、塊を多量に含む。Ⅴ層との層界は波状をなす。
Ⅴ層	10YR7/6	明黄褐色土　Ⅵ層と同様であるが、全体的にⅥ層よりは粘性があり、粒子も細かい。
Ⅵ層	10YR7/6	明黄褐色土　浮石粒主体の層で、千曳浮石に対応するものと推定される。
Ⅶ層	10YR6/2	灰黄褐色粘土　粘性が強くよく締まる。場所により白色の度合いが強くなる部分と赤みを帯びる部分がある。
Ⅷ層	10YR5/4	にぶい黄褐色土　シルト質でやや粘性を帯びる。
Ⅸ層	10YR5/4	にぶい黄褐色土　Ⅶ層土と同様であるが、Ⅹ層土を多量に混入。
Ⅹ層	10YR5/2	灰黄褐色砂質土　砂質土層が続くが層厚数㎜のシルトを層状に挟在し互層をなす。

の化石（上北町出土）や青森象の化石（七戸町出土）が確認された層としても知られる。

新納屋（1）遺跡は鷹架沼と市柳沼の間の七鞍段丘上に立地するが、遺跡北方にはさらに無名の小沼とそこから東流する小河川がある。遺跡は、それらの沼や河川の影響による狭長な侵食に取り残されたように東に突き出した舌状の細長い台地上に位置する。

市柳沼の原型となる凹地は最終氷期の海退に伴う河川の下刻作用によって形成され、後の海水準変動の影響を受けて沼となったようである。水深は最深部で約3.6mほどで、縄文海進時には海となっていたようである。

図３は新納屋（1）遺跡の基本土層である。深掘りした場所は土層の堆積が比較的安定しており、黒色土の遺存状態が良好な部分を選んだ。図示したのは調査区中央西寄りのＡ－259グリッドの南壁である。

（太田原　潤）

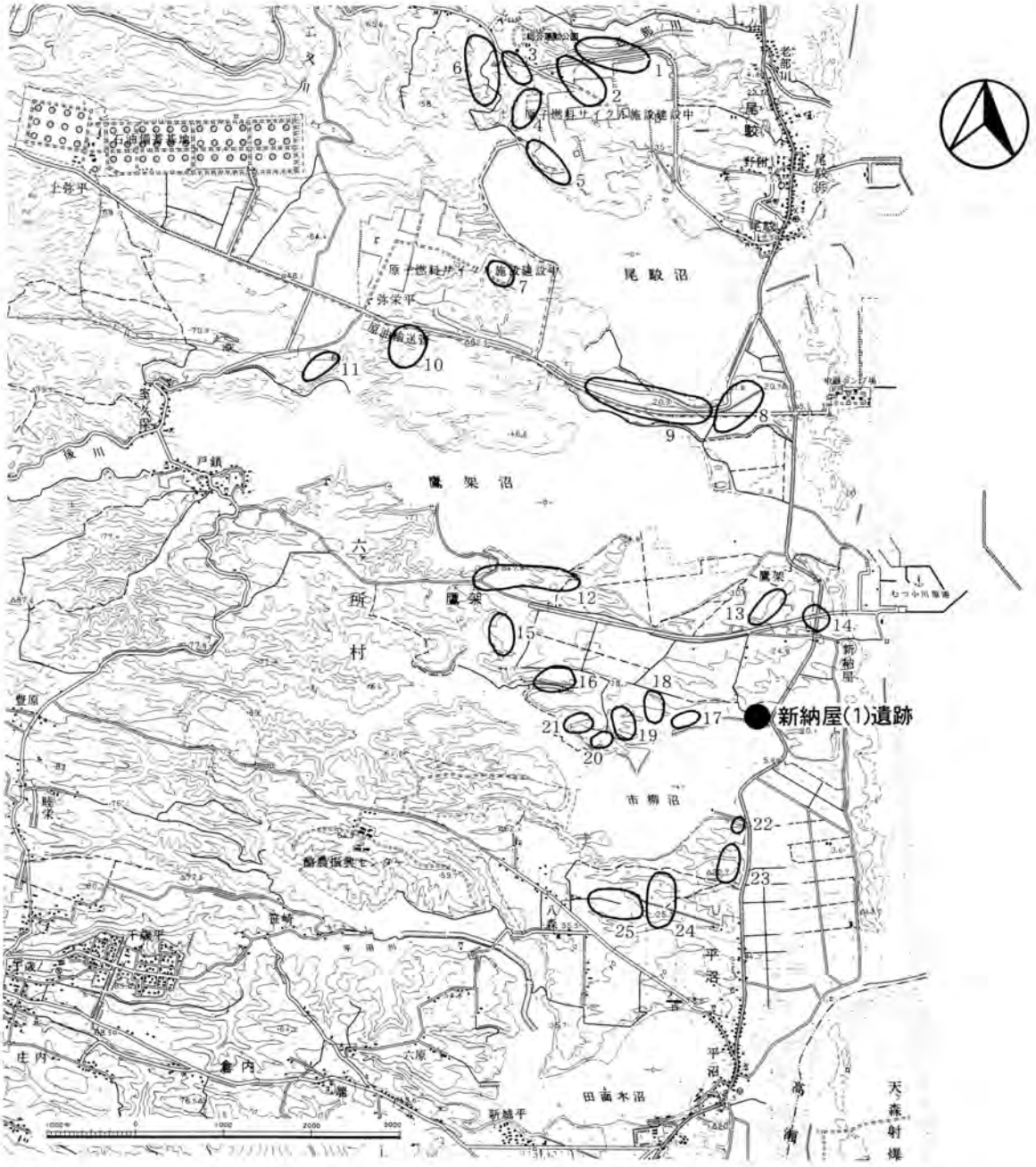
引用・参考文献

佐々木辰雄　1998「第八編 自然　第一章 地誌」『六ヶ所村史 下巻Ⅱ』 六ヶ所村史刊行委員会
水野　裕他　1971『むつ小川原開発地域 土地分類基本調査　平沼』 青森県むつ小川原開発室
松山　　力　1990「遺跡と周辺の地形・地質」『幸畑(7)遺跡』青森県教育委員会
山口　義伸　1993「遺跡周辺の地形及び地質」『家ノ前遺跡・幸畑(7)遺跡Ⅱ』青森県教育委員会

第２節 周辺の遺跡

六ヶ所村から上北町にかけての太平洋岸地域には、北から尾駮沼・鷹架沼・市柳沼・田面木沼・小川原湖と湖沼が連なり、湖沼群を形成する。湖沼群は海岸線と隣接するため、縄文海進時には、入り江を作り、豊かな自然環境を形成した。新納屋（1）遺跡の周辺には、湖沼に接する多くの遺跡が点在し、縄文世界を形成した。当遺跡に接する市柳沼北岸には、幸畑（1）・（4）・（3）遺跡、鷹架沼と市柳沼の中間付近に幸畑（6）・(10) 遺跡が所在する。これらは平成７年（1995）から平成９年（1997）までに青森県埋蔵文化財調査センターが調査を実施した。幸畑（1）遺跡からは、縄文早期中葉の貝殻文系土器（白浜・小舟渡平式）に伴って円孔・突瘤（内瘤）を施した土器が出土した。このような土器は北海道に類例がみられ、また尾駮沼北岸の上尾駮（2）遺跡において白浜式に分類された中に確認される。当遺跡からは、57基の溝状土坑が確認された。周辺の遺跡では、幸畑（1）遺跡から60基、尾駮沼南岸の表館（1）遺跡から17基、尾駮沼と鷹架沼に挟まれた発茶沢（1）遺跡からは 669基、鷹架沼南岸の幸畑（7）遺跡からは12基の溝状土坑が確認された。また表館（1）遺跡からは、昭和62年（1987）の調査において草創期の隆起線文土器が出土し、同年に発茶沢（1）遺跡からも隆起線文土器が出土している。尾駮沼北岸の上尾駮（1）遺跡からは、縄文時代前期末の竪穴住居17基と土坑が94基出土した。尾駮沼北岸の富ノ沢（2）遺跡からは、中期前半から後半にかけての集落跡が確認された。

（野村　信生）



1　大石平(２)遺跡（縄文早～後・弥生）
2　大石平(１)遺跡（縄文早～後・弥生）
3　富ノ沢(１)遺跡（縄文中・後）
4　上尾駮(１)遺跡（縄文前～後）
5　上尾駮(２)遺跡（縄文早～後・弥生・平安）
6　富ノ沢(２)遺跡（縄文中・後）
7　沖附(２)遺跡（縄文中・後）
8　表館(１)遺跡（縄文早～後・平安）
9　発茶沢(１)遺跡（縄文早～後・平安）
10　弥栄平(１)遺跡（縄文中・後）
11　弥栄平(２)遺跡（縄文後・平安）
12　幸畑(７)遺跡（縄文早～後）
13　鷹架遺跡（縄文）
14　新納屋(２)遺跡（縄文早・後）
15　幸畑(10)遺跡（縄文早・中・後）
16　幸畑(６)遺跡（縄文後）
17　幸畑(１)遺跡（縄文早～後・弥生）
18　幸畑(４)遺跡（縄文中・後）
19　幸畑(３)遺跡（縄文晩・弥生）
20　幸畑(５)遺跡（縄文前・後）
21　幸畑(２)遺跡（縄文前）
22　市柳沼遺跡（縄文）
23　追舘(２)遺跡（縄文後）
24　平沼北堤遺跡（縄文前～後・弥生・平安）
25　八森遺跡（縄文中・平安）

図４　新納屋(1)遺跡と周辺の遺跡

第3章 遺構と遺物

第1節 概要

検出された遺構は溝状土坑57基で、住居跡、溝跡等、他の遺構はまったく検出されていない。

これらの溝状土坑は遺物が伴うものも少なく、構築時期が不明確なものが大半であるが、遺構内から検出された遺物は縄文時代早期のものがほとんどである。重複する溝状土坑も散見されるが、これは溝状土坑が限定された一時期に構築されたものではないことを示すものと思われる。その年代幅がどれくらいのものかは明らかでないが、土器型式から類推すると日計式期から白浜式期にかけての時期を想定することもできる。しかしながら、溝状土坑を落とし穴として考えると、これらの遺物が、必ずしも遺構の構築時期を示しているとは限らない。

溝状土坑の分布を見ると疎密の傾向が看取されるが、これらは遺跡内の微地形に対応しているようである。調査区内では、大きな地形変化はないものの緩い起伏が認められる。分布が疎の部分は起伏のピーク付近または谷付近にあたり、分布が密な部分は起伏のピークに続く緩斜面にあたるようである。

隣接する幸畑（1）遺跡からも多数の溝状土坑が確認されているが、本遺跡周辺は縄文時代の狩猟場だった可能性も考えられる。

なお、溝状土坑の断面形態が途中で大きく屈曲する場合は、屈曲部より上位を上部、下位を下部と便宜的に表記した。

（太田原 潤）

第2節 縄文時代の遺構と遺物

第1号溝状土坑

［位置］　Z－249グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.3mである。

［平面形］　確認面では不整な長楕円形であるが，下部上面では中央部がくびれた狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で、両端は僅かに外傾して立ち上がる。短軸方向は底面からほぼ直立して立ち上がり、上部で外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸304×短軸60×深さ66cmである。最大長は確認面から8cm下位で約290cmである。

［長軸方向］N－85°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

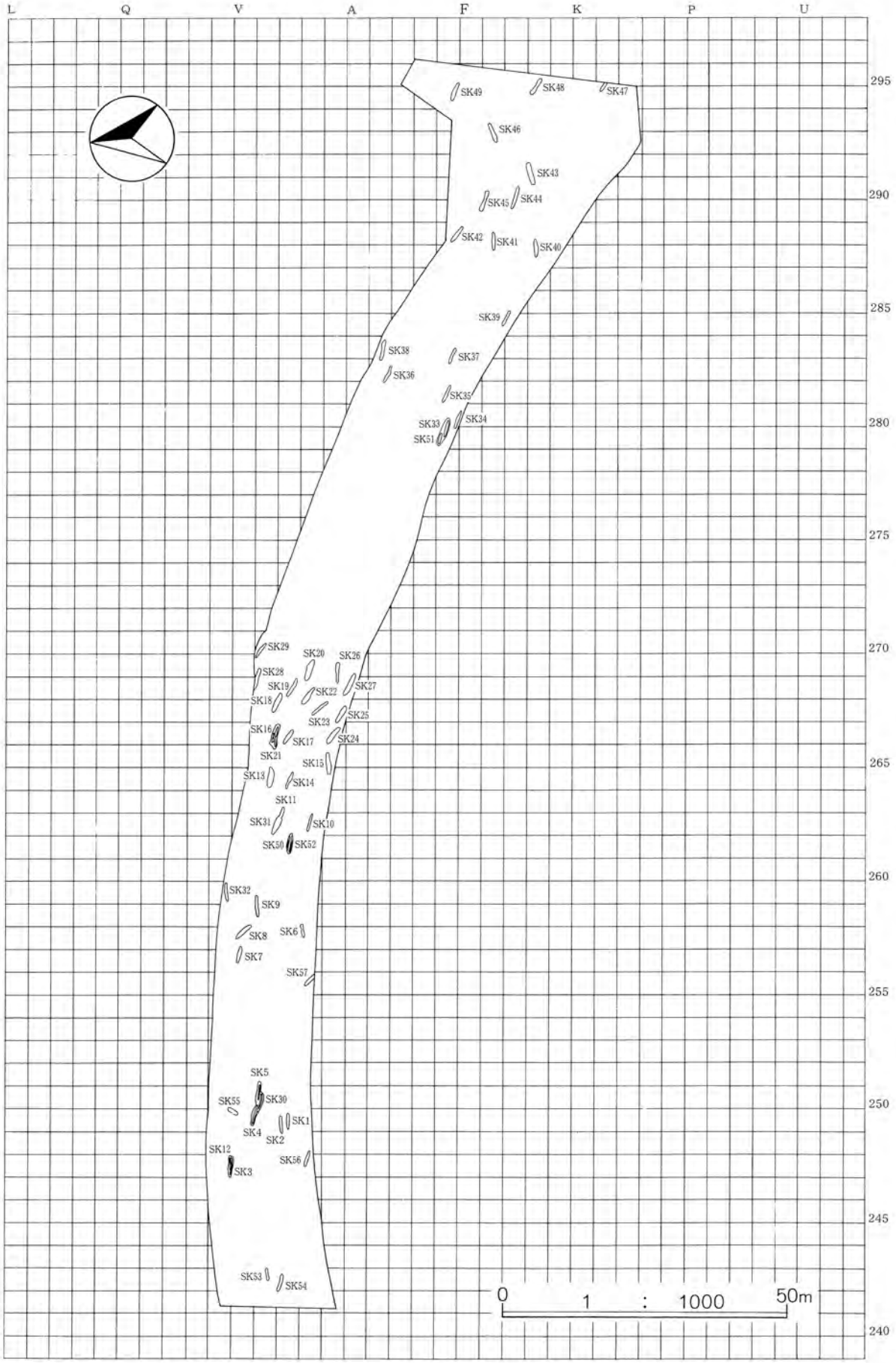

L
Q
V
A
F
K
P
U
295
290
285
280
275
270
265
260
255
250
245
240
SK49
SK48
SK47
SK46
SK43
SK45
SK44
SK42
SK41
SK40
SK39
SK38
SK37
SK36
SK35
SK33
SK34
SK51
SK29
SK20
SK26
SK28
SK19
SK22
SK27
SK18
SK23
SK25
SK16
SK17
SK24
SK21
SK15
SK13
SK14
SK11
SK31
SK10
SK50
SK52
SK32
SK9
SK8
SK6
SK7
SK57
SK5
SK55
SK30
SK1
SK4
SK2
SK12
SK56
SK3
SK53
SK54
0
1
:
1000
50m

図５　遺構配置図

第2号溝状土坑

［位置］　Z－248・249グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.2mである。

［平面形］　確認面では長楕円形であるが、下部上面では中央部がくびれた歪んだ楕円形となる。

［断面形］　長軸方向、短軸方向ともに底面が比較的平坦で、両端はほぼ直立し、上部で外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸304×短軸44×深さ58cmである。最大長は確認面から47cm下位で約320cmである。

［長軸方向］　N－80°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第3号溝状土坑

［位置］　W－246・247、X－247グリッドで確認されている。確認面の標高は約13.4mである。

［平面形］　第12号溝状土坑との重複のため一部不明瞭ではあるが、確認面では長楕円形で、下部上面ではより狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦で、西端はほぼ直立して下部上面付近で一旦内傾した後屈曲して外傾する。東端はオーバーハング気味に内傾した後緩く外傾して立ち上がる。短軸方向は底面からほぼ直立して立ち上がり、上部で外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸368×短軸82×深さ155cmである。最大長は確認面から38cm下位で約362cmである。

［長軸方向］　N－89°－E

［重複］　第12号溝状土坑と重複する。本溝状土坑の方がより新期である。

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第4号溝状土坑

［位置］　X－249、X・Y－250グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.3mである。

［平面形］　不整な長楕円形となるようであるが、第5号、第30号溝状土坑との重複のため全貌は不明である。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で、西端はほぼ直立して立ち上がる。東端は重複のため不明である。短軸方向は底面から緩く外傾しながら立ち上がる。

［規模］　確認面での大きさは重複のため不明確であるが、深さは213cmである。最大長は確認面から112cm下位で約612cmである。

［長軸方向］　N－98°－E

［重複］　第5号、第30号溝状土坑と重複するが、新旧関係は不明確である。

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第5号溝状土坑

［位置］　Y－250・251グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.3mである。

［平面形］　確認面では長楕円形となるようであるが、重複のため一部不明確である。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で、東端は内湾気味に立ち上がり、上部で外傾する。短軸方向は底面から緩く外傾しながら立ち上がり、上部でさらに外傾する。

［規模］　確認面での大きさは重複のため不明確であるが、深さは161cmである。最大長は確認面から116cm下位で約362cmである。

［長軸方向］　N－89°－E

［重複］　第4号、第30号溝状土坑と重複するが、新旧関係は不明確である。

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第6号溝状土坑

［位置］　A－257・258、Z－258グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.6mである。

［平面形］　ややいびつな長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で西端はオーバーハング気味に立ち上がり上部で外傾する。東端は緩く外傾して立ち上がり上部でさらに外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸276×短軸66×深さ70cmである。最大長は確認面から37cm下位で約268cmである。

［長軸方向］　N－80°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第7号溝状土坑

［位置］　X－250・257グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.1mである。

［平面形］　確認面でほぼ長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で、両端はオーバーハング気味に立ち上がり上部で外傾する。短軸方向は底面から緩く外傾しながら立ち上がり、下部上端で大きく開いた後内湾気味に立ち上がる。

［規模］　確認面での大きさは長軸306×短軸78×深さ136cmである。最大長は確認面から90cm

下位で約342cmである。

[長軸方向]　N－98°－E

[重複]　なし

[堆積土]　自然堆積

[遺物]　なし

[時期]　縄文時代

第8号溝状土坑

[位置]　X－257・258グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.1mである。

[平面形]　確認面では不整な長楕円形である。

[断面形]　長軸方向は底面がほぼ平坦であるが、東側で段を有する。西端は外傾して立ちあがった後内傾し、上部で再び外傾する。東端は内湾気味に立ち上がり、上部で外傾する。

[規模]　確認面での大きさは長軸370×短軸92×深さ150cmである。最大長は確認面から92cm下位で約381cmである。

[長軸方向]　N－132°－E

[重複]　なし

[堆積土]　自然堆積

[遺物]　なし

[時期]　縄文時代

第9号溝状土坑

[位置]　Y－258・259グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.1mである。

[平面形]　確認面では長楕円形である。

[断面形]　長軸方向は底面に若干起伏があり、西端は内傾した後外反して立ち上がるが、比較的平坦で両端はほぼ直立する。東端も同様であるが上部でほぼ直立する。短軸方向は底面から緩く外傾して立ち上がる。

[規模]　確認面での大きさは長軸400×短軸60×深さ129cmである。最大長は確認面から118cm下位で約406cmである。

[長軸方向]　N－81°－E

[重複]　なし

[堆積土]　自然堆積

[遺物]　覆土中から珪質頁岩製の剥片が1点出土している（図7－1）。剥離面の構成から考えると、なんらかの石器の制作途中に、製作者の意に反して本体から剥離してしまったものである可能性が高い。部分的に被熱している。

[時期]　縄文時代

第10号溝状土坑

［位置］　Ａ－263グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.0mである。

［平面形］　確認面では長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で両端は外傾した後内傾し、上部で再び外傾する。短軸方向は底面から緩く外傾しながら立ち上がる。

［規模］　確認面での大きさは長軸344×短軸66×深さ112cmである。最大長は確認面から74cm下位で約328cmである。

［長軸方向］　Ｎ－99°－Ｅ

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　小片なので図示できないが、早期中葉のものと思われる土器片２点と石器３点が覆土中から出土している。石器は石鏃と石槍と剥片であるが、前二者を図示した。(図７－２、３)共に二次加工は粗雑で未製品である可能性も考えられる。

［時期］　縄文時代

第11号溝状土坑

［位置］　Ａ－263・264グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.1mである。

［平面形］　不整な長楕円形になるものと思われるが、第31号溝状土坑との重複のため全貌は不明である。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦で、東端はほぼ直立して立ち上がり上部で外傾する。西端は重複のため不明である。短軸方向は底面からほぼ直立して立ち上がり上部で外傾する。

［規模］　確認面での大きさは重複のため不明であるが深さは141cmである。最大長は確認面から４cm下位で約490cmである。

［長軸方向］　Ｎ－102°－Ｅ

［重複］　第31号溝状土坑と重複するが新旧関係は不明確である。

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第12号溝状土坑

［位置］　Ｗ－247グリッドで確認されている。確認面の標高は約13.4mである。

［平面形］　不整な長楕円形のようであるが、第３号溝状土坑と重複するため全貌は不明確である。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で、東端は全体的には緩く外傾しているが、下部下半はオーバーハング気味に内湾している。西端は第３号溝状土坑の構築のため失われている。短軸方向は底面から緩く外傾して立ち上がる。

［規模］　確認面での大きさは第3号溝状土坑との重複のため不明であるが、深さは156cmである。最大長は確認面から57cm下位で約370cmである。

［長軸方向］　N－81°－E

［重複］　第３号溝状土坑と重複する。本溝状土坑の方がより古期である。

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第13号溝状土坑

［位置］　Y－264・265グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.0mである。

［平面形］　確認面では不整な長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦で、西端はほぼ直立し、上部で外傾する。短軸方向は底面から緩く外傾しながら立ち上がり、上部でさらに大きく外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸386×短軸108×深さ172cmである。最大長は確認面から13cm下位で約378cmである。

［長軸方向］　N－89°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第14号溝状土坑

［位置］　Z－264グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.1mである。

［平面形］　確認面では不整な長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦で西端はほぼ直立して立ち上がり、下部上端付近で大きく内傾した後外傾する。東端は大きく内湾気味に立ち上がり、上部で外傾する。短軸方向は底面から緩く外傾しながら立ち上がり、上部でさらに外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸324×短軸72×深さ175cmである。最大長は確認面から20cm下位で約400cmである。

［長軸方向］　N－109°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　いずれも小片であるので図示できないが、早期中葉のものと思われる土器片が4点、珪質頁岩製の剥片、砕片が4点出土している。

［時期］　縄文時代

第15号溝状土坑

［位置］　B－264・265グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.0mである。

［平面形］　確認面では長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦で両端はほぼ直立して立ち上がり、上部で外傾した後さらに直立する。短軸方向は底面から若干の起伏を持ちながら緩く外傾して立ち上がり、上部でさらに外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸402×短軸112×深さ185cmである。最大長は確認面から６cm下位で約398cmである。

［長軸方向］　N－79°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　珪質頁岩製の石錐が１点（図７－４）、剥片、砕片が４点出土している。

［時期］　縄文時代

第16号溝状土坑

［位置］　Y－265・266、Z－266グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.9mである。

［平面形］　不整な長楕円形になるものと思われるが、第21号溝状土坑との重複のため部分的に不明確である。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦で東端はほぼ直立するが、西端は重複のため不明である。短軸方向は底面からほぼ直立して立ち上がり、上部で外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸398×短軸80×深さ128cmである。最大長は確認面から4cm下位で約408cmである。

［長軸方向］　N－107°－E

［重複］　第21号溝状土坑と重複する。本溝状土坑の方がより新期の構築と思われる。

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第17号溝状土坑

［位置］　Z－266グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.8mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形で、下部上面ではさらに狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦で西端はほぼ直立し、東端は起伏がある。短軸方向は底面から上部に向けて外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸314×短軸94×深さ147cmである。最大長は確認面から45cm下位で約290cmである。

［長軸方向］　N－118°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第18号溝状土坑

［位置］　Y－267・268、Z－267・268グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.8mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形で、下部上面ではさらに狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦で両端はほぼ直立する。短軸方向は底面からほぼ直立して立ち上がり、上部で外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸384×短軸104×深さ200cmである。最大長は確認面から4cm下位で約380cmである。

［長軸方向］　N－110°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第19号溝状土坑

［位置］　Z－268グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.9mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形で、下部上面はさらに狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で，西端は一旦外傾した後オーバーハング気味に内傾し、上部で再び外傾する。東端は一旦内傾して立ち上がった後、ほぼ直立する。短軸方向は南端では外傾して立ち上がり、一旦内傾した後、再び外傾する。北端では底面からほぼ直立して立ち上がり、上部で外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸375×短軸74×深さ157cmである。最大長は確認面から55cm下位で約378cmである。

［長軸方向］　N－118°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第20号溝状土坑

［位置］　A－268・269グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.0mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形である。下部上面ではさらに狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で両端は緩やかに外傾して立ち上がる。短軸方向は底面から緩やかに外傾して立ち上がり、北端上部は底面に平坦面を有し、外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸383×短軸124×深さ186cmである。最大長は確認面から8cm下位で約376cmである。

［長軸方向］　N－105°－E

［重複］　なし
［堆積土］　自然堆積
［遺物］　なし
［時期］　縄文時代

第21号溝状土坑

［位置］　Y－265・266、Z－266グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.9mである。
［平面形］　不整な長楕円形のようであるが、第16号溝状土坑との重複のため全貌は不明である。
［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦であるが東側に向けて緩く傾斜している。西端は内傾した後上部で大きく外傾する。東端は内湾気味に立ち上がり、上部で外傾する。
［規模］　確認面での大きさは重複のため不明であるが、深さは126cmである。最大長は確認面から9cm下位で約368cmである。
［長軸方向］　N－78°－E
［重複］　第16号溝状土坑と重複する。本溝状土坑の方がより古期の構築と思われる。
［堆積土］　自然堆積
［遺物］　なし
［時期］　縄文時代

第22号溝状土坑

［位置］　A－267・268グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.0mである。
［平面形］　確認面では不整な長楕円形である。下部上面ではさらに狭長な楕円形である。
［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で両端は東側に膨らみを有するが、緩やかに外傾する。短軸方向は底面からほぼ直立して立ち上がり、上部で外傾する。
［規模］　確認面での大きさは長軸365×短軸113×深さ188cmである。最大長は確認面から12cm下位で約354cmである。
［長軸方向］　N－122°－E
［重複］　なし
［堆積土］　自然堆積
［遺物］　なし
［時期］　縄文時代

第23号溝状土坑

［位置］　A－267、B－267グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.9mである。
［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形である。下部上面ではさらに狭長な楕円形となる。
［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦で両端はほぼ直立して立ち上がる。短軸方向は底面からほぼ直立して立ち上がり、上部で外傾する。
［規模］　確認面での大きさは長軸382×短軸74×深さ154cmである。最大長は確認面で約373cm。

［長軸方向］　N－135°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第24号溝状土坑

［位置］　B－266、B－265グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.9mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形であるが、下部上面では両端が膨らみ中央部がくびれた歪んだ楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦であるが、西端は外傾した後、オーバーハング気味に内傾し、再び外傾する。東端はほぼ直立して立ち上がった後、オーバーハング気味に内傾し、上部は再び直立する。短軸方向は底面からほぼ直立し、上部で外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸387×短軸105×深さ162cmである。最大長は確認面から90cm下位で約510cmである。

［長軸方向］　N－122°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　土器片が５点、石器が18点覆土中から出土している。図示した２点の土器は共に外面に貝殻条痕文、内面にミガキ調整が施される（図６－１、２）。他は小片のため図示しなかったが、いずれも早期中葉のものと思われる。図示した石器は基部の欠損した石鏃と主要剥離面側に刃こぼれ状の使用痕が残る剥片であるが、他は二次加工も使用痕もみられない剥片、砕片である（図７－５、６）。全て珪質頁岩製である。

［時期］　縄文時代

第25号溝状土坑

［位置］　B－266・267、C－267グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.9mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形であるが、下部上面では両端が膨らみ、中央部がくびれた歪んだ楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦であるが、中央部が台上に隆起している。両端とも一旦内傾して立ち上がった後上部で外傾する。短軸方向は底面からほぼ直立して立ち上がり、上部で外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸333×短軸135×深さ170cmである。最大長は確認面から139cm下位で約350cmである。

［長軸方向］　N－116°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　覆土中から土器片が６点、石器が1点出土している。土器片３点を図示したが、図６－３は口縁部で横位に４条の沈線がみられる。４・５は外面に貝殻条痕文が施文され、４の内面にはミガキ調整が観察される。図示しなかったものも早期中葉の土器の小破片と思われる。石器は珪質頁岩製の剥片である。

［時期］　縄文時代

第26号溝状土坑

［位置］　Ｂ－268・269グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.9mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形で、下部上面ではさらに狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦で両端はほぼ直立し、上部で外傾する。短軸方向は底面からほぼ直立し、上部で外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸377×短軸80×深さ162cmである。最大長は確認面から６cm下位で約366cmである。

［長軸方向］　Ｎ－85°－Ｅ

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第27号溝状土坑

［位置］　Ｂ－268、Ｃ－268・269グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.8mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形で、下部上面ではさらに狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦で両端はほぼ直立して立ち上がるが、オーバーハング気味に２度内傾したのち、上部で外傾する。短軸方向は底面からほぼ直立し、上部で外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸435×短軸101×深さ162cmである。最大長は確認面で約420cmである。

［長軸方向］　Ｎ－114°－Ｅ

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第28号溝状土坑

［位置］　Ｘ－268、Ｙ－268・269グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.7mである。

［平面形］　確認面では両端が膨らんだ不整な長楕円形で、下部上面でも両端が若干膨らんだゆがんだ楕円形となる。

［断面形］　長軸方向の底面は若干起伏があり、東端はほぼ直立する。西端では直立して立ち上がっ

たのちオーバーハング気味に内傾し、上部で外傾する。短軸方向は底面からほぼ直立して立ち上がり、上部で外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸425×短軸105×深さ147cmである。最大長は確認面から117cm下位で約45cmである。

［長軸方向］　N－104°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第29号溝状土坑

［位置］　X－269、Y－269・270グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.6mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形で、下部上面ではさらに狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面が西端に向かって傾斜し、両端はほぼ直立する。短軸方向は底面からほぼ直立し、上部で緩やかに外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸353×短軸57×深さ165cmである。最大長は確認面から12cm下位で約348cmである。

［長軸方向］　N－120°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第30号溝状土坑

［位置］　Y－249・250グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.3mである。

［平面形］　不整な長楕円形となるようであるが、第4号、第5号溝状土坑との重複のため全貌は不明である。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で、東端はほぼ直立して立ちあがり、下部上端付近で一旦内傾した後外傾する。両端はほぼ直立する。西端は重複のため不明確である。短軸方向は底面から緩く外傾して立ち上がる。

［規模］　確認面での大きさは重複のため不明確であるが深さは168cmである。最大長は確認面から34cm下位で約586cmである。

［長軸方向］　N－95°－E

［重複］　第４号、第５号溝状土坑と重複するが、新旧関係は不明確である。

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第31号溝状土坑

［位置］　Ｙ－261・262、Ｚ－262・263グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.9mである。

［平面形］　確認面で不整な長楕円形になるようであるが第11号溝状土坑との重複のため全貌は不明である。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦であるが両端がやや浅くなる。西端はやや内湾気味に立ち上がり上部でほぼ直立する。東端は重複のため不明である。

［規模］　確認面での大きさは重複のため不明確であるが深さは117cmである。最大長は確認面から５cm下位で約425cmである。

［長軸方向］　Ｎ－109°－Ｅ

［重複］　第11号溝状土坑と重複するが、新旧関係は不明確である。

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第32号溝状土坑

［位置］　Ｗ－259・260グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.9mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で両端は直立する。短軸方向は底面から上部にかけてやや外傾して立ち上がる。

［規模］　確認面での大きさは長軸361×短軸47×深さ145cmである。最大長は確認面から103cm下位で約356cmである。

［長軸方向］　Ｎ－79°－Ｅ

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　覆土中から早期中葉のものと思われる土器片が1点出土しているが小片のため図示していない。

［時期］　縄文時代

第33号溝状土坑

［位置］　Ｇ－279・280グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.4mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形で、下部上面はさらに狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で西端はほぼ直立し上部で外傾する。東端はオーバーハング気味に内傾し、直立したのち上部で外傾する。短軸方向は底面から上部に向けて外傾して立ち上がる。

［規模］　確認面での大きさは長軸400×短軸128×深さ148cmである。最大長は確認面から107cm下位で約390cmである。

[長軸方向]　N－98°－E

[重複]　第51号溝状土坑と重複するが、新旧関係は不明確である。

[堆積土]　自然堆積

[遺物]　覆土中から土器片が８点、石器が27点出土している。図示した２点の土器は同一固体と考えられる。縄文を施した後に重層山形文を施文していることから早期前葉の日計式と考えられる（図６－６、７)。それ以外のものは早期中葉に属するものと思われる。石器は4点図示した。図７－７は石錐、８、９は削器、10は剥片である。図示しなかったものは小形の石核1点以外は剥片、砕片である。10は頁岩製、他は珪質頁岩制である。10は底面近くの壁面に突き刺さった状態で検出された。他に径４cm程の玉髄の円礫、砂岩製の偏平礫、チャート製の破礫が各１点ずつ出土している。

[時期]　縄文時代

第34号溝状土坑

[位置]　G－279・280，H－280グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.1mである。

[平面形]　確認面ではほぼ長楕円形である。

[断面形]　長軸方向は底面に若干の起伏があり、両端は外傾して立ち上がる。短軸方向は底面からやや外傾して立ち上がり、上部でさらに外傾する。

[規模]　確認面での大きさは長軸350×短軸54×深さ142cmである。

[長軸方向]　N－104°－E

[重複]　なし

[堆積土]　自然堆積

[遺物]　覆土中から石器が７点出土しているが、いずれも小形の剥片、砕片であるため図示していない。全て珪質頁岩制である。

[時期]　縄文時代

第35号溝状土坑

[位置]　G－281グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.0mである。

[平面形]　確認面では不整な長楕円形である。

[断面形]　長軸方向は底面がほぼ平坦で両端はやや外傾して立ち上がる。短軸方向は底面からやや外傾して立ち上がり、上部でさらに外傾する。

[規模]　確認面での大きさは長軸340×短軸47×深さ122cmである。最大長は確認面から６cm下位で約338cmである。

[長軸方向]　N－108°－E

[重複]　なし

[堆積土]　自然堆積

[遺物]　なし

[時期]　縄文時代

第36号溝状土坑

［位置］　Ｄ－281・282、Ｅ－282グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.8mである。

［平面形］　確認面では不整な長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で、両端は若干の起伏を有し、やや外傾して立ち上がる。短軸方向は底面から直立して立ち上がり、上部で外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸344×短軸68×深さ121cmである。最大長は確認面から10cm下位で約336cmである。

［長軸方向］　Ｎ－109°－Ｅ

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　覆土中から土器片が1点出土している。図６－８は外面に貝殻条痕文と刻目をめぐらし、内面にミガキ調整を施したものである。他に砂岩製の破礫も２点出土している。

［時期］　縄文時代

第37号溝状土坑

［位置］　Ｇ－282・283グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.8mである。

［平面形］　確認面では不整な長楕円形である。下部上面ではさらに狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で両端はやや外傾して立ち上がる。短軸方向は底面からほぼ直立して立ち上がり、上部でやや外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸300×短軸48×深さ102cmである。最大長は確認面で約297cmである。

［長軸方向］　Ｎ－106°－Ｅ

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第38号溝状土坑

［位置］　Ｄ－283、Ｅ－282グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.7mである。

［平面形］　確認面では不整な長楕円形である。下部上面ではさらに狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦である。西端はほぼ直立して立ち上がり、下部上面で内傾し、上部で外傾する。東端はやや外傾して立ち上がる。短軸方向は底面から下部上面にかけて内傾して立ち上がり、上部は外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸376×短軸66×深さ121cmである。最大長は確認面から８cm下位で約358cmである。

［長軸方向］　Ｎ－97°－Ｅ

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第39号溝状土坑

［位置］　Ｉ－284、Ｊ－284・285グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.8mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦である。北西端は直立気味に立ち上がり、南東端は若干起伏を有するが、ほぼ直立する。短軸方向は底面からやや外傾して立ち上がる。

［規模］　確認面での大きさは長軸305×短軸50×深さ145cmである。最大長は確認面から68cm下位で約314cmである。

［長軸方向］　N－112°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　砂岩製と安山岩製の破礫が各１点出土している。

［時期］　縄文時代

第40号溝状土坑

［位置］　K－287・288グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.8mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で両端はやや外傾して立ち上がる。短軸方向は底面からやや外傾して立ち上がる。

［規模］　確認面での大きさは長軸335×短軸56×深さ151cmである。最大長は確認面から７cm下位で約326cmである。

［長軸方向］　N－82°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第41号溝状土坑

［位置］　Ｉ－287・288グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.8mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦である。西端はほぼ直立して立ち上がり、上部で外傾する。東端はやや外傾して立ち上がり、下部上面で緩やかに内傾する。短軸方向は底面からやや外傾して立ち上がり、上部は外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸322×短軸67×深さ164cmである。最大長は確認面から12cm

下位で約320cmである。

［長軸方向］　N－82°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　覆土中から土器が8点、石器1点が出土している。図6－11は押型文に横位の沈線が充填されることから、早期前葉の日計式と考えられる。9・10は外面にLR単節縄文が施文される。石器は図示していないが、砂岩製の小形の剥片である。

［時期］　縄文時代

第42号溝状土坑

［位置］　G・H－288グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.8mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦で両端はほぼ直立して立ち上がり、上部は緩やかに外傾する。短軸方向は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。

［規模］　確認面での大きさは長軸340×短軸74×深さ166cmである。最大長は確認面から3cm下位で約330cmである。

［長軸方向］　N－123°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　凝灰岩製の破礫が4点出土している。同一固体と思われ、2点づつ接合する（図7－11、12)。擦痕がみられることから砥石として使用されたものと思われる。

［時期］　縄文時代

第43号溝状土坑

［位置］　K－290・291、J－291グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.7mである。

［平面形］　確認面では中央付近が若干くびれる不整な長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面に若干起伏がある。西端は起伏しながらほぼ直立して立ち上がり、下部上面で内傾し、上部で外傾する。東端はほぼ直立して立ち上がり、下部上面で内傾し、上部で緩やかに外傾する。短軸方向は底面から下部上面にかけて膨らみを持って立ち上がり、上部は外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸420×短軸120×深さ169cmである。最大長は確認面から137cm下位で約412cmである。

［長軸方向］　N－67°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　図7－13に示した安山岩製の石錘が1点と砂岩製の偏平礫が1点出土している。

［時期］　縄文時代

第44号溝状土坑

［位置］　Ｊ－289・290グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.6mである。

［平面形］　確認面では不整な長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面に若干起伏があり，両端は一端外傾した後オーバーハング気味に内傾して、上部で外傾する。短軸方向は底面から緩やかに外傾して上部でさらに外傾して立ち上がる。

［規模］　確認面での大きさは長軸405×短軸70×深さ84cmである。最大長は確認面から56cm下位で約432cmである。

［長軸方向］　Ｎ－100°－Ｅ

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　図示していないが覆土中から珪質頁岩製の剥片、砕片が５点出土している。

［時期］　縄文時代

第45号溝状土坑

［位置］　Ｉ－289・290、Ｈ－289グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.6mである。

［平面形］　確認面では中央付近がくびれる不整な長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦である。北西端は膨らみを持つがほぼ直立して立ち上がり、南東端は底面からオーバーハングして内傾し、上部で外傾して立ち上がる。短軸方向は底面から緩やかに外傾して立ち上がり、上部でさらに外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸380×短軸93×深さ79cmである。最大長は確認面から64cm下位で約403cmである。

［長軸方向］　Ｎ－103°－Ｅ

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第46号溝状土坑

［位置］　Ｉ－292・293グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.7mである。

［平面形］　確認面では長楕円形で、下部上面ではさらに狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面の中央付近が東から西に傾斜するが、ほぼ平坦面である。両端はほぼ直立して立ち上がる。短軸方向は底面から緩やかに外傾して立ち上がり、上部でさらに外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸360×短軸74×深さ151cmである。最大長は確認面から３cm下位で約358cmである。

［長軸方向］　Ｎ－63°－Ｅ

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　覆土中から外面に貝殻条痕文を施した土器片が1点（図6－12）と、砂岩製の分割礫が1点出土している。

［時期］　縄文時代

第47号溝状土坑

［位置］　N－294・295グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.0mである。

［平面形］　遺構が調査範囲外に延びるため詳細は不明であるが、不整な長楕円形と考えられる。下部上面ではさらに狭長な楕円形になると考えられる。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦で北西端はほぼ直立して立ち上がる。短軸方向は底面からほぼ直立して立ち上がり、上部で外反する。

［規模］　確認面での大きさは長軸234×短軸20×深さ108cmである。最大長は確認面から100cm下位で約240cmである。

［長軸方向］　N－114°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第48号溝状土坑

［位置］　K－294・295グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.7mである。

［平面形］　確認面では不整な長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦である。両端はほぼ直立して立ち上がり、下部上面で内傾し、上部で直立する。短軸方向は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。

［規模］　確認面での大きさは長軸330×短軸80×深さ99cmである。最大長は確認面から56cm下位で約366cmである。

［長軸方向］　N－117°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第49号溝状土坑

［位置］　J－294・295グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.7mである。

［平面形］　確認面では不整な長楕円形であるが、下部上面ではさらに狭長で西端がややふくらんだ楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦である。西端は膨らみを持って立ち上がり、下部上面で内傾し、上部で直立する。東端は直立して立ち上がり、下部上面で内傾し、上部で直立する。短軸方向は底面から直立して立ち上がり、上部で大きく外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸340×短軸120×深さ116cmである。最大長は確認面から90cm下位で約393cmである。

［長軸方向］　N－104°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第50号溝状土坑

［位置］　Z－261・262グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.8mである。

［平面形］　重複しているため不明である。

［断面形］　長軸方向は底面が西から東に傾斜するがほぼ平坦である。両端はほぼ直立して立ち上がり、下部上面で内傾し、上部で外傾する。短軸方向は重複するため南端は不明だが、北端は底面から緩やかに外傾する。

［規模］　確認面での大きさは重複のため把握できない部分もあるが、長軸295×深さ70cmである。最大長は確認面から68cm下位で約256cmである。

［長軸方向］　N－95°－E

［重複］　第52号溝状土坑と重複する。本溝状土坑の方がより古期に構築されたものと思われる。

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第51号溝状土坑

［位置］　F－279、G－279・280グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.2mである。

［平面形］　不整な長楕円形と思われるが、第33号溝状土坑との重複のため全貌は不明である。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦で両端はほぼ直立し一旦外傾した後直立する。短軸方向は底面から緩く外傾し、上部でさらに外傾する。

［規模］　確認面での大きさは重複のため不明確であるが、深さは162cmである。最大長は確認面から36cm下位で約255cmである。

［長軸方向］　N－98°－E

［重複］　第33号溝状土坑と重複するが、新旧関係は不明確である。

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第52号溝状土坑

［位置］　Ｚ－261・262グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.8mである。

［平面形］　確認面では不整な長楕円形である。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で両端は緩やかに外傾して立ち上がる。短軸方向は底面から緩やかに外傾して立ち上がり、上部でさらに外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸350×短軸42×深さ169cmである。最大長は確認面で約350cmである。

［長軸方向］　Ｎ－93°－Ｅ

［重複］　第50号溝状土坑と重複する。本溝状土坑の方がより新期に構築されたものと思われる。

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第53号溝状土坑

［位置］　Ｙ－242グリッドで確認されている。確認面の標高は約13.1mである。

［平面形］　不整な長楕円形で、西端がやや丸みを帯びる。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で両端はほぼ直立する。短軸方向は底面から内湾気味に直立し、上部で外反する。

［規模］　確認面での大きさは長軸242×短軸50×深さ125cmである。

［長軸方向］　Ｎ－86°－Ｅ

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第54号溝状土坑

［位置］　Ｚ－241・242グリッドで確認されている。確認面の標高は約13.3mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形で、下部上面はさらに狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面が比較的平坦で両端はほぼ直立する。短軸方向は底面からほぼ直立して立ち上がった後、外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸335×短軸130×深さ135cmである。最大長は確認面から20cm下位で約335cmである。

［長軸方向］　Ｎ－109°－Ｅ

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第55号溝状土坑

［位置］　Z－249・250グリッドで確認されている。確認面の標高は約13.7mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形である。他の溝状土坑に比して寸詰まりである。

［断面形］　底面に若干の起伏があり、壁面は緩く外傾して立ち上がる。他の溝状土坑に比べると長さも短く、深さも浅いのでそれらとは性格が異なる土坑であったか掘削途上の溝状土坑であった可能性も考えられる。

［規模］　確認面での大きさは長軸200×短軸90×深さ45cmである。

［長軸方向］　N－28°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第56号溝状土坑

［位置］　Z－247・248グリッドで確認されている。確認面の標高は約14.4mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形で、下部上面ではさらに狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は底面がほぼ平坦で両端とも一旦外傾した後オーバーハング気味に内傾してから上部で再び外傾する。短軸方向は底面からほぼ直立して立ち上がり、上部で外傾する。

［規模］　確認面での大きさは長軸300×短軸78×深さ102cmである。最大長は確認面から80cm下位で約312cmである。

［長軸方向］　N－110°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

第57号溝状土坑

［位置］　Z－255グリッドで確認されている。確認面の標高は約15.6mである。

［平面形］　確認面ではほぼ長楕円形で、下部上面ではさらに狭長な楕円形となる。

［断面形］　長軸方向は不明確で、短軸方向は底面から直立気味に立ち上がり上部で外傾する。

［規模］　調査区外にかかるため全貌は不明であるが確認面での幅は52×深さ130cmである。

［長軸方向］　N－139°－E

［重複］　なし

［堆積土］　自然堆積

［遺物］　なし

［時期］　縄文時代

（太田原　潤，野村　信生、下山　純子）

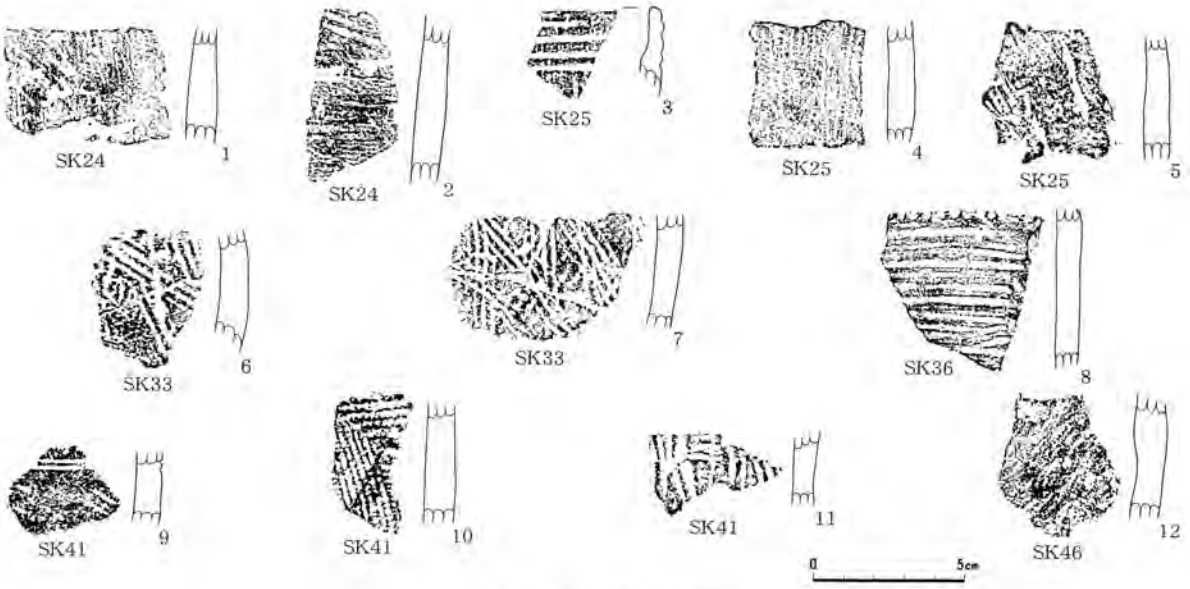


図６　遺構内出土土器

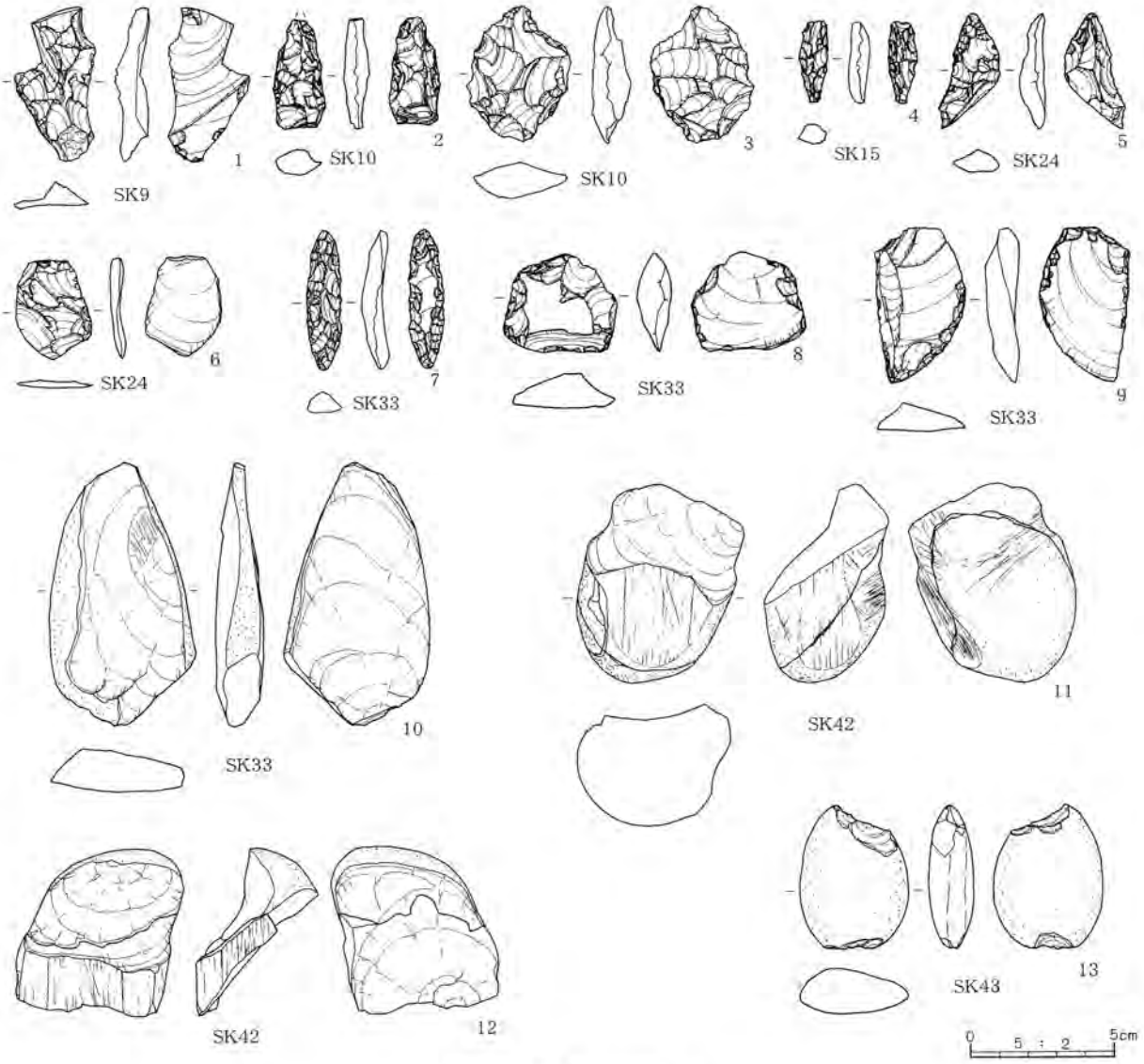


図７　遺構内出土石器

第1表　遺構内出土土器

挿図番号	遺構名	層位	部位	分類	内面色調	外面色調	外面文様・調整	内面調整	備考
図6－1	SK24	覆土	胴部	第Ⅱ群	10YR5/1	2.5YR5/2	貝殻条痕文	ミガキ	
図6－2	SK24	覆土	胴部	第Ⅱ群	10YR6/3	10YR7/2	貝殻条痕文	ミガキ	繊維混入
図6－3	SK25	覆土	口縁部	第Ⅱ群	10YR6/2	10YR3/1	横位沈線	不明	繊維混入
図6－4	SK25	覆土	胴部	第Ⅱ群	10YR8/4	10YR8/4	貝殻条痕文	ミガキ	
図6－5	SK25	覆土	胴部	第Ⅱ群	10YR7/4	10YR5/2	貝殻条痕文	不明	繊維混入
図6－6	SK33	覆土	胴部	第Ⅰ群	10YR7/4	10YR8/3	縄文・重層山形文	不明	繊維混入
図6－7	SK33	覆土	胴部	第Ⅰ群	7.5YR7/6	10YR8/3	縄文・重層山形文	不明	繊維混入
図6－8	SK36	覆土	胴部	第Ⅱ群	2.5YR8/3	2.5YR7/3	貝殻条痕文・刻目	ミガキ	繊維混入
図6－9	SK41	覆土	胴部	第Ⅱ群	10YR5/3	7.5YR6/6	LR単軸縦位・沈線	不明	
図6－10	SK41	覆土	胴部	第Ⅱ群	7.5YR5/4	7.5YR6/4	LR単軸縦位・斜位	不明	
図6－11	SK41	覆土	胴部	第Ⅰ群	7.5YR6/6	10YR7/6	押型文・充填沈線	不明	繊維混入
図6－12	SK46	覆土	胴部	第Ⅱ群	5YR6/6	10YR7/4	貝殻条痕文	不明	

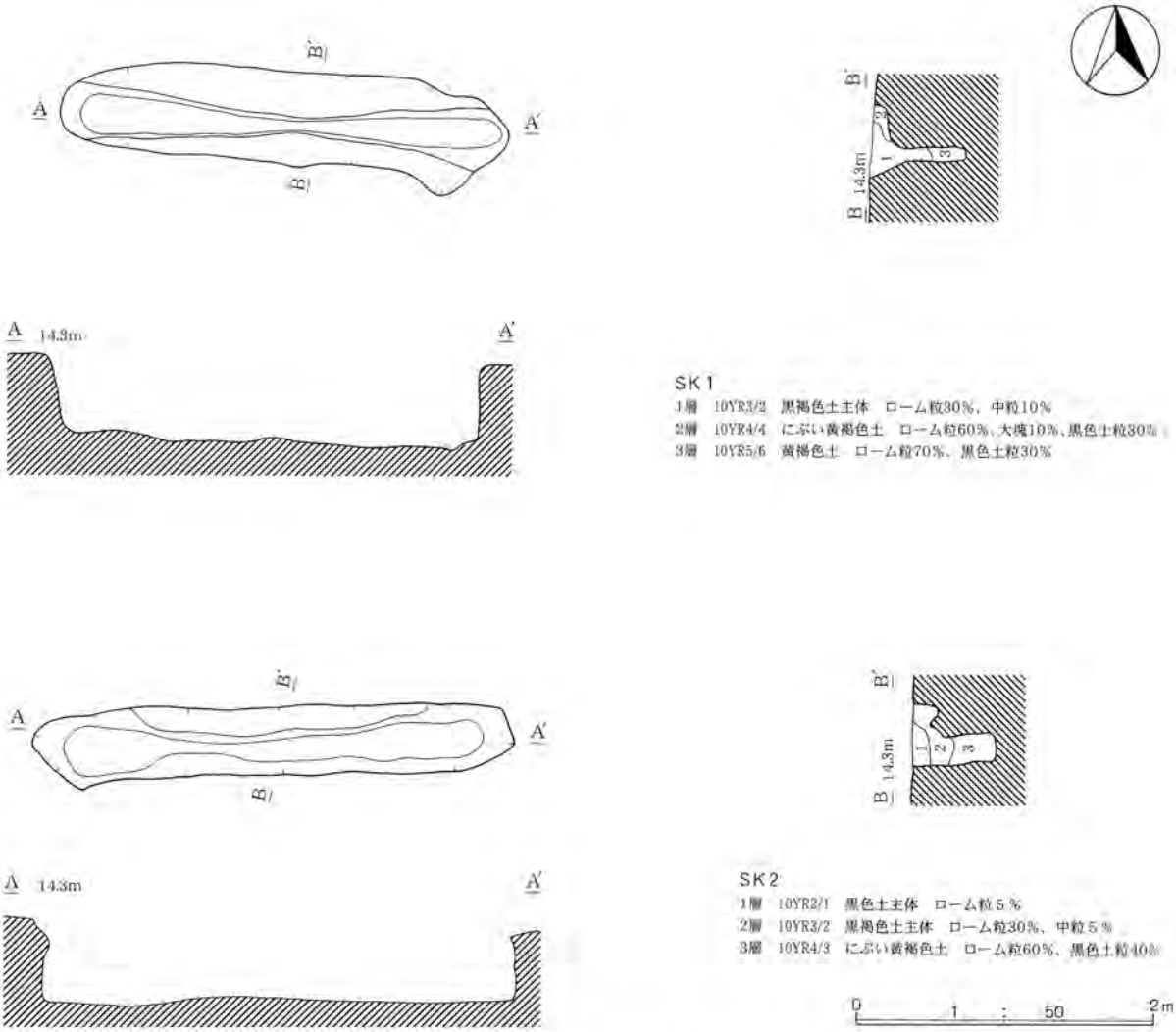


図8　溝状土坑（SK1、2）

第２表　遺構内出土石器

挿図番号	器　種	石　質	遺構名	層　位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備　考
図７－１	剥　片	珪質頁岩	SK9	覆土	54	28.5	12	9.8	
図７－２	石　鏃	珪質頁岩	SK10	覆土	39	18	9	5.6	
図７－３	石　槍	珪質頁岩	SK10	覆土	48	37	14	17.5	
図７－４	石　錐	珪質頁岩	SK15	覆土	28.5	10	8	2	
図７－５	石　鏃	珪質頁岩	SK24	覆土	40.5	21.5	9	4.3	
図７－６	使用痕有る剥片	珪質頁岩	SK24	覆土	35	27	5	3.7	
図７－７	石　錐	珪質頁岩	SK33	覆土	48.5	12	9.5	4.8	
図７－８	削　器	珪質頁岩	SK33	覆土	34.5	40	12	14.4	
図７－９	削　器	珪質頁岩	SK33	覆土	54	32	12	16.4	
図７－10	剥　片	頁　岩	SK33	覆土	92.5	51.5	17	82.2	
図７－11	砥　石	凝灰岩	SK42	覆土	70	59	44	155.5	
図７－12	砥　石	凝灰岩	SK42	覆土	59	60	43	60.6	
図７－13	石　錘	安山岩	SK43	覆土	50	38	16	37.7	

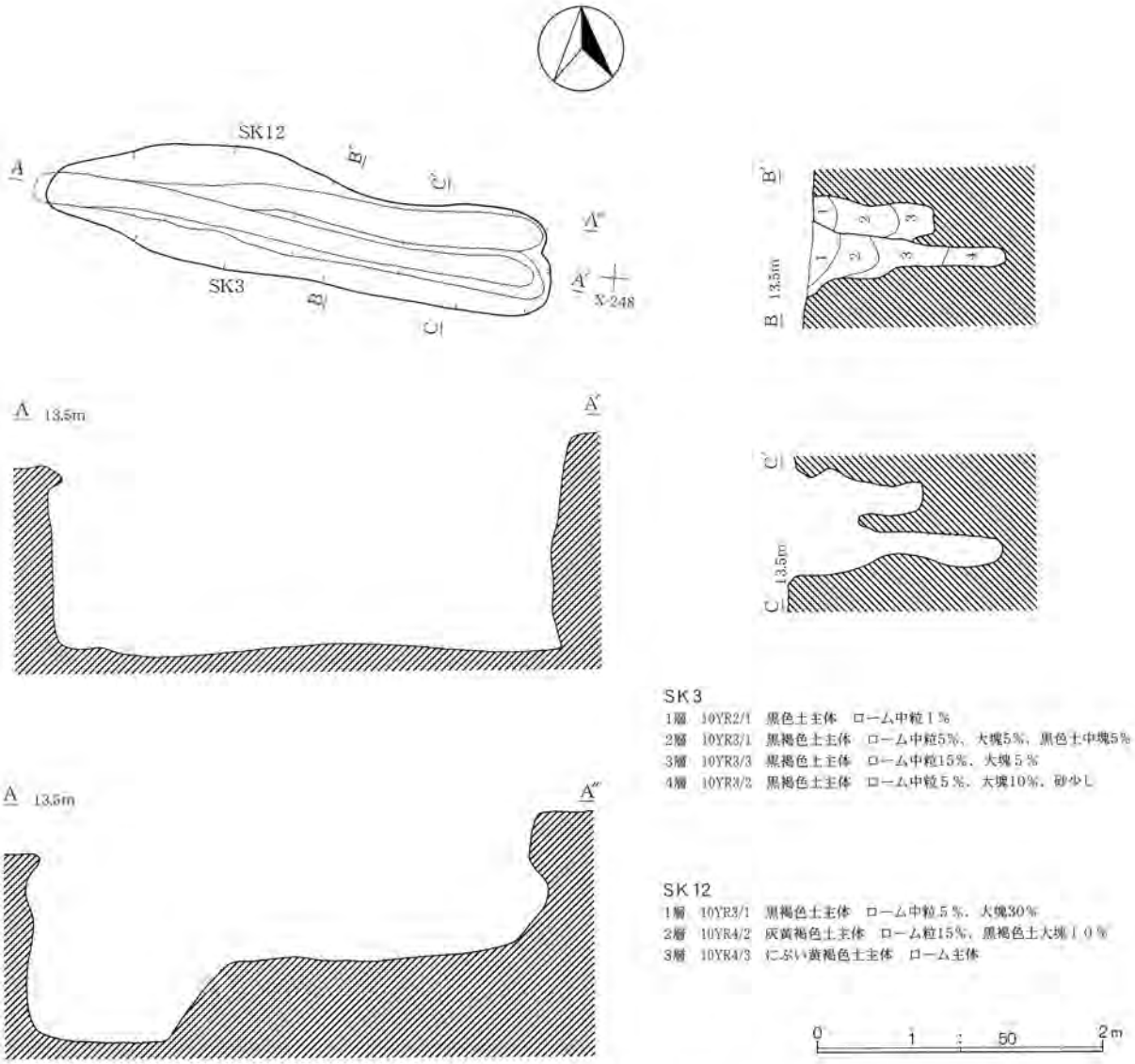
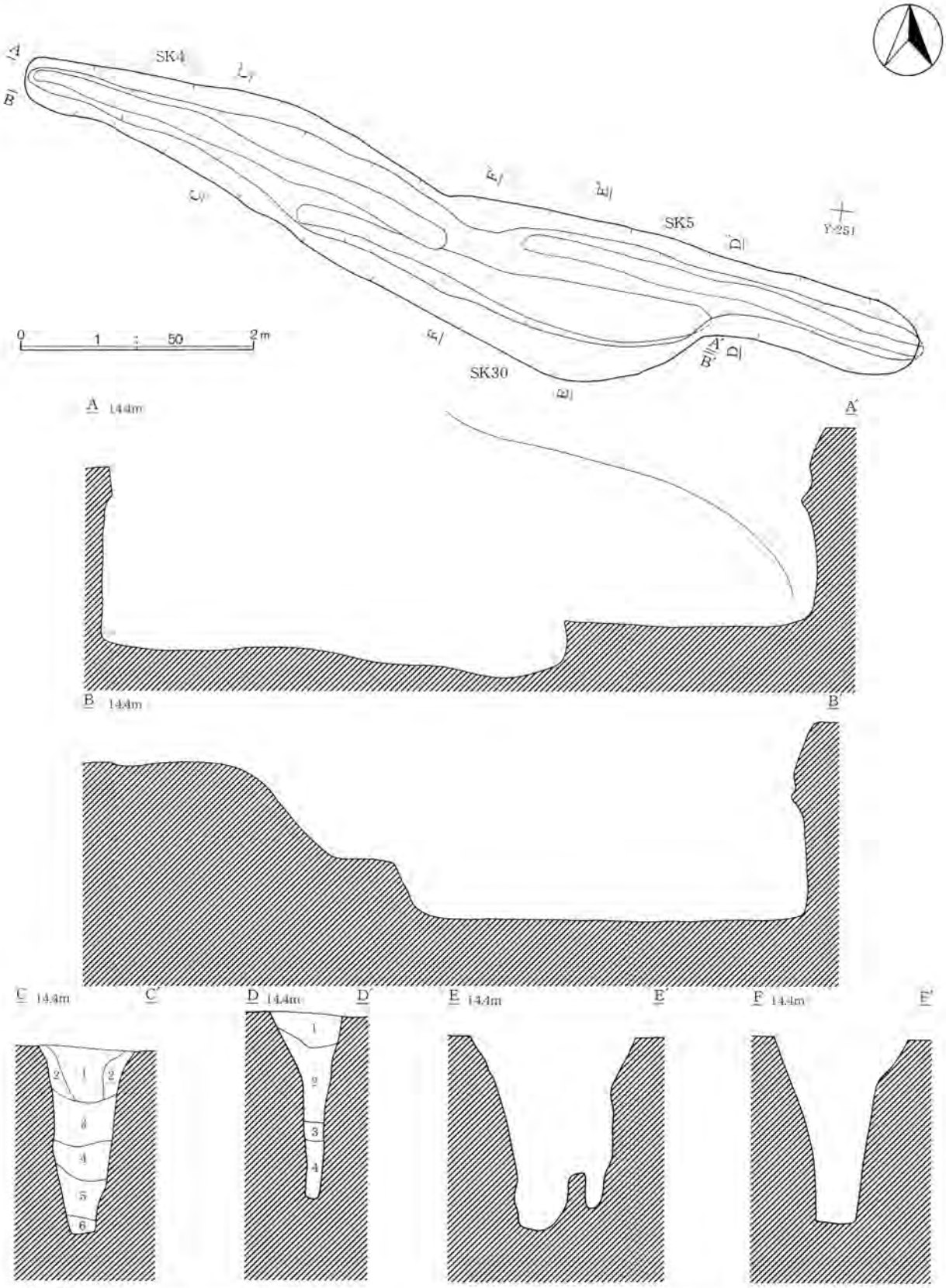


図９　溝状土坑（ＳＫ３、12）



SK4
1層 10YR1.7/1 黒色土主体 ローム中粒３％
2層 10YR2/2 黒褐色土主体 ローム中粒５％
3層 10YR3/3 暗褐色土主体 ローム中粒10％
4層 10YR4/6 褐色土主体 ローム中粒1％、径5cmのにぶい橙色粘土(7.5YR6/4)
5層 10YR4/3 にぶい黄褐色土主体 ローム中粒１％
6層 10YR3/3 暗褐色土主体

SK5
1層 10YR2/1 黒色土主体 ローム小粒１％
2層 10YR2/2 黒褐色土主体 ローム小粒20％、中塊５％
3層 10YR4/6 褐色土主体 粘土
4層 10YR3/4 暗褐色土主体

図10 溝状土坑（ＳＫ４、５、30）

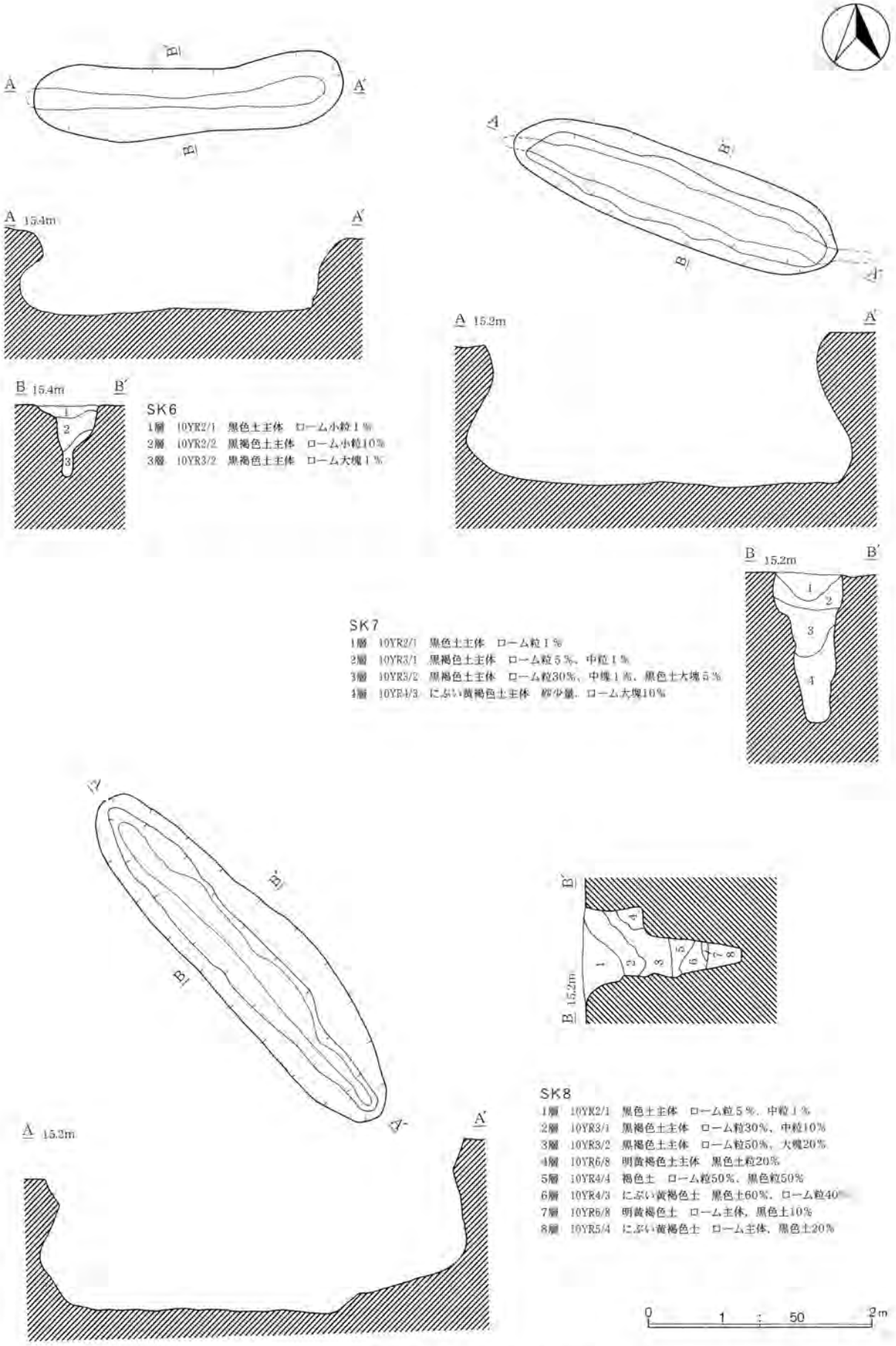
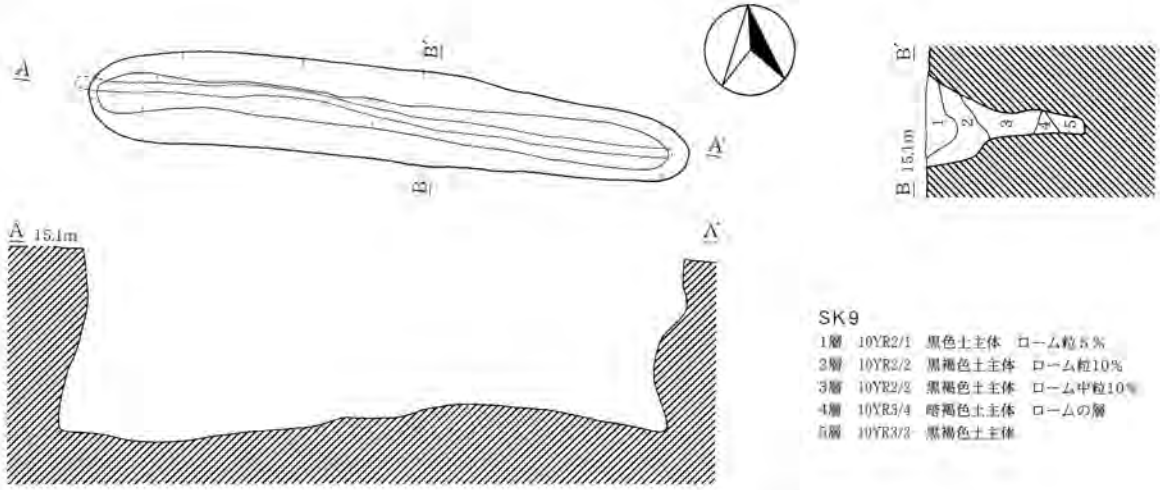
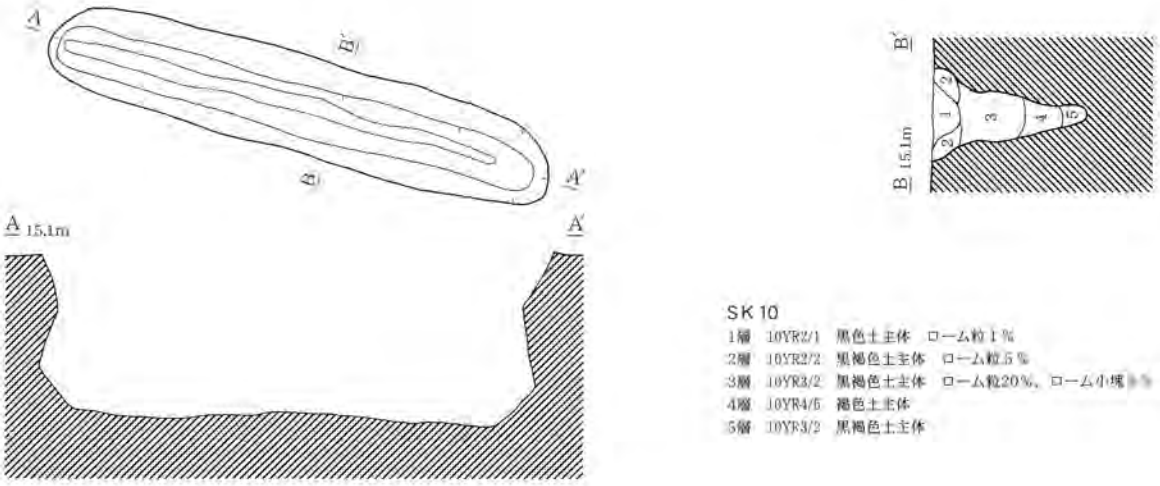


図11　溝状土坑（ＳＫ６、７、８）



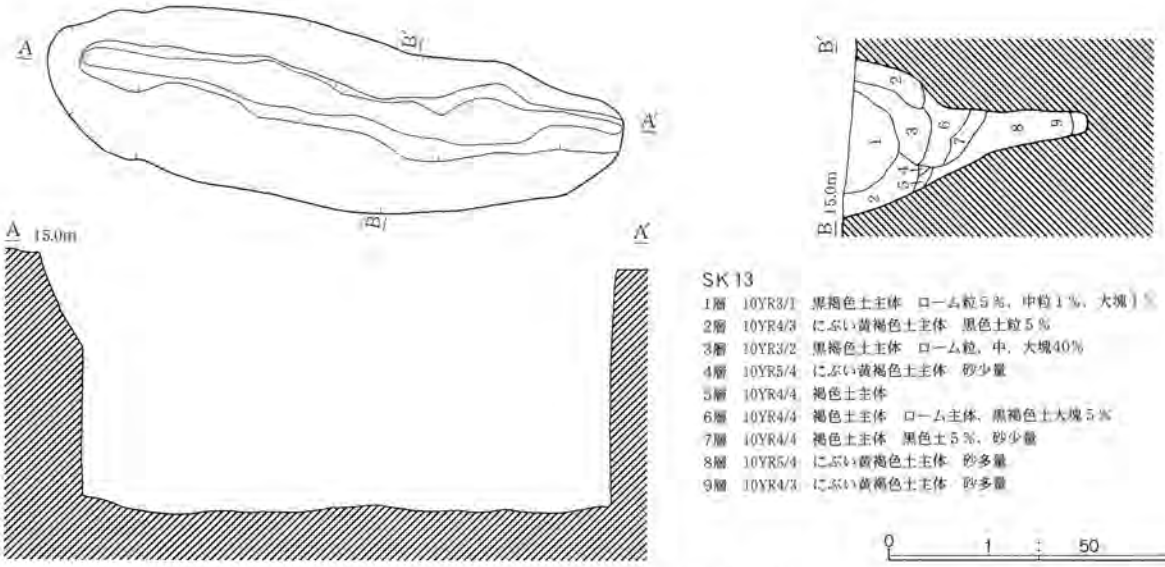
SK9

1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒５％
2層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒10％
3層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム中粒10％
4層　10YR5/4　暗褐色土主体　ロームの層
5層　10YR3/3　黒褐色土主体



SK 10

1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒１％
2層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒５％
3層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒20％、ローム小塊[illegible]％
4層　10YR4/5　褐色土主体
5層　10YR3/2　黒褐色土主体



SK 13

1層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム粒５％、中粒１％、大塊[illegible]％
2層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　黒色土粒５％
3層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒、中、大塊40％
4層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　砂少量
5層　10YR4/4　褐色土主体
6層　10YR4/4　褐色土主体　ローム主体、黒褐色土大塊５％
7層　10YR4/4　褐色土主体　黒色土５％、砂少量
8層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　砂多量
9層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　砂多量

0　1　50　2m

図12　溝状土坑（ＳＫ９、10、13）

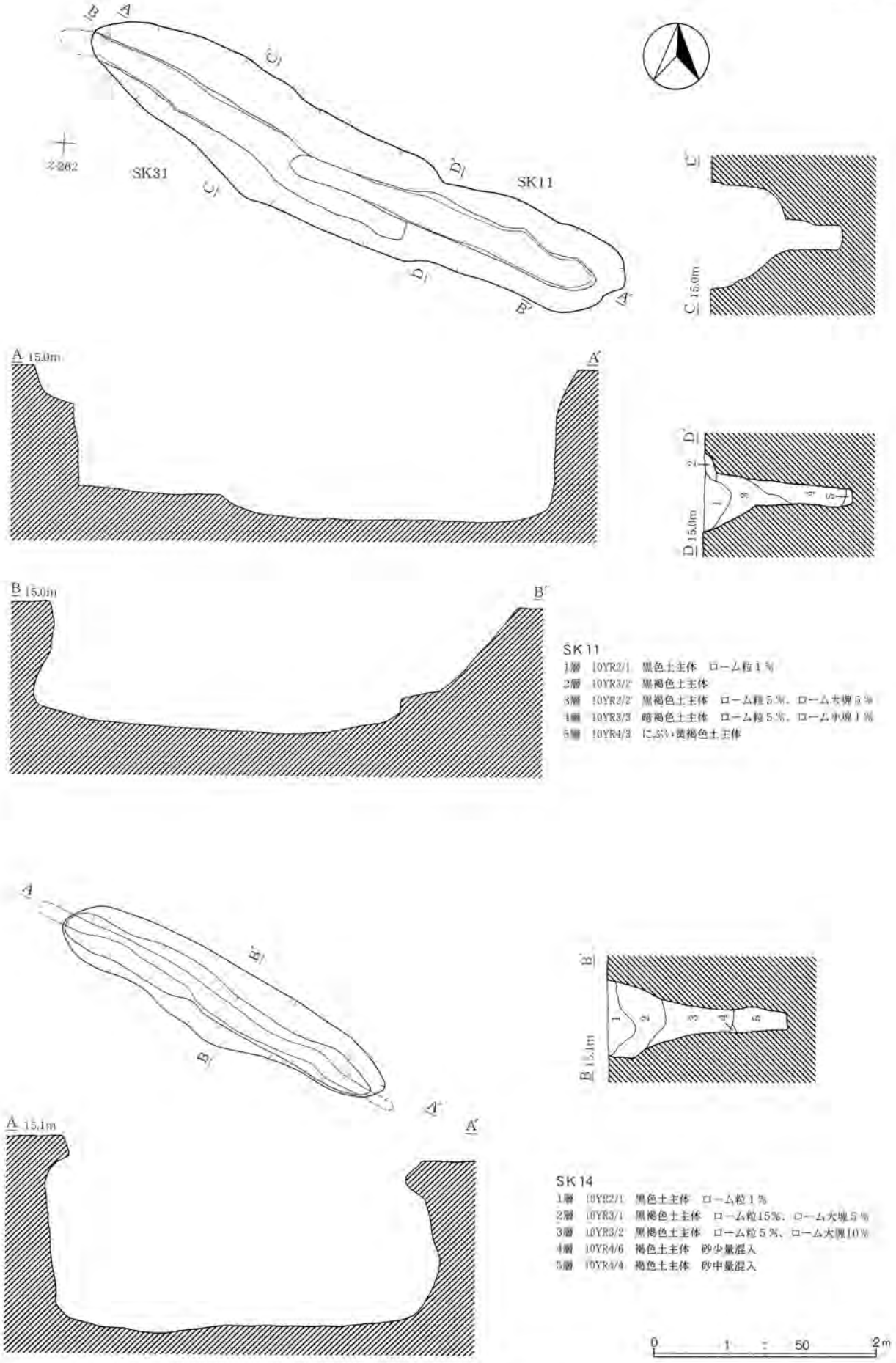


図13　溝状土坑（ＳＫ11、31、14）

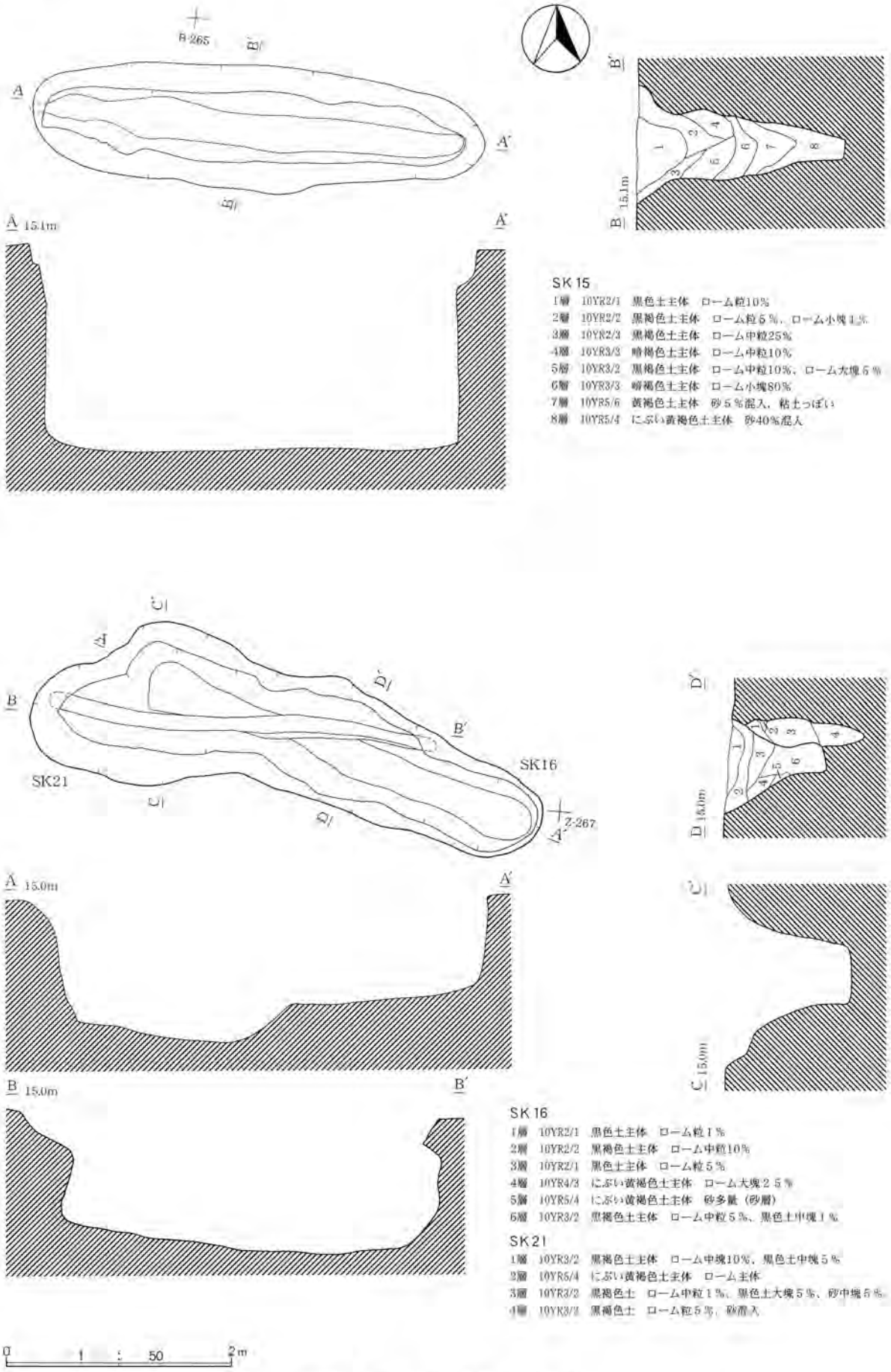
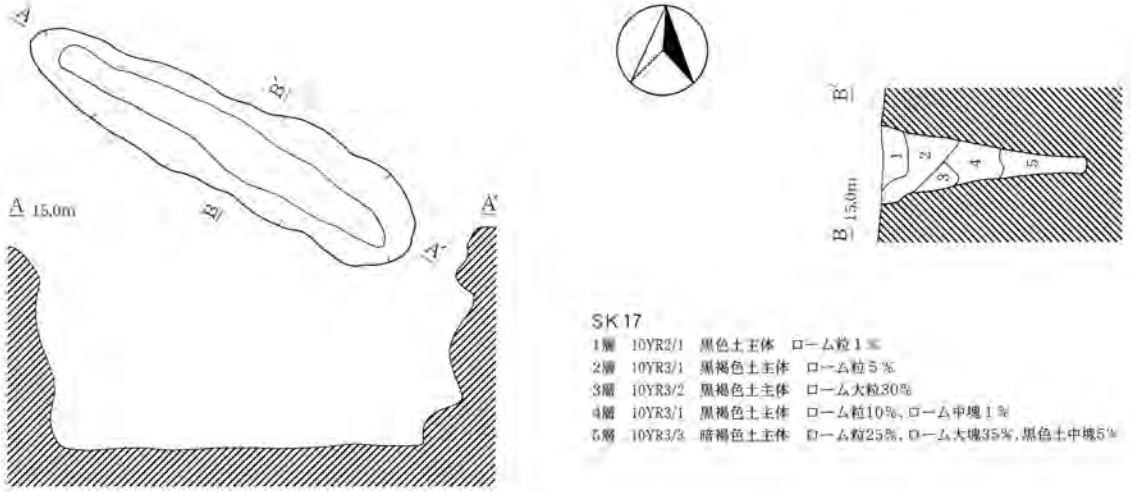
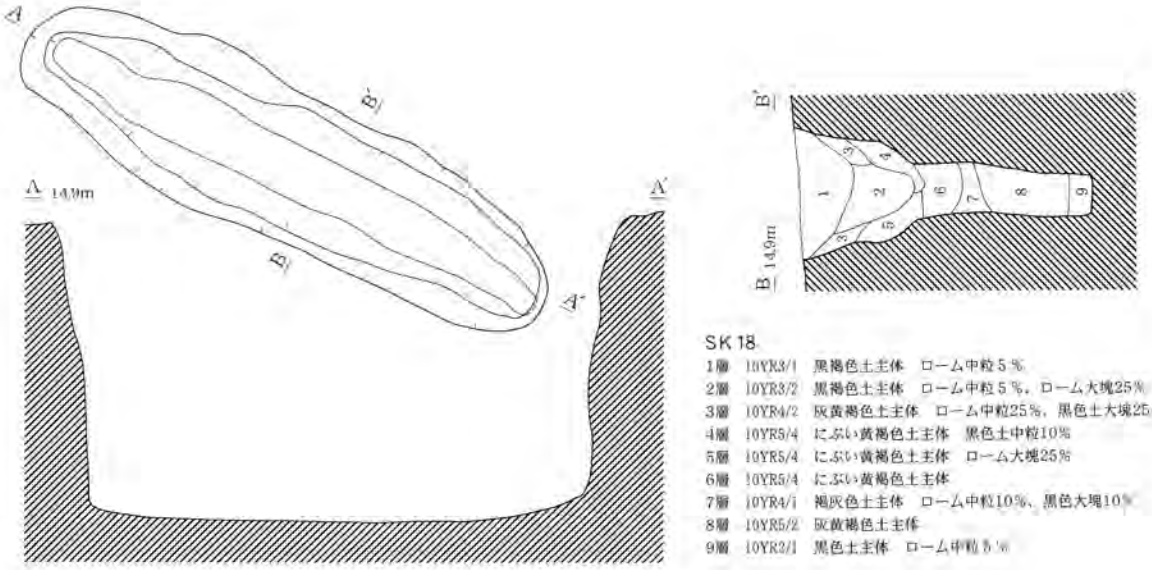


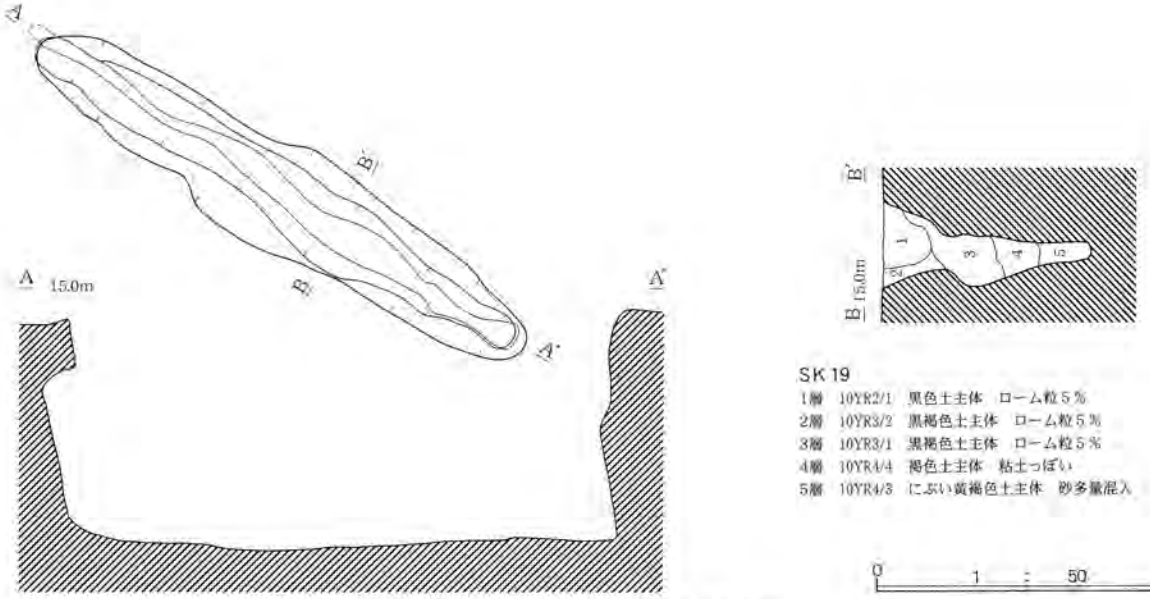
図14 溝状土坑（SK 15、16、21）



SK 17
1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒１％
2層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム粒５％
3層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム大粒30％
4層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム粒10％、ローム中塊１％
5層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒25％，ローム大塊35％，黒色土中塊5％



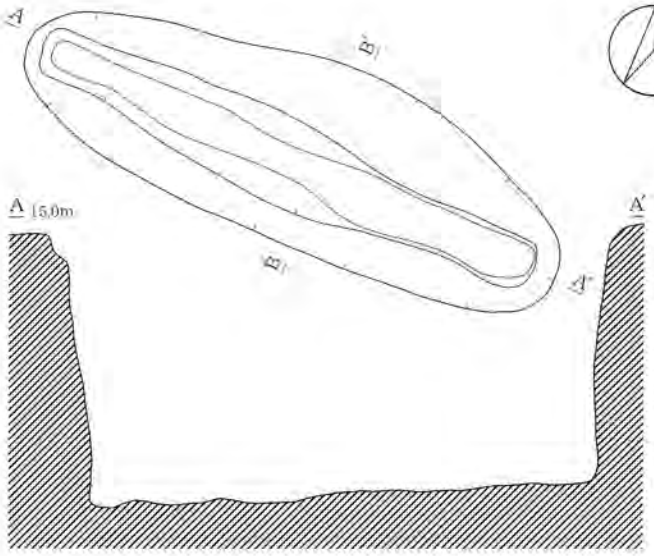
SK 18
1層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム中粒５％
2層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム中粒５％，ローム大塊25％
3層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　ローム中粒25％，黒色土大塊25％
4層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　黒色土中粒10％
5層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　ローム大塊25％
6層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体
7層　10YR4/1　褐灰色土主体　ローム中粒10％、黒色大塊10％
8層　10YR5/2　灰黄褐色土主体
9層　10YR2/1　黒色土主体　ローム中粒５％

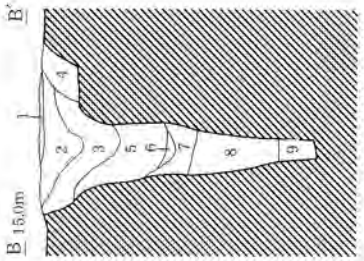


SK 19
1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒５％
2層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒５％
3層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム粒５％
4層　10YR4/4　褐色土主体　粘土っぽい
5層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　砂多量混入

0　1 : 50　2m

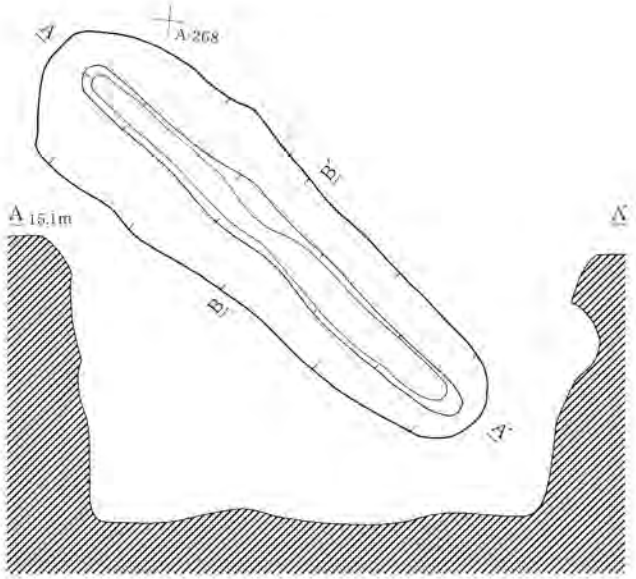
図15　溝状土坑（ＳＫ17、18、19）

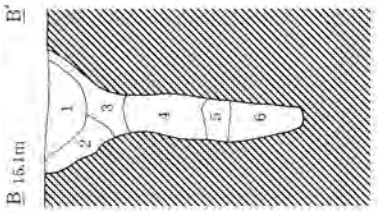




SK20

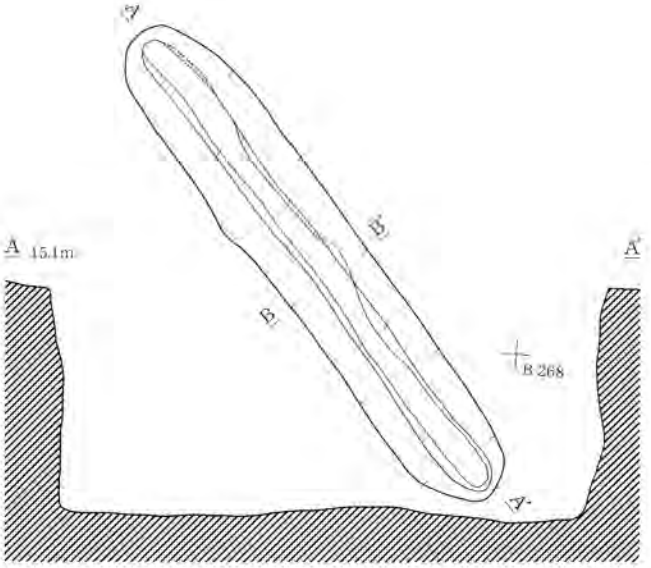
1層　10YR5/3　にぶい黄褐色土主体（かくらん）
2層　10YR7/1　黒色土主体、ローム粒1％
3層　10YR3/1　黒褐色土主体、ローム粒1％、ローム中塊1％
4層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　ローム中粒1％、ローム大塊1％
5層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム粒50％　ローム中粒1％、ローム中塊1％
6層　10YR4/6　褐色土主体　ロームの層
7層　10YR4/4　褐色土主体　黒色土粒20％
8層　10YR5/6　黄褐色土主体
9層　10YR4/1　褐灰色土主体

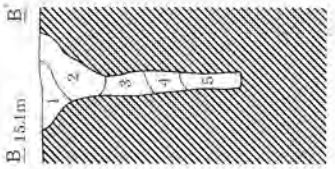




SK22

1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒5％、ローム中粒1％
2層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　ローム粒20％、ローム中塊5％
3層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒15％、ローム中塊5％
4層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒25％、ローム中粒10％、黒色土大塊5％
5層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　ローム主体
6層　10YR4/4　褐色土主体　砂多量



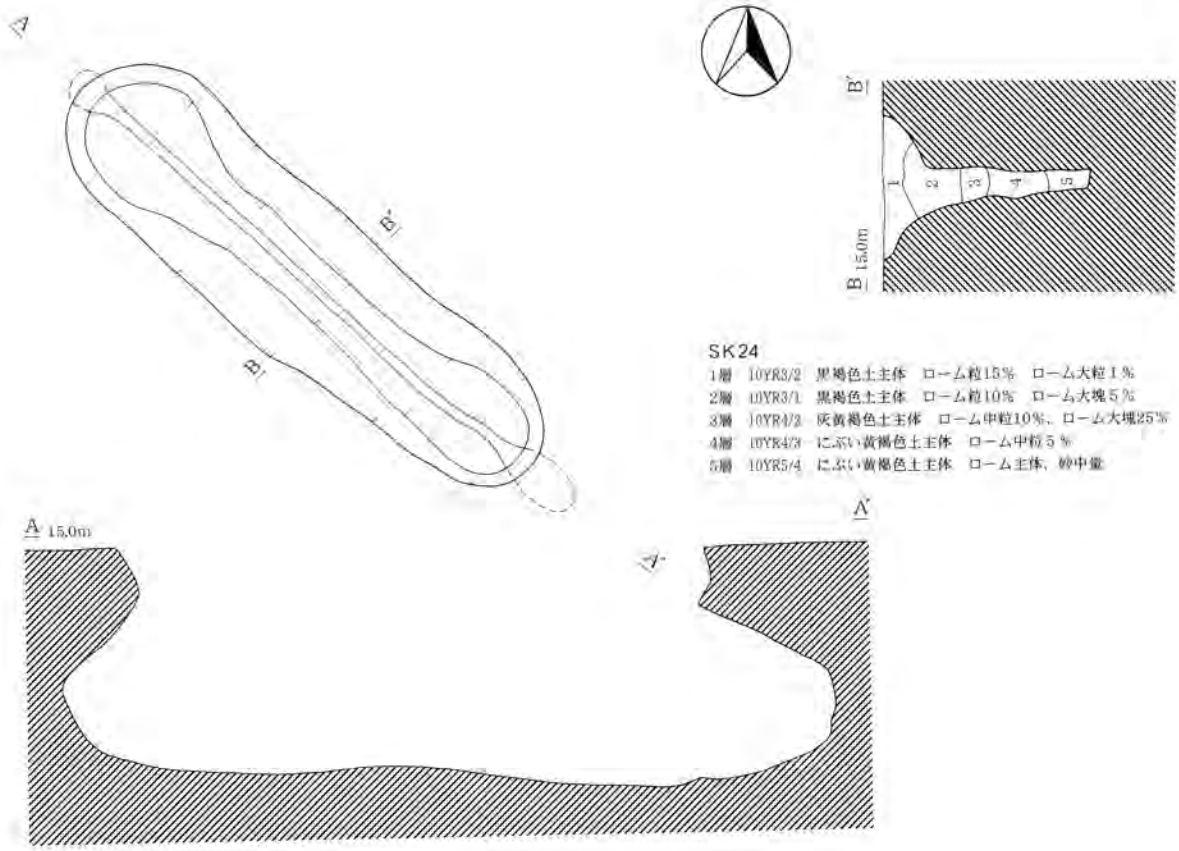


SK23

1層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒1％
2層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム中粒5％
3層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒10％、ローム中塊5％
4層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　ローム粒10％、ローム中塊10％
5層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム中粒10％

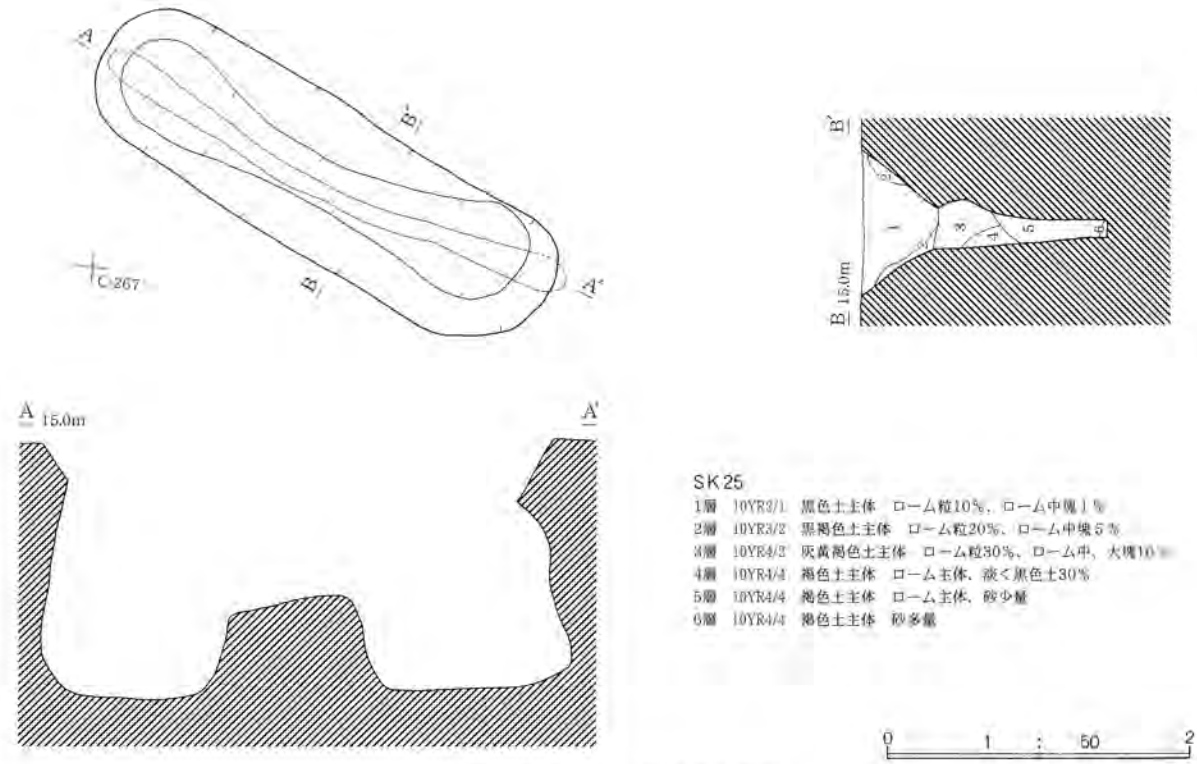
0　1 : 50　2m

図16　溝状土坑（ＳＫ20、22、23）



SK24

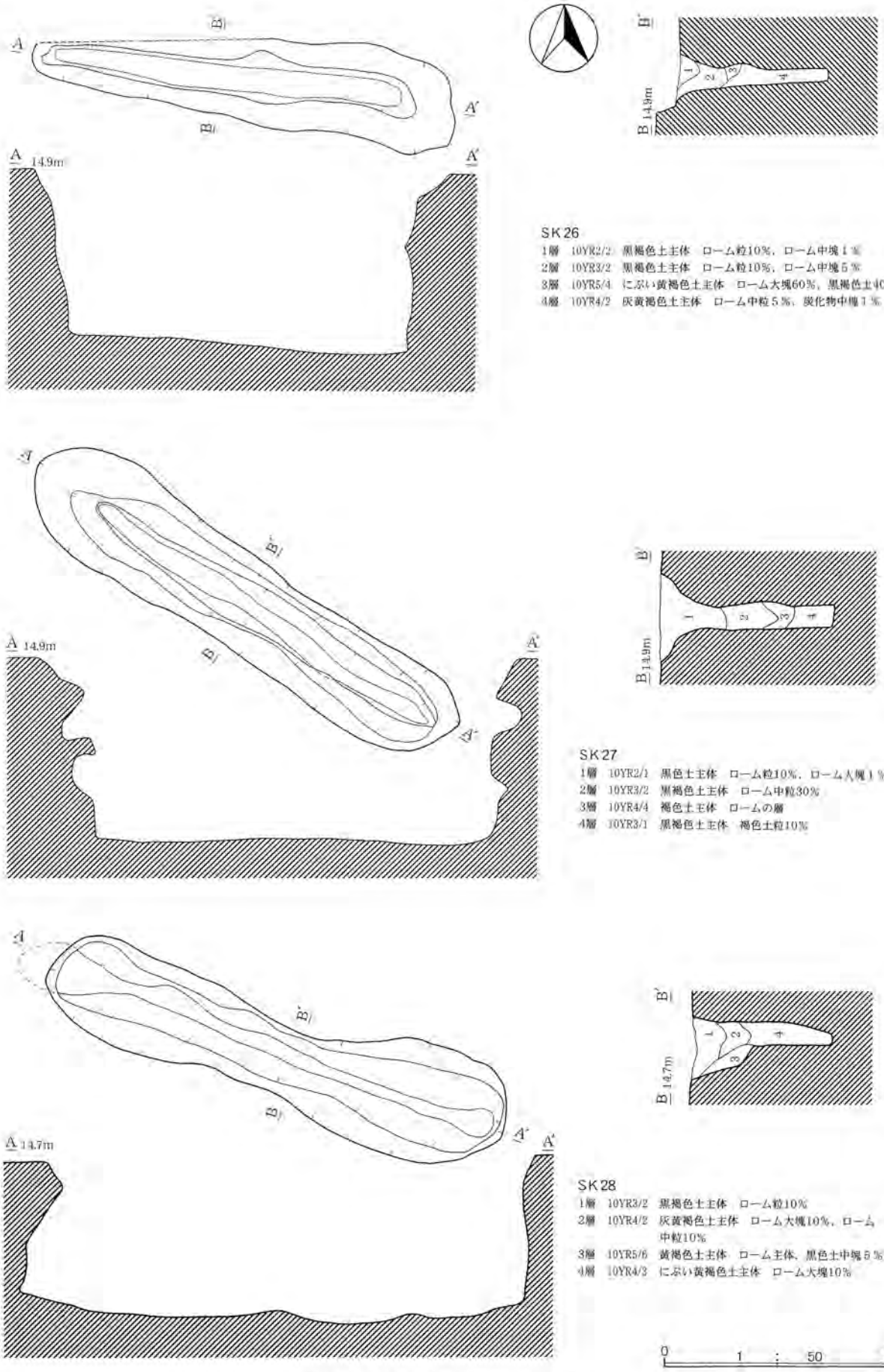
1層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒15%　ローム大粒１%
2層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム粒10%　ローム大塊５%
3層　10YR4/3　灰黄褐色土主体　ローム中粒10%、ローム大塊25%
4層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　ローム中粒５%
5層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　ローム主体、砂中量



SK25

1層　10YR3/1　黒色土主体　ローム粒10%、ローム中塊１%
2層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒20%、ローム中塊５%
3層　10YR4/3　灰黄褐色土主体　ローム粒30%、ローム中、大塊10%
4層　10YR4/4　褐色土主体　ローム主体、淡く黒色土30%
5層　10YR4/4　褐色土主体　ローム主体、砂少量
6層　10YR4/4　褐色土主体　砂多量

図17　溝状土坑（ＳＫ24、25）



SK26
1層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒10%，ローム中塊1%
2層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒10%，ローム中塊5%
3層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　ローム大塊60%，黒褐色土40%
4層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　ローム中粒5%、炭化物中塊1%

SK27
1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒10%，ローム大塊1%
2層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム中粒30%
3層　10YR4/4　褐色土主体　ロームの層
4層　10YR3/1　黒褐色土主体　褐色土粒10%

SK28
1層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒10%
2層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　ローム大塊10%、ローム中粒10%
3層　10YR5/6　黄褐色土主体　ローム主体、黒色土中塊5%
4層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　ローム大塊10%

図18　溝状土坑（ＳＫ26、27、28）

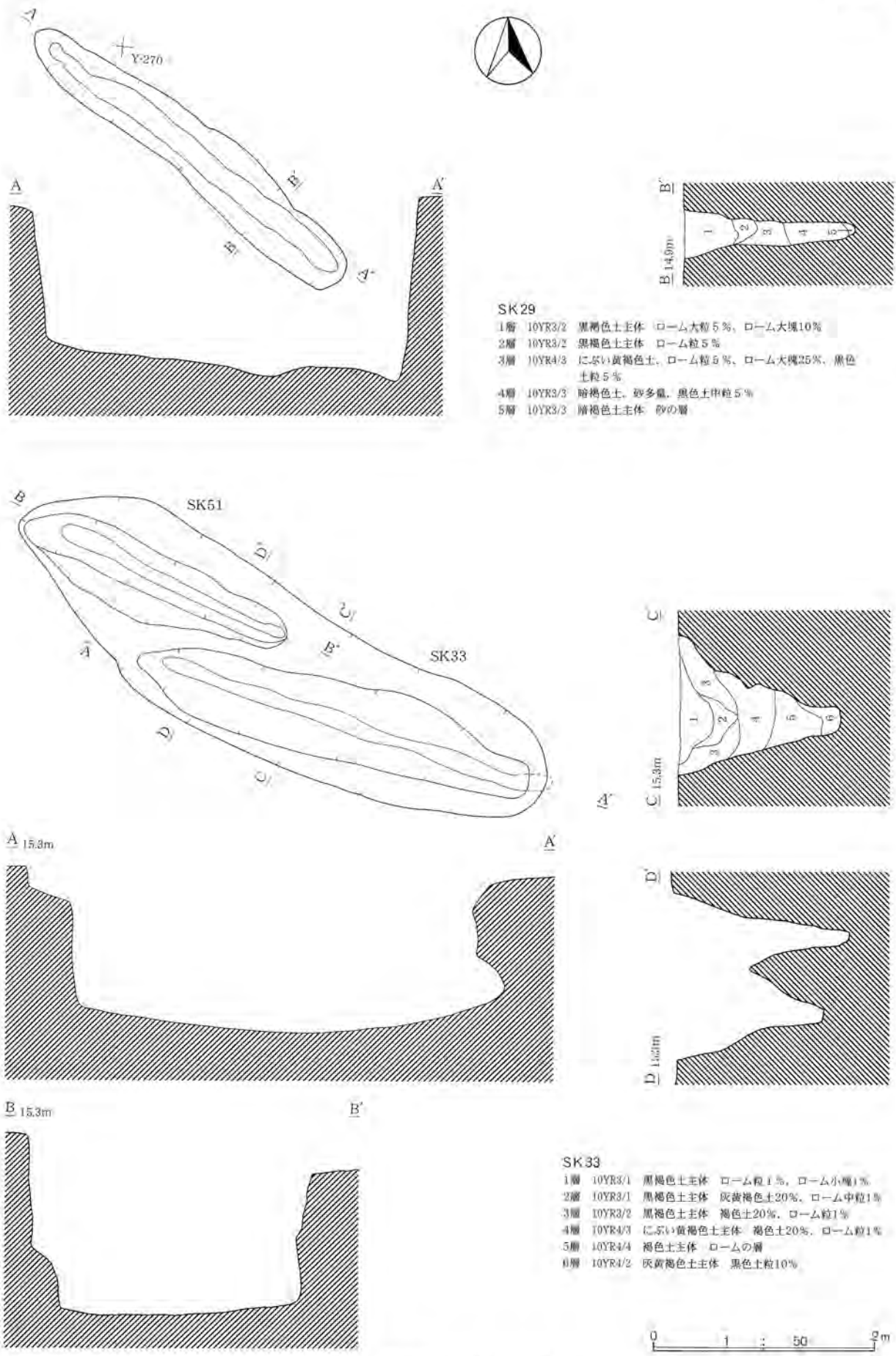


図19　溝状土坑（ＳＫ29、33、51）

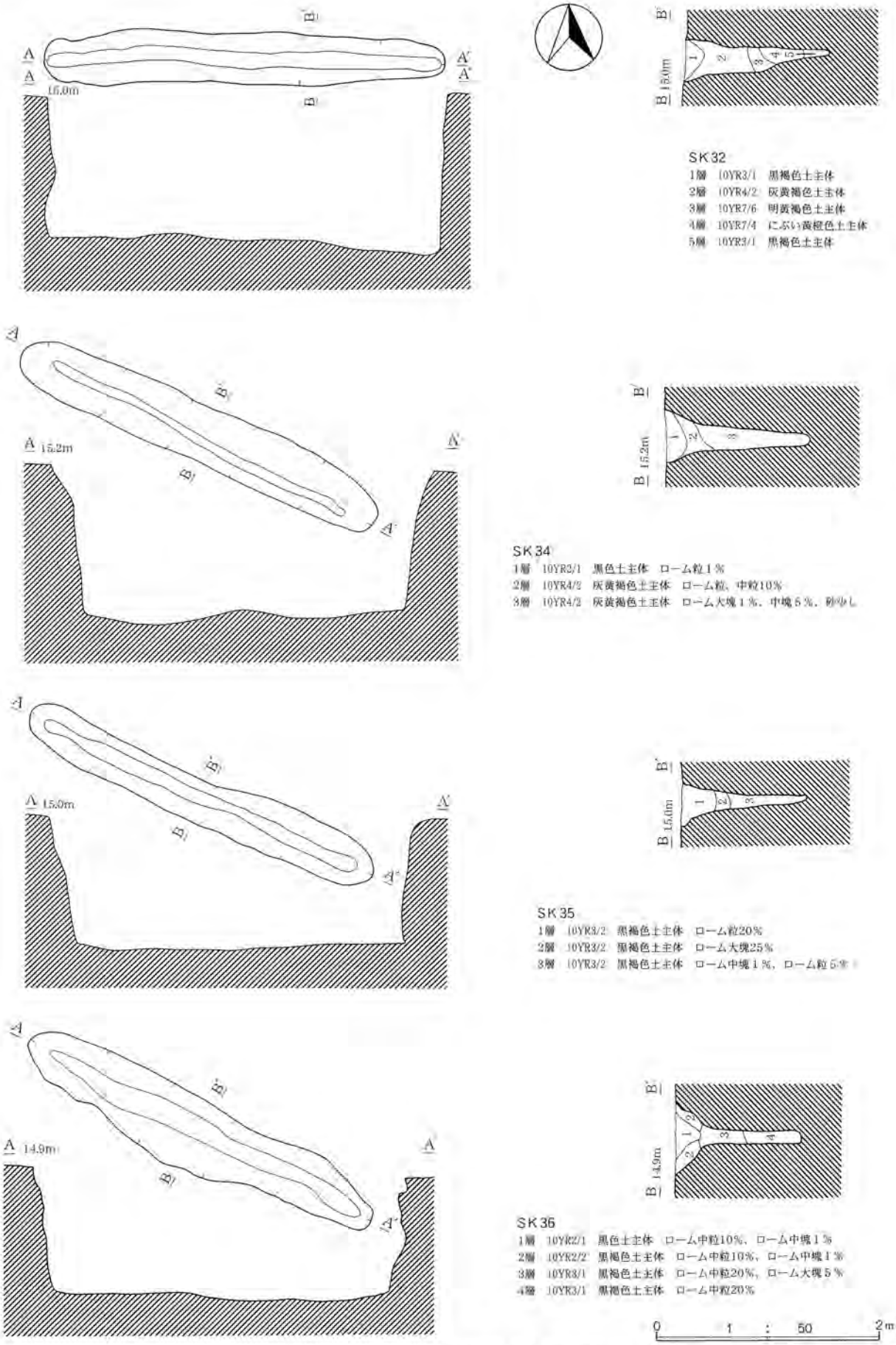
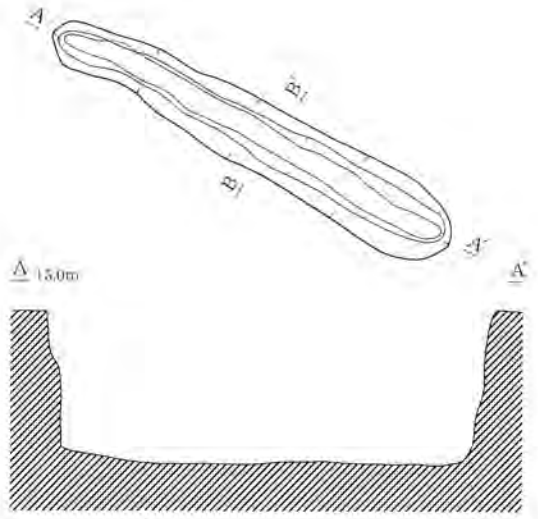
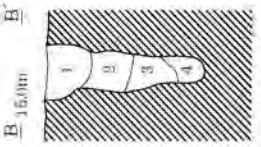
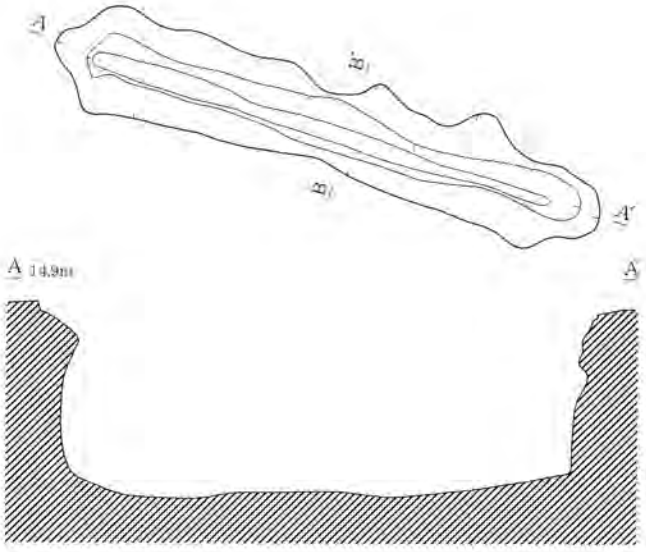


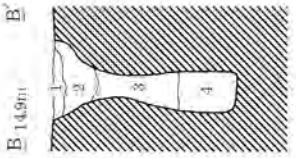
図20 溝状土坑（ＳＫ32、34、35、36）



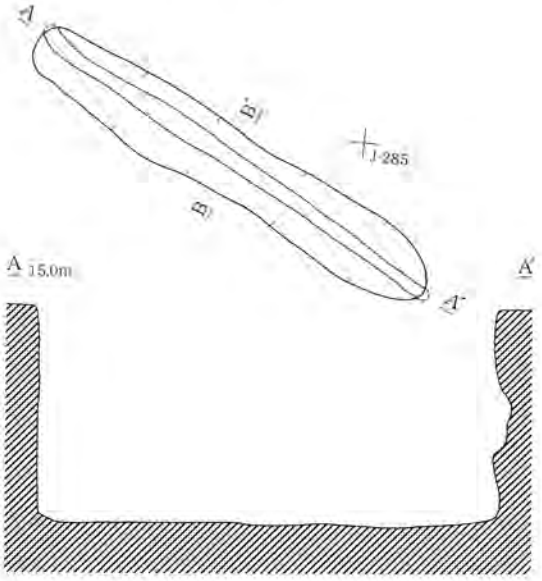


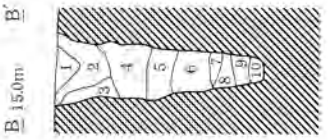
SK37
1層　10YR1.7/1　黒色土主体　ローム粒10%、ローム中塊1%
2層　10YR2/1　黒色土主体　ローム中粒20%、ローム中塊10%
3層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒20%、褐色土30%混入
4層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム粒10%





SK38
1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒5%
2層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒15%、ローム中粒5%
3層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中塊10%、大塊5%、ローム粒10%
4層　10YR4/4　褐色土主体　ローム、砂主体

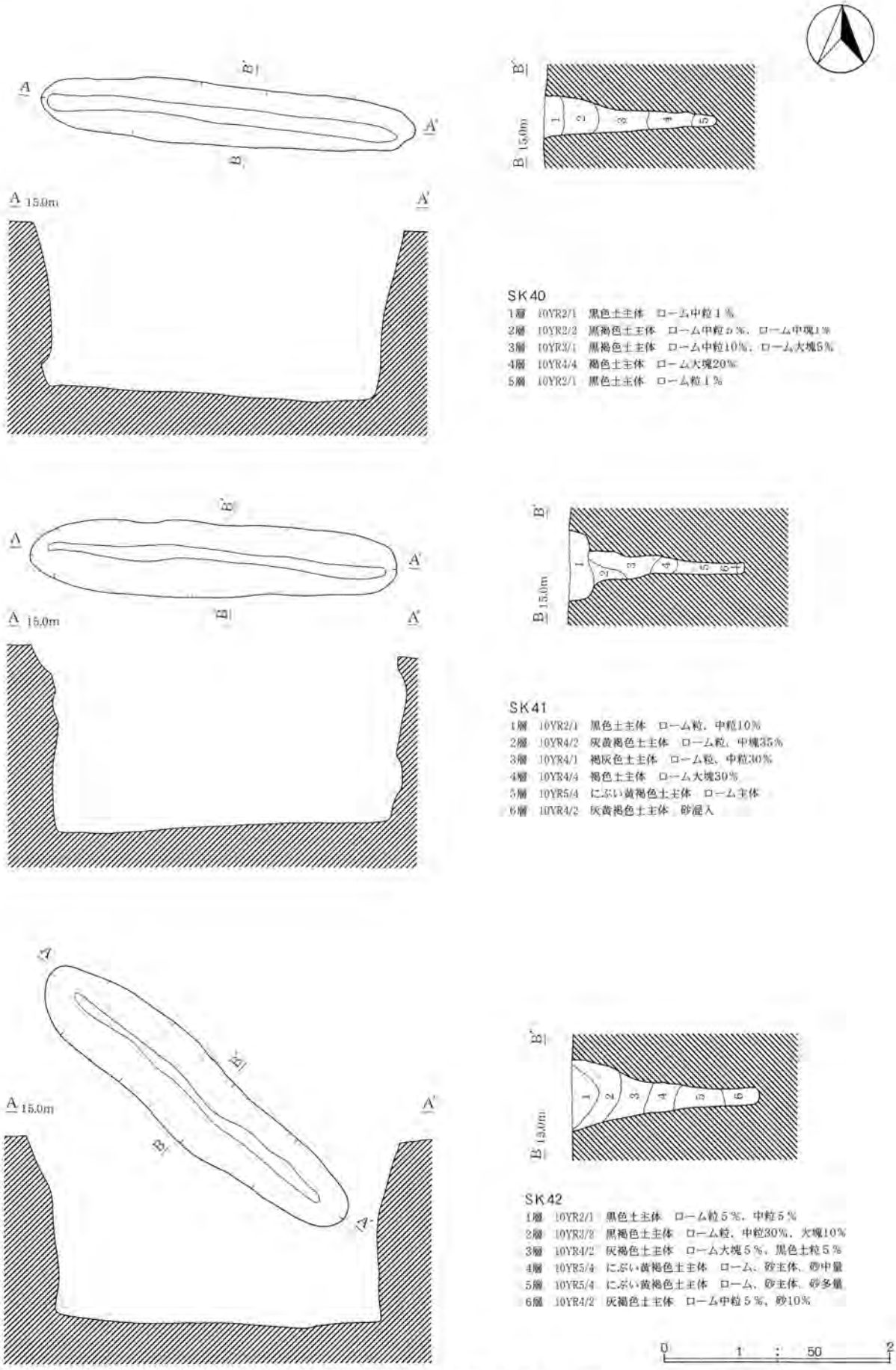




SK39
1層　10YR1.7/1　黒色土主体　ローム粒5%、ローム小塊1%
2層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒10%、ローム小塊1%
3層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒10%、ローム大塊25%
4層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム粒20%、ローム小塊5%
5層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒20%、ローム中塊1%
6層　10YR4/2　暗灰黄褐色土主体　ローム中粒20%、ローム大塊30%
7層　10YR4/4　褐色土主体　ロームの層
8層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　黒色土粒5%
9層　10YR4/6　褐色土主体　ロームの層
10層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　黒色土粒5%

0　1 : 50　2m

図21　溝状土坑（SK37、38、39）



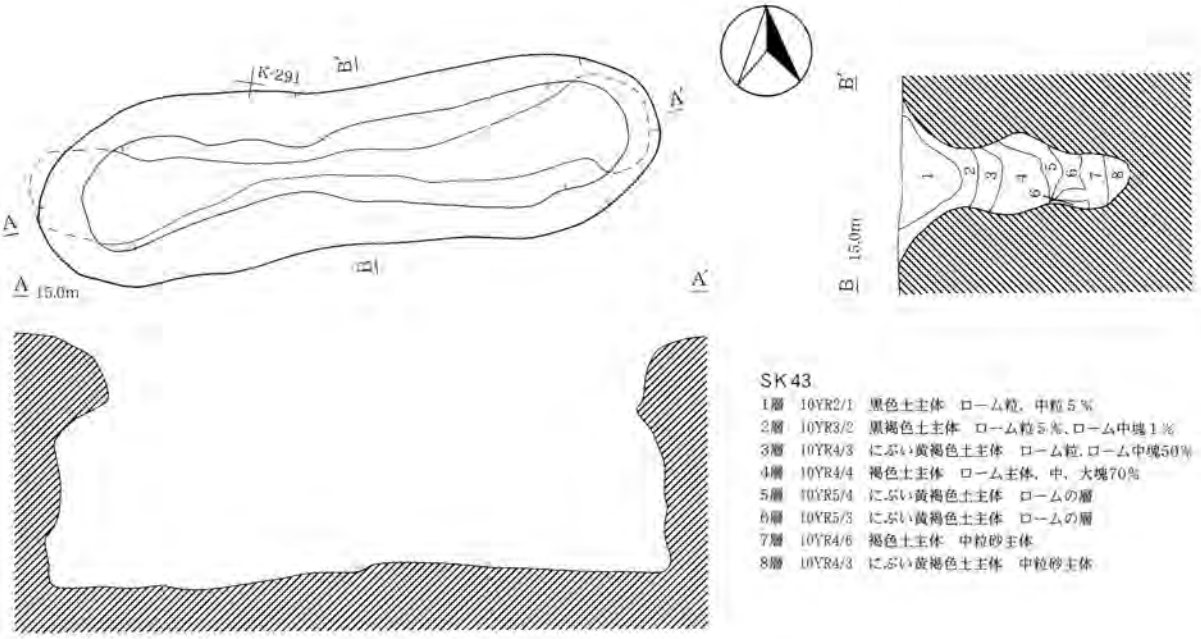
SK40
1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム中粒1％
2層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム中粒5％，ローム中塊1％
3層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム中粒10％，ローム大塊5％
4層　10YR4/4　褐色土主体　ローム大塊20％
5層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒1％

SK41
1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒，中粒10％
2層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　ローム粒，中塊35％
3層　10YR4/1　褐灰色土主体　ローム粒，中粒30％
4層　10YR4/4　褐色土主体　ローム大塊30％
5層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　ローム主体
6層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　砂混入

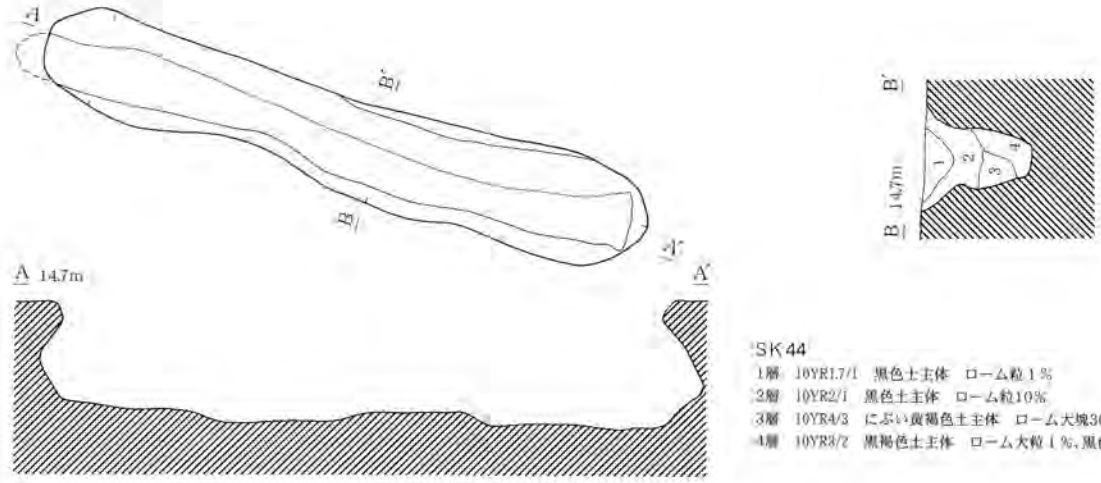
SK42
1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒5％，中粒5％
2層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒，中粒30％，大塊10％
3層　10YR4/2　灰褐色土主体　ローム大塊5％，黒色土粒5％
4層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　ローム，砂主体，砂中量
5層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　ローム，砂主体，砂多量
6層　10YR4/2　灰褐色土主体　ローム中粒5％，砂10％

0　1 : 50　2m

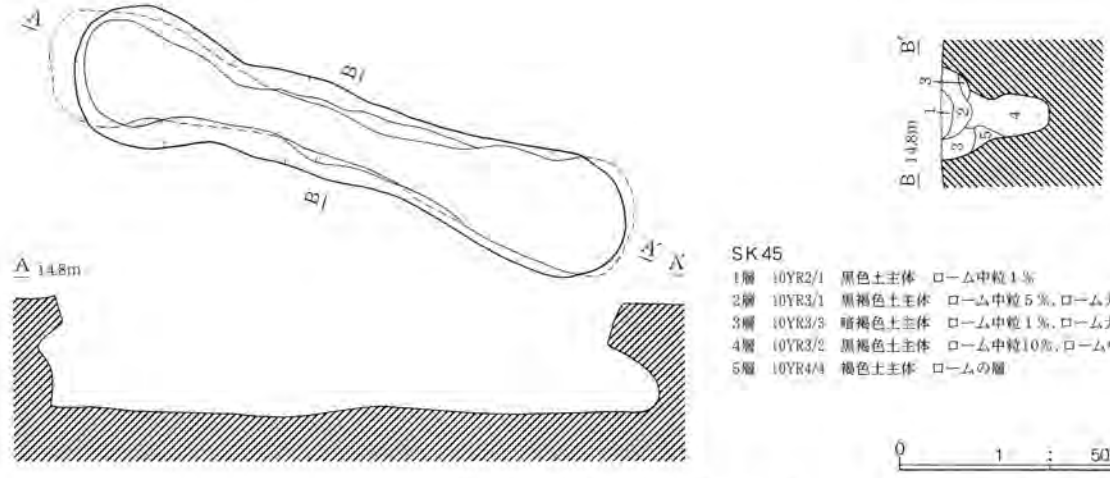
図22　溝状土坑（ＳＫ40、41、42）



SK43
1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒，中粒５％
2層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒５％、ローム中塊１％
3層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　ローム粒，ローム中塊50％
4層　10YR4/4　褐色土主体　ローム主体，中，大塊70％
5層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　ロームの層
6層　10YR5/3　にぶい黄褐色土主体　ロームの層
7層　10YR4/6　褐色土主体　中粒砂主体
8層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　中粒砂主体



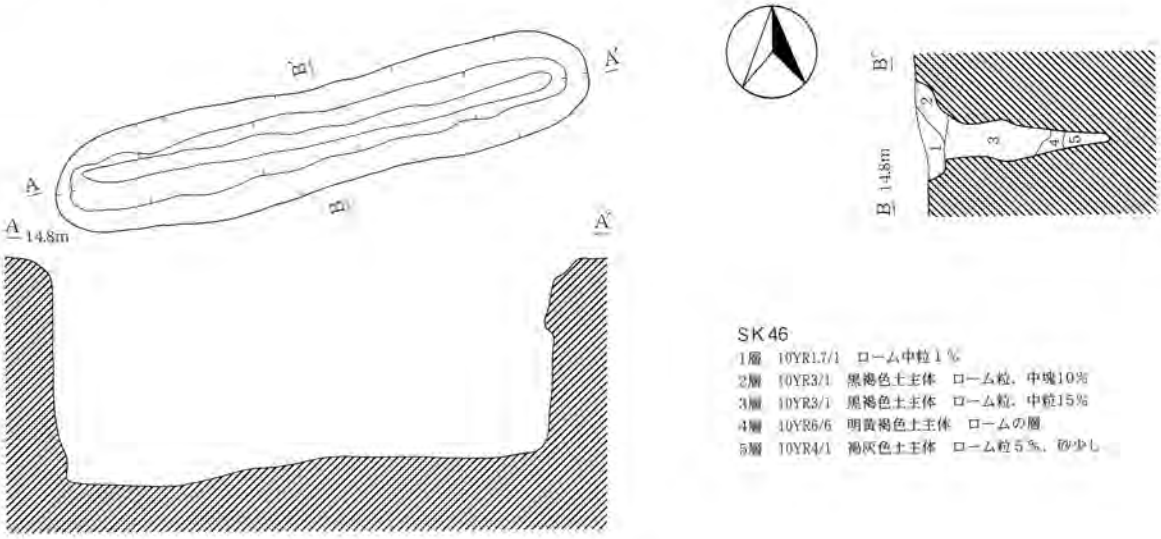
SK44
1層　10YR1.7/1　黒色土主体　ローム粒１％
2層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒10％
3層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　ローム大塊30％
4層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム大粒１％、黒色土粒10％



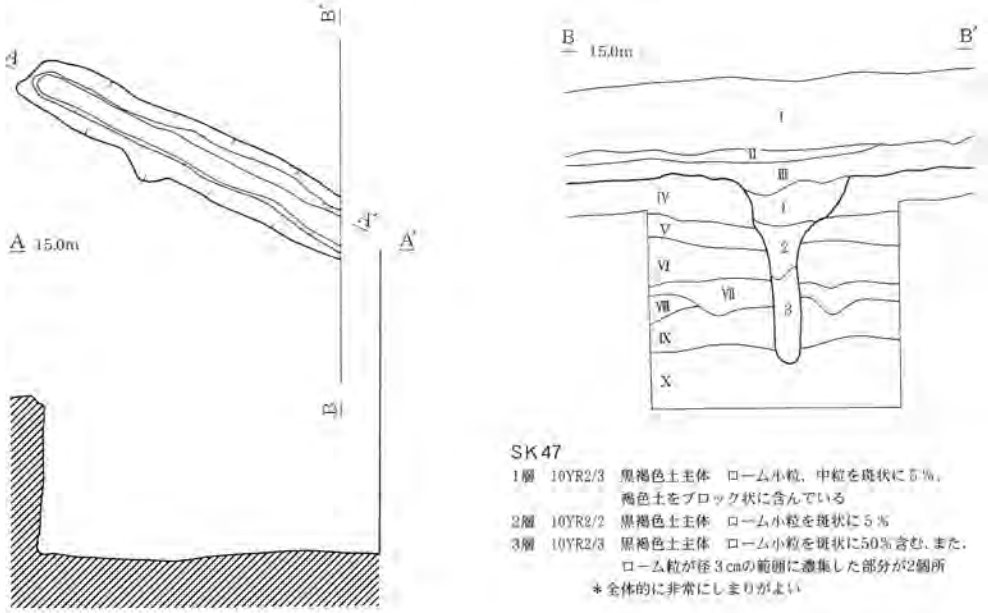
SK45
1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム中粒１％
2層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム中粒５％、ローム大塊１％
3層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中粒１％、ローム大塊１％
4層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム中粒10％、ローム中塊１％
5層　10YR4/4　褐色土主体　ロームの層

0　1 : 50　2m

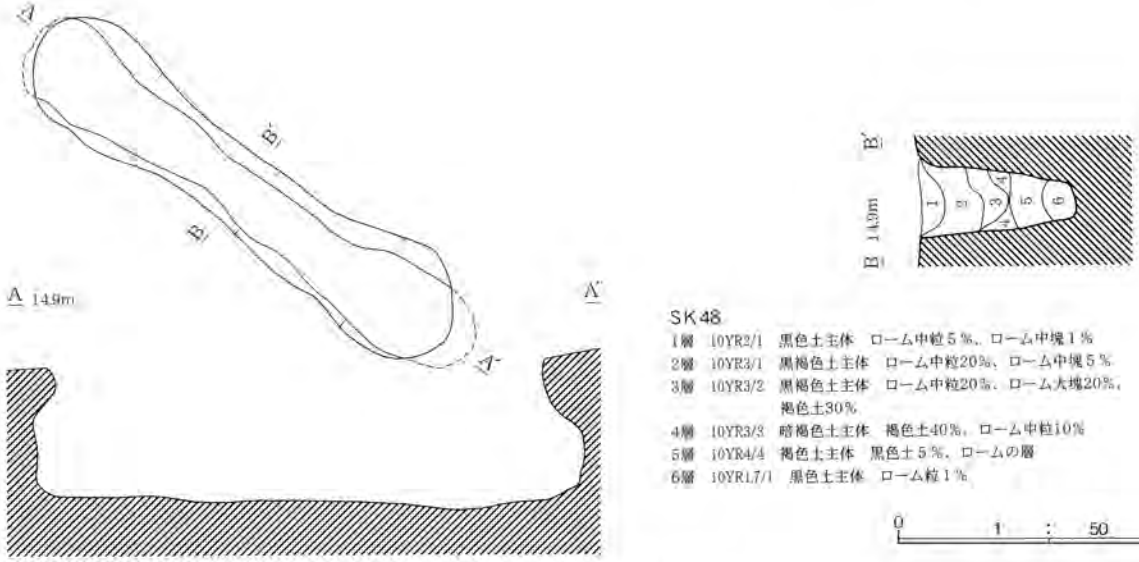
図23　溝状土坑（ＳＫ43、44、45）



SK46
1層　10YR1.7/1　ローム中粒1％
2層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム粒、中塊10％
3層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム粒、中粒15％
4層　10YR6/6　明黄褐色土主体　ローム の層
5層　10YR4/1　褐灰色土主体　ローム粒5％、砂少し



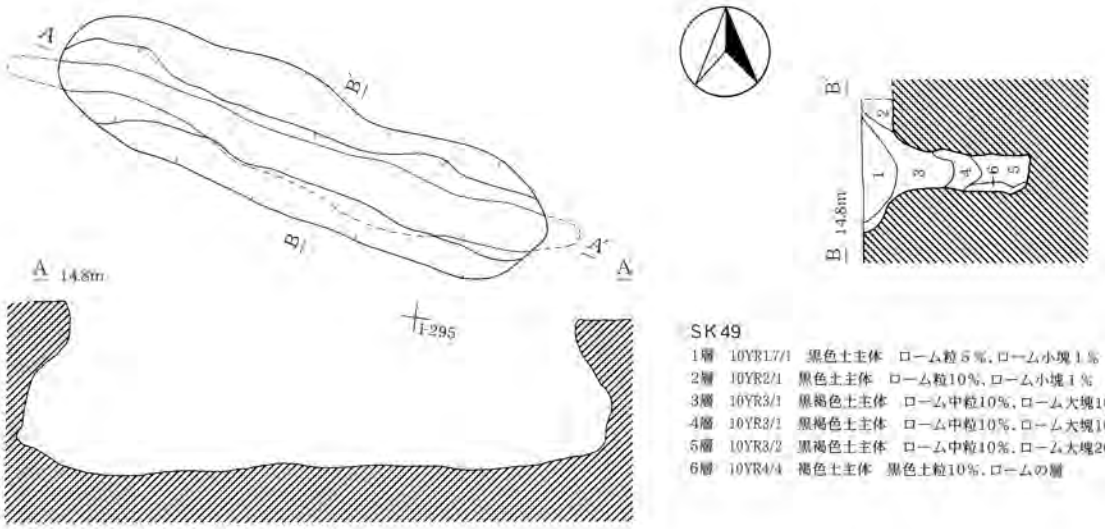
SK47
1層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム小粒、中粒を斑状に5％、
　　褐色土をブロック状に含んでいる
2層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム小粒を斑状に5％
3層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム小粒を斑状に50％含む、また、
　　ローム粒が径3cmの範囲に濃集した部分が2個所
＊全体的に非常にしまりがよい



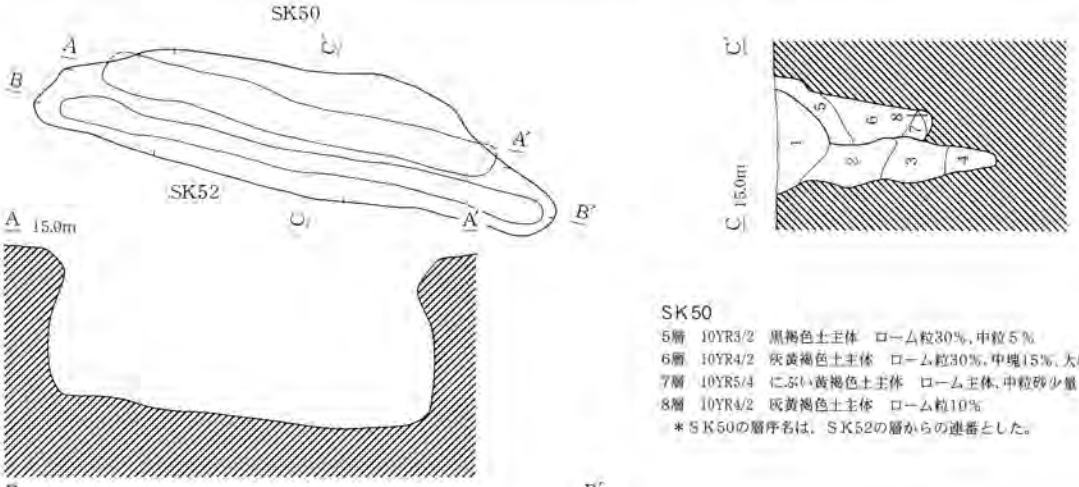
SK48
1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム中粒5％、ローム中塊1％
2層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム中粒20％、ローム中塊5％
3層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム中粒20％、ローム大塊20％、
　　褐色土30％
4層　10YR3/3　暗褐色土主体　褐色土40％、ローム中粒10％
5層　10YR4/4　褐色土主体　黒色土5％、ローム の層
6層　10YR1.7/1　黒色土主体　ローム粒1％

0　1　：　50　2m

図24　溝状土坑（ＳＫ46、47、48）

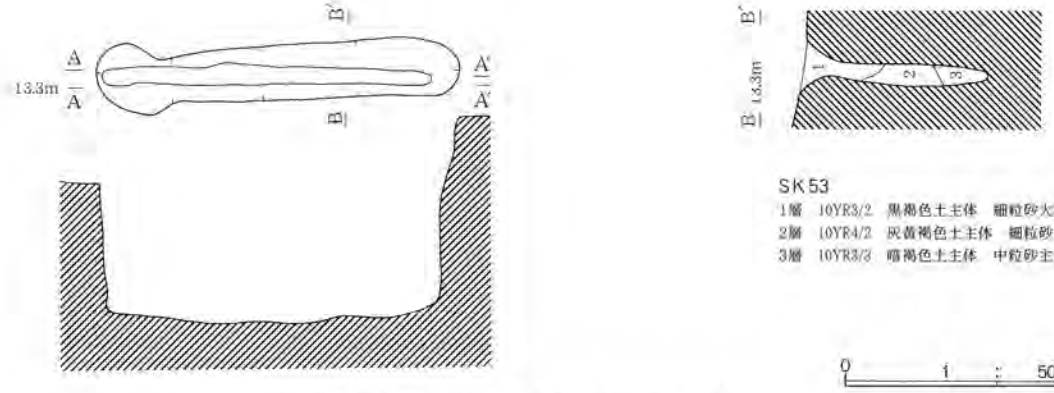


SK49
1層　10YR1.7/1　黒色土主体　ローム粒５％、ローム小塊１％
2層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒10％、ローム小塊１％
3層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム中粒10％、ローム大塊10％
4層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム中粒10％、ローム大塊10％
5層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム中粒10％、ローム大塊20％
6層　10YR4/4　褐色土主体　黒色土粒10％、ロームの層



SK50
5層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒30％、中粒５％
6層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　ローム粒30％、中塊15％、大塊20％
7層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　ローム主体、中粒砂少量
8層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　ローム粒10％
＊ＳＫ50の層序名は、ＳＫ52の層からの連番とした。

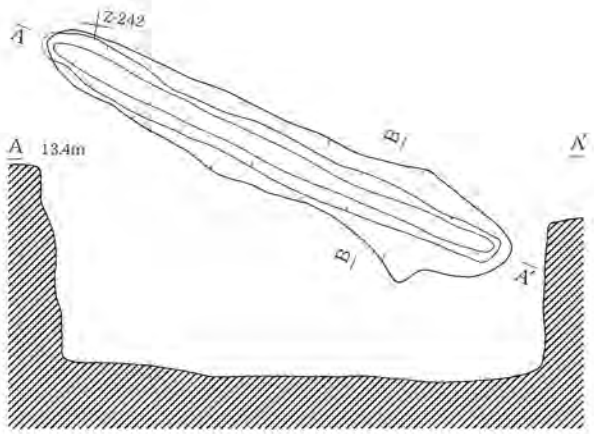
SK52
1層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒５％、中粒１％
2層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒10％、中粒５％
3層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒20％、中塊５％
4層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　ローム粒20％、大塊10％、中粒砂少量

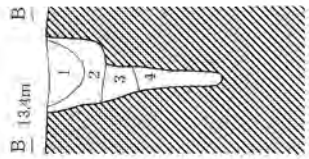


SK53
1層　10YR3/2　黒褐色土主体　細粒砂大塊10％
2層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　細粒砂５％
3層　10YR3/3　暗褐色土主体　中粒砂主体

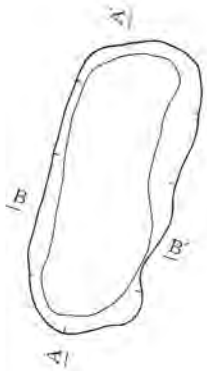
0　1　：　50　2m

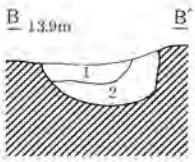
図25　溝状土坑（ＳＫ49、50、52、53）



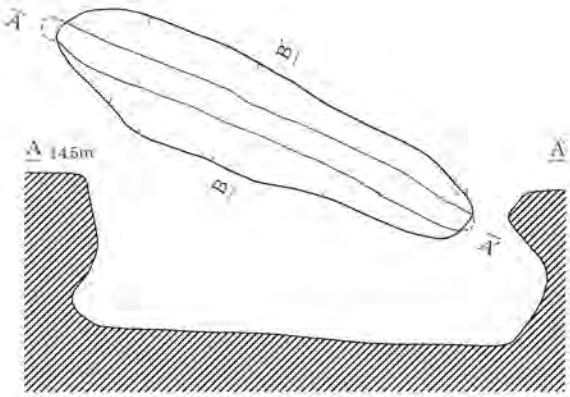


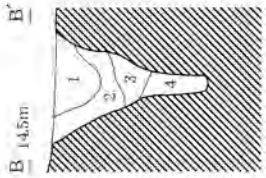
SK54
1層　10YR3/1　黒褐色土主体
2層　10YR4/2　灰黄褐色土主体
3層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体
4層　10YR4/1　褐灰色土主体



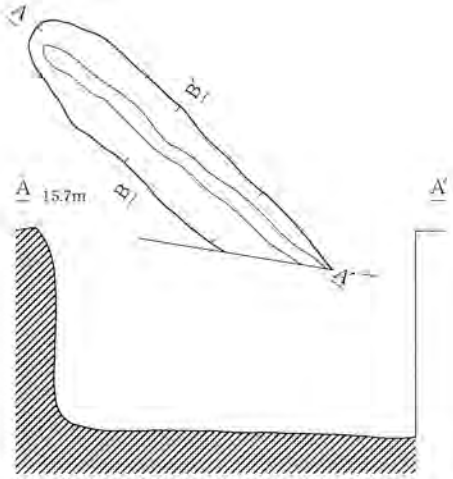


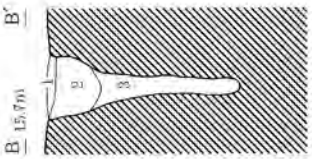
SK55
1層　10YR1.7/1　黒色土主体　ローム小粒1％、ローム中塊10％
2層　10YR5/6　黄褐色土主体　ローム小粒5％、ローム中塊1％





SK56
1層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒1％、ローム小塊1％、暗褐色土(10YR3/4)25％
2層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム粒1％、黄褐色土(10YR5/8)5％
3層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒10％
4層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒1％、褐色土(10YR4/6)10％





SK57
1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒1％
2層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒5％、ローム小塊1％、黒褐色土(10YR2/3)10％
3層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム粒1％

0　1 : 50　2m

図26　溝状土坑（ＳＫ54、55、56、57）

第３節 遺構外出土遺物

１　土器

遺構外から出土した土器は、復元可能なものはなく全て破片資料である。出土土器はⅢ層中から出土したものが大半を占め、Ⅰ層中から出土したものが少量確認される。土器片は総数 230点出土した。接合できた土器は20点で、このうち３片以上接合できた土器は４点である。このように破片資料のみであるため詳細な土器の様相を知り得ることは不可能である。分類は時期によりⅠ～Ⅱ群に大別し、その他の土器を第Ⅲ群と設定した。縄文早期前葉と考えられるものを第Ⅰ群土器、早期中葉と考えられるものを第Ⅱ群土器と設定した。相当する形式については、考察で述べることとする。なお磨耗が著しく調整等が不明な土器もある。これらに関しては観察表中には不明と記載する。

第Ⅰ群土器（図 27-１～８）

１は山形文様の内部に並行沈線を充填する。２は菱形状の押型を施文する。３・４は地文に撚糸を施し、重層山形文を施文する。４は内面にミガキ調整を施す。１～３は磨耗が著しいため内面調整は不明である。５・６は幅約1.5㎜の沈線を格子目状に施文する。６は格子目状の文様帯の上部に横位沈線を施す。胎土中には植物繊維が混入する。７・８は口唇部が平坦をなし、刻目を施す。口縁部には幅狭の無文帯を形成する。外面はミガキ調整を施した後に、幅１㎜の沈線を格子目状に施文する。内面にはミガキ調整を施す。

第Ⅱ群土器（図 27・28-９～58）

９～18は口縁部である。18は口唇部が欠損している。９～12は外面に貝殻条痕を施す。９は口唇部の残存が悪く不明だが、他は口唇部に刻目を施す。９は内面に条痕を施し、10・12はミガキを施す。13～15・17・18は口縁部に爪形状の刻目を施文する。14は上段に縦型の刻目を３条、下段に横型を２条施す。17は内外面に貝殻条痕を施し、波状口縁を形成する。口縁部には縦型の刻目を１条施す。13は１条目と４条目の沈線下に刻目を施す。18は地文に貝殻条痕を施文し、横型の刻目を２条施す。刻目間には竹管状の刺突を施す。内面にはミガキを施す。14・15・17は口唇部に刻目を施す。16は地文に撚糸を施し、口縁部に幅２㎜の平行沈線を４条施す。19～32・34～47は外面に貝殻条痕を施す。36～39は縦位に条痕を施文し、それに直交する横位沈線を施す。46・47は底部付近である。48～51は外面にミガキを施す。51は尖底の底部で、50は底部付近である。48はミガキを施した後に、幅１㎜の沈線を斜位に施す。内面にはミガキを施す。50は内外面にミガキを施す。52～58は地文に縄文を施す。53・58はＬＲ単節を横位方向に施文する。54はＬ無節を施す。52・55は単軸絡条体第１類を施す。57は磨耗が著しく内面調整不明だが、他は内面にミガキを施す。

第Ⅲ群土器（図 28-59～60）

59・60は底部付近の破片で、同一個体と考えられる。外面には貝殻条痕を施した後に、格子目状に斜行する刻目を施文する。刻目の断面は三角形を形成し、底部側には横型の刻目を施す。60は横型の刻目の下に横位沈線を施す。内面にはミガキを施す。胎土には共に繊維を混入する。

（野村　信生）

第3表　遺構外出土土器

挿図番号	グリッド	層位	部位	分　類	内面色調	外面色調	外面文様・調整	内面調整	備　考
図27－1	C-281	Ⅲ層	胴部	第Ⅰ群	7.5YR5/4	7.5YR6/6	沈線	不明	
図27－2	A-267	Ⅲ層	胴部	第Ⅰ群	10YR4/2	10YR3/2	押型文	不明	
図27－3	Y-261	Ⅲ層	胴部	第Ⅰ群	7.5YR7/4	10YR8/2	重層山形文	不明	繊維混入
図27－4	Y-261	Ⅲ層	胴部	第Ⅰ群	7.5YR7/4	10YR6/3	重層山形文	ミガキ	繊維混入
図27－5	Y-261	Ⅲ層	胴部	第Ⅰ群	2.5YR3/1	7.5YR5/4	沈線	不明	繊維混入
図27－6	F-280	Ⅲ層	胴部	第Ⅰ群	7.5YR4/1	7.5YR5/3	沈線	不明	繊維混入
図27－7	Y-261	Ⅲ層	口縁部	第Ⅰ群	7.5YR3/1	7.5YR4/2	沈線	ミガキ	口唇部刻目
図27－8	E-282	Ⅲ層	口縁部	第Ⅰ群	10YR3/1	2.5YR6/2	沈線	ミガキ	口唇部刻目
図27－9	D-273	Ⅲ層	口縁部	第Ⅱ群	10YR6/2	7.5YR8/4	貝殻条痕文	貝殻条痕文	
図27－10	Z-268	Ⅰ層	口縁部	第Ⅱ群	7.5YR6/3	5YR5/4	貝殻条痕文	ミガキ	口唇部刻目
図27－11	D-273	Ⅲ層	口縁部	第Ⅱ群	10YR7/3	10YR7/4	条痕文	不明	口唇部刻目
図27－12	E-279	Ⅲ層	口縁部	第Ⅱ群	7.5YR7/6	10YR5/3	貝殻条痕文	ミガキ	口唇部刻目
図27－13	G-281	Ⅲ層	口縁部	第Ⅱ群	10YR7/3	10YR7/4	条痕文・刻目文	ミガキ	
図27－14	C-280	Ⅲ層	口縁部	第Ⅱ群	10YR6/3	10YR7/3	貝殻条痕文・爪形文	不明	口唇部刻目・繊維混入
図27－15	G-280	Ⅲ層	口縁部	第Ⅱ群	7.5YR6/6	7.5YR7/6	貝殻条痕文・爪形文	ミガキ	口唇部刻目
図27－16	Z-259	Ⅲ層	口縁部	第Ⅱ群	10YR7/2	10YR6/3	単軸絡条体第1類・貝殻条痕文・沈線	不明	繊維混入
図27－17	F-282	Ⅲ層	口縁部	第Ⅱ群	2.5YR6/2	10YR7/4	貝殻条痕文・爪形文	貝殻条痕文	口唇部刻目
図27－18	A-267	Ⅲ層	口縁部	第Ⅱ群	10YR7/2	10YR6/1	貝殻条痕文・竹官文	ミガキ	
図27－19	G-280	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	10YR7/2	10YR6/1	貝殻条痕文	ミガキ	
図27－20	D-273	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	7.5YR7/6	2.5YR4/1	貝殻条痕文	ミガキ	
図27－21	Z-266	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	10YR7/3	10YR6/1	貝殻条痕文	ミガキ	
図27－22	F-285	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	10YR5/2	10YR6/2	貝殻条痕文	ミガキ	
図27－23	E-279	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	7.5YR7/6	2.5YR6/3	貝殻条痕文	ミガキ	
図27－24	I-295	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	7.5YR7/6	10YR7/4	貝殻条痕文	不明	
図27－25	Z-266	Ⅰ層	胴部	第Ⅱ群	10YR7/3	10YR5/2	貝殻条痕文	ミガキ	外面スス状炭化物付着・繊維混入
図27－26	A-269	Ⅰ層	胴部	第Ⅱ群	7.5YR7/4	2.5YR7/3	貝殻条痕文	ミガキ	
図27－27	Y-269	Ⅰ層	胴部	第Ⅱ群	10YR6/3	10YR6/2	貝殻条痕文	ミガキ	繊維混入
図27－28	A-268	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	10YR6/3	10YR4/1	貝殻条痕文	ミガキ	
図27－29	Y-261	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	7.5YR4/2	10YR4/2	貝殻条痕文	ミガキ	繊維混入
図27－30	A-269	Ⅰ層	胴部	第Ⅱ群	10YR7/3	10YR5/2	貝殻条痕文	ミガキ	
図27－31	F-286	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	10YR7/4	7.5YR5/2	貝殻条痕文	ミガキ	
図27－32	Y-262	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	7.5YR5/3	10YR4/1	貝殻条痕文・ミガキ	ミガキ	
図27－33	G-280	Ⅲ層	口縁部	第Ⅱ群	10YR6/3	10YR4/2	条痕文	ミガキ	
図27－34	D-282	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	10YR8/4	10YR7/4	貝殻条痕文	ミガキ	繊維混入
図27－35	Z-266	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	10YR6/4	7.5YR6/3	貝殻条痕文	ミガキ	
図27－36	A-268	Ⅰ層	口縁部	第Ⅱ群	7.5YR7/6	10YR5/1	条痕文・沈線	ミガキ	
図27－37	Z-266	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	7.5YR7/6	10YR3/1	条痕文・沈線	ミガキ	
図27－38	Y-262	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	7.5YR7/6	10YR6/3	条痕文・沈線	不明	
図27－39	Y-257	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	7.5YR6/4	10YR4/2	貝殻条痕文	ミガキ	繊維混入
図27－40	Y-263	Ⅰ層	胴部	第Ⅱ群	10YR6/4	10YR5/2	条痕文・沈線	不明	繊維混入
図27－41	Y-261	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	7.5YR5/4	10YR4/1	貝殻条痕文	ミガキ	繊維混入
図28－42	A-285	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	7.5YR7/4	7.5YR4/1	貝殻条痕文	ミガキ	繊維混入
図28－43	M-292	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	10YR8/4	10YR7/3	貝殻条痕文・ミガキ	ミガキ	
図28－44	Y-262	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	10YR4/1	10YR6/2	ミガキ	ミガキ	
図28－45	D-279	Ⅲ層	底部	第Ⅱ群	7.5YR7/4	N4/0	貝殻条痕文	ミガキ	
図28－46	E-295	Ⅲ層	底部	第Ⅱ群	10YR5/2	7.5YR5/4	貝殻条痕文	ミガキ	
図28－47	Y-261	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	7.5YR6/4	7.5YR7/4	貝殻条痕文	ミガキ	
図28－48	J-292	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	7.5YR7/4	10YR6/4	ミガキ・沈線	ミガキ	
図28－49	B-265	Ⅲ層	底部	第Ⅱ群	5YR6/6	10YR6/3	ミガキ	ミガキ	繊維混入
図28－50	D-280	Ⅲ層	底部	第Ⅱ群	10YR7/4	10YR5/1	ミガキ	ミガキ	
図28－51	J-286	Ⅲ層	底部	第Ⅱ群	10YR6/3	10YR7/4	ミガキ	不明	
図28－52	D-279	Ⅲ層	底部	第Ⅱ群	7.5YR7/4	7.5YR6/4	単軸絡条体第1類・ミガキ	ミガキ	繊維混入
図28－53	E-279	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	7.5YR7/4	10YR7/2	ＬＲ単節横位	ミガキ	
図28－54	Y-257	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	7.5YR7/4	5YR5/6	Ｌ無節横位	ミガキ	
図28－55	Y-262	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	10YR5/2	10YR3/2	単軸絡条体第1類	ミガキ	
図28－56	X-258	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	5YR6/6	10YR3/2	縄文	ミガキ	
図28－57	H-282	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	10YR8/4	10YR5/2	ＬＲ単節横位	不明	
図28－58	Y-262	Ⅲ層	胴部	第Ⅱ群	5YR6/6	7.5YR6/4	ＬＲ単節横位	ミガキ	
図28－59	－	Ⅰ層	胴部	第Ⅲ群	7.5YR6/3	7.5YR6/4	貝殻条痕文・刻目	ミガキ	繊維混入
図28－60	－	Ⅲ層	胴部	第Ⅲ群	7.5YR7/3	7.5YR6/4	貝殻条痕文・刻目	ミガキ	繊維混入

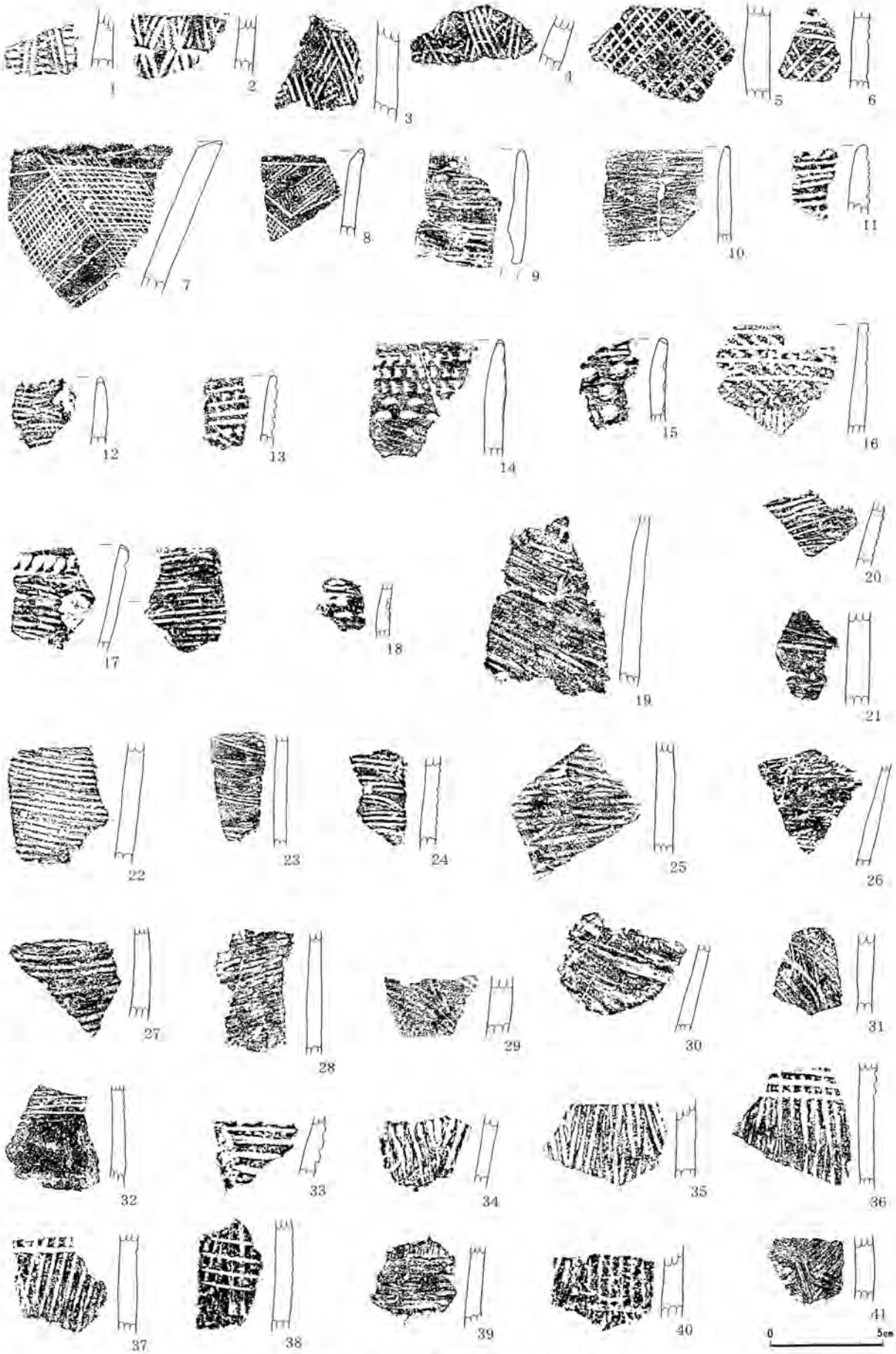


図27　遺構外出土土器（1）

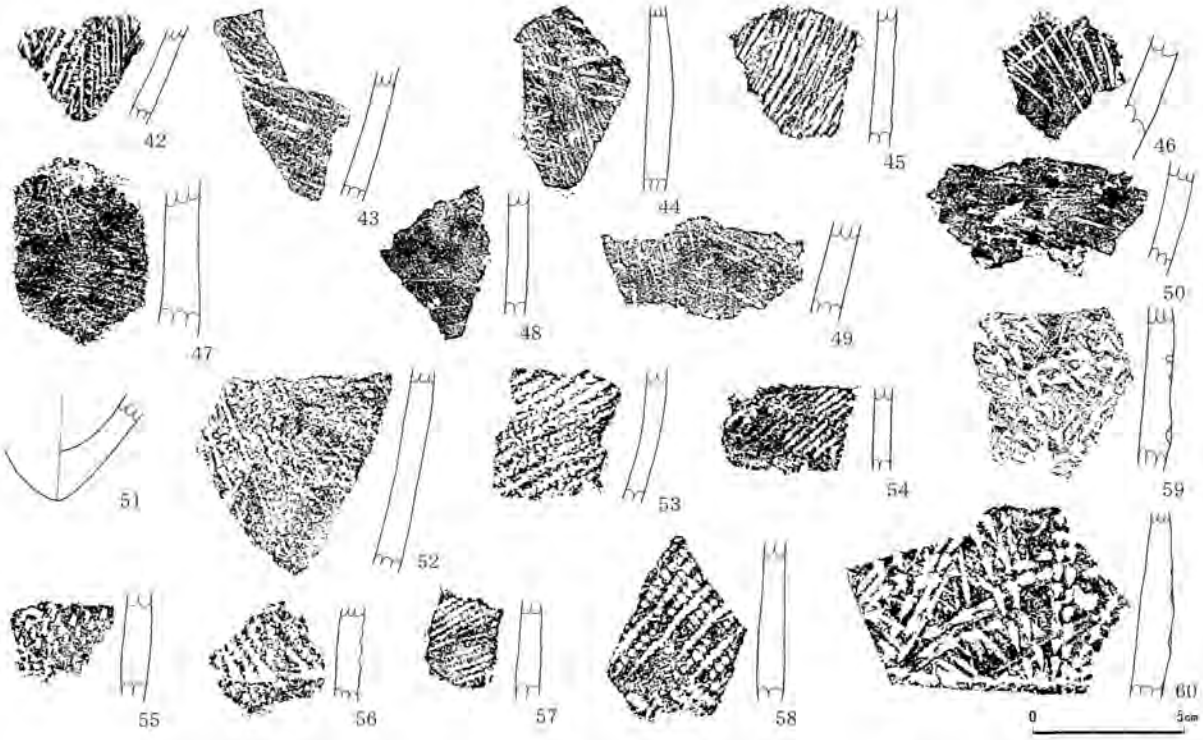


図28 遺構外出土土器（2）

2　石器（図29～31）

石製品（図29－1）

1点出土している。欠損品であるので全体の形状は不明だが、全面丁寧に研磨され、断面はレンズ状となる。先端は徐々に細身となり屈曲も見られる。

石錐（図29－2）

1点出土している。一見石鏃的ではあるが、先端、基部の作り出しも明瞭ではなく、幅に対して厚みもあるので石錐とした。

石槍（図29－3・4）

2点出土している。共に作りは丁寧とは言えないが、先端または基部と思われる部分が見られる。3は一方の側縁に張り出しが認められるが、調整剥離の段階で除去しきれなかった部分と思われるため、未製品の可能性も考えられる。4は3に比べると大形であるが大きく欠損している。表面に被熱痕が残るが、折れ面にも同様の痕跡が認められることから、欠損後に熱を受けたものと推定される。

磨製石斧（図29－5）

完形品は出土していないが破片が1点出土している。4は表面全体に磨きをかけたときの擦痕以外に擦り切りの痕跡も認められることから、欠損前は擦り切り磨製石斧であったものと思われる。本品は石斧の側面からの打撃によって剥離されたものであるが、その打面付近には他にも多数の敲打痕が観察される。

削器（図29－6～12）

剥片の縁辺に刃部を作出したものが7点出土している。6は石刃状の縦長剥片背面の両側縁と主要剥離面側の一部に二次加工を施している。7は縦長剥片の両側縁の表裏に、8は縦長剥片の主要剥離

面側の一側縁に二次加工が認められる。９は扇形を呈した剥片の主要剥離面側の一側縁に、10は背面の末端に二次加工が施されている。11は縦長剥片の主要剥離面側の一側縁と末端に、12は横長剥片の主要剥離面側の末端に二次加工が見られる。

二次加工を有する剥片（図29－13～15）

刃部といえるほど明瞭ではないが、何らかの二次加工が見られる剥片が3点出土している。

石錘（図30－16～23）

８点出土している16～22は隅丸三角形、方形、円形、楕円形の偏平礫の上下端にノッチ状の凹みが見られる。20の図上端は自然の凹みを転用したものであるが、他は１～数回の剥離で作出している。23は厚みのある転石を用いて上下に剥離を施している。17の一端には敲き石状の敲打痕が残る。

敲き石（図30－24～27）

４点出土している。24･25･27は偏平な楕円礫の端部に敲打痕や敲打に伴う剥離が認められる。24の図上面には擦痕も観察される。26は比較的重量感のある礫をもちいたもので、図下端には敲打に伴う剥離が、図上部には敲打による潰れが広範に観察される。

磨り石（図30･31－28～37）

10点出土している。28･29はやや厚みのある偏平な円礫の表裏の平坦面を磨り面としたものであるが、28の一端には敲打痕も観察される。29は大きく欠損しており本来の半分程度の残存である。

第４表　遺構外出土石器

挿図番号	器種	石質	グリッド	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
図29－1	石製品	安山岩	Z-266	Ⅲ層	55	33	16.5	28.4	
図29－2	石錐	珪質頁岩	B-267	Ⅲ層	32	13	8	3.2	
図29－3	石槍	珪質頁岩	－	Ⅲ層	40	25	9	7.7	
図29－4	石槍	珪質頁岩	C-281	Ⅲ層	52	52	19	28.6	
図29－5	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	Z-259	Ⅲ層	42	48	15	34.6	
図29－6	削器	珪質頁岩	Y-265	Ⅰ層	59	34.5	12	16.5	
図29－7	削器	珪質頁岩	－	Ⅲ層	81	30	9	17.6	
図29－8	削器	珪質頁岩	Y-259	Ⅲ層	74	40.5	17	40.2	
図29－9	削器	珪質頁岩	Y-259	Ⅲ層	48	43	17	22.2	
図29－10	削器	珪質頁岩	Z-262	Ⅲ層	43	39	15	18.5	
図29－11	削器	珪質頁岩	H-281	Ⅲ層	50	43	14	29.9	
図29－12	削器	珪質頁岩	A-266	Ⅰ層	39	77	17	41.7	
図29－13	二次加工有る剥片	珪質頁岩	A-268	Ⅲ層	32	22	9	5.1	
図29－14	二次加工有る剥片	珪質頁岩	Y-265	Ⅰ層	64.5	25	12.5	16.6	
図29－15	二次加工有る剥片	チャート	C-275	Ⅲ層	71	57	18	85.7	
図30－16	石錘	頁岩	M-291	Ⅲ層	68	52	9	38.5	
図30－17	石錘	安山岩	C-281	Ⅲ層	62	54	23	133.6	
図30－18	石錘	チャート	－	Ⅲ層	77	71	23	170.3	
図30－19	石錘	安山岩	O-6	Ⅰ層	75	70	28	206	
図30－20	石錘	チャート	E-273	Ⅲ層	52	47	11	36.8	
図30－21	石錘	チャート	H-281	Ⅲ層	56	53	14	54	
図30－22	石錘	安山岩	H-280	Ⅲ層	85	53	23	154.7	
図30－23	石錘	チャート	B-274	Ⅲ層	100	62	41	318.2	
図30－24	敲き石	安山岩	Z-266	Ⅰ層	81	46	22	105.4	
図30－25	敲き石	安山岩	A-261	Ⅲ層	113	67	23	247	
図30－26	敲き石	安山岩	E-280	Ⅲ層	117	71	54	679.4	
図30－27	敲き石	頁岩	C-271	Ⅲ層	79	54	22	137.1	
図30－28	磨り石	砂岩	F-286	Ⅲ層	111	88	35	478	
図30－29	磨り石	閃緑岩	F-286	Ⅲ層	57	89	29	215.5	
図31－30	磨り石	安山岩	Z-266	Ⅲ層	137	58	29	230.6	
図31－31	磨り石	安山岩	B-264	Ⅲ層	157	90	38	611.8	
図31－32	磨り石	安山岩	Z-259	Ⅲ層	71	76	18	94.7	
図31－33	磨り石	安山岩	B-267	Ⅰ層	103	64	36	367.4	
図31－34	磨り石	安山岩	B-267	Ⅰ層	92	65	64	458.1	
図31－35	磨り石	安山岩	A-262	Ⅰ層	101	84	65	767.5	
図31－36	磨り石	安山岩	G-282	Ⅲ層	107	62	27	227.3	
図31－37	磨り石	安山岩	B-264	Ⅲ層	107	81	67	578.9	

30～32は大形の剥片の側縁を潰すような磨痕が認められる。30は剥片の側縁に、31・32は剥片の側縁に若干の二次加工を施した後に使用したものと思われる。使用に際しては単に磨りに用いただけではなく、同じ機能面で敲きながら磨ったような印象を受ける。33～37は自然礫の稜線を機能面とした磨り石である。特殊磨り石や三角柱状磨り石と呼ばれる石器の範疇に属するものと思われる。34は欠損品であるがその典型である。30～32の機能面はエッジが潰れた程度の幅であったが、それらに比べると機能面に幅がある。35～37は磨り面を打面とした剥離が見られるが、これらの中には機能面とする稜を調整したもの以外に敲打に伴うものと思われる剥離も認められる。使用に際しては単に磨りに用いただけではなく、敲き潰すような機能も有していた可能性が考えられる。磨りの方向についてはいずれも不明瞭である。

（太田原　潤）

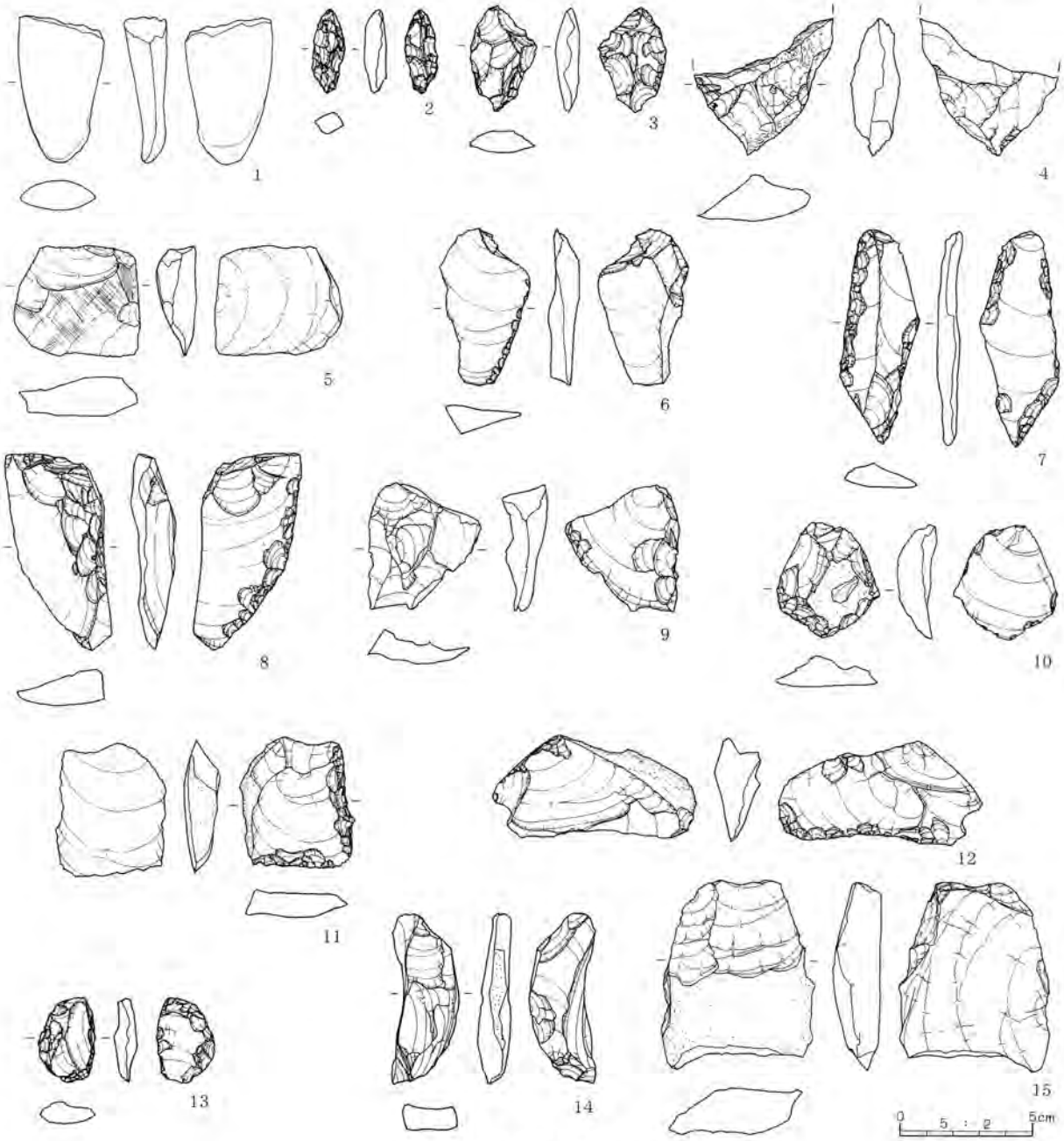


図29　遺構外出土石器（1）

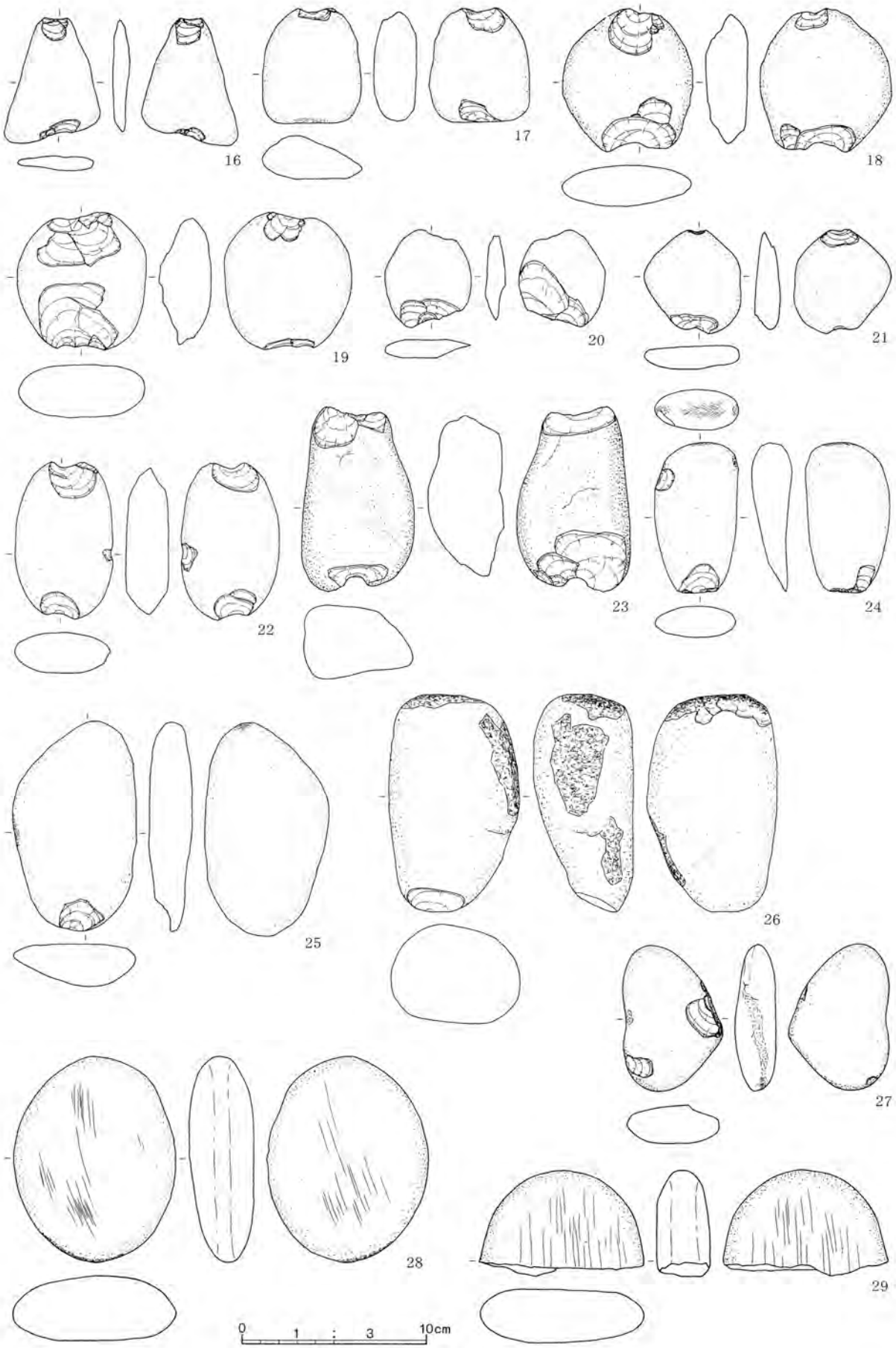


図30　遺構外出土石器（2）

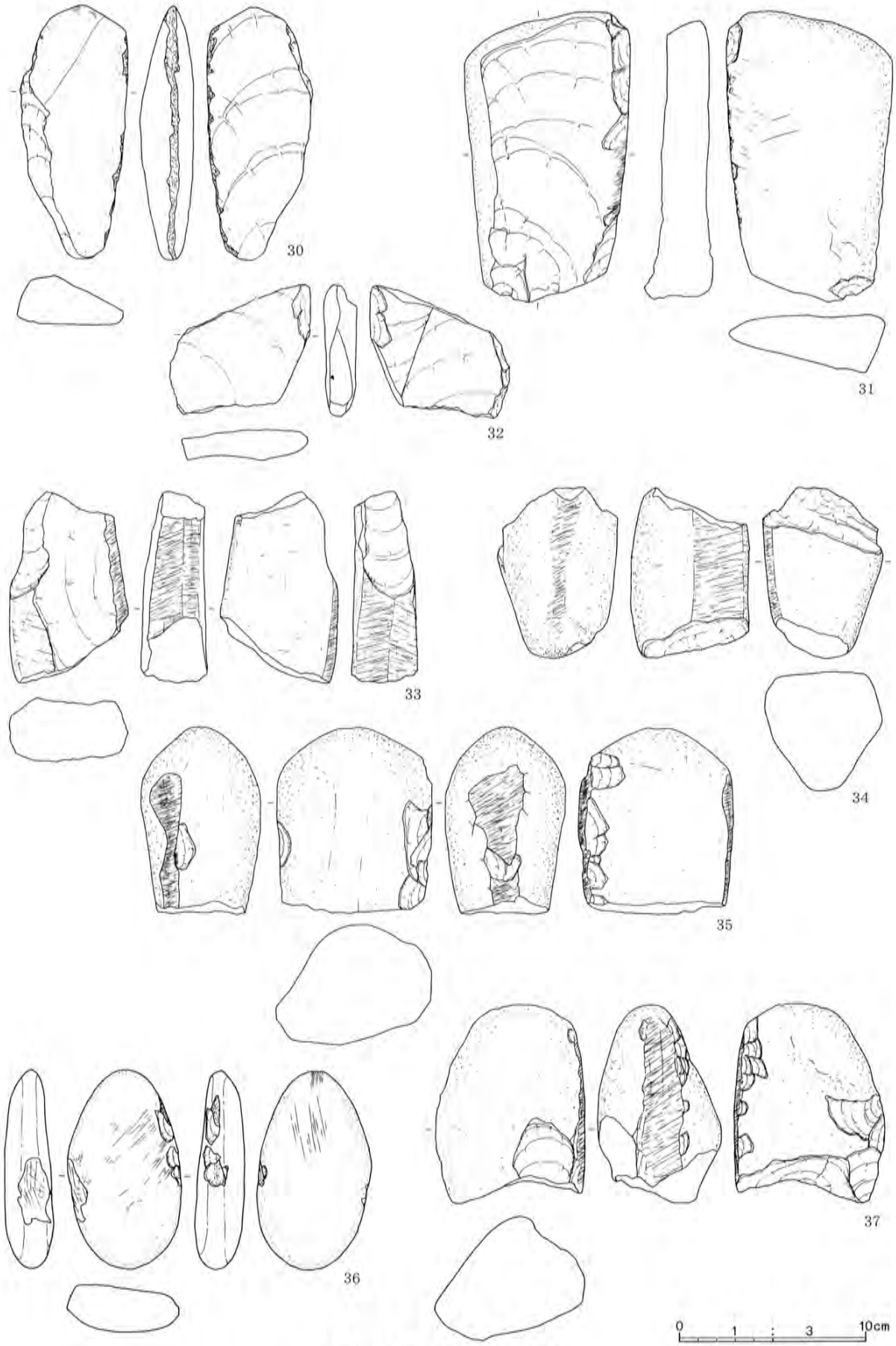


図31 遺構外出土石器（3）

第４章　考察とまとめ

ここでは遺構、遺物の分布についてと出土土器に対して若干の考察を加えることによってまとめにかえたい。

第１節　遺構、遺物の分布について

今回の新納屋（１）遺跡の発掘調査で検出された遺構は溝状土坑57基で、住居跡、溝跡の遺構はまったく検出されていない。隣接する幸畑（１）遺跡Ｂ区では58基の溝状土坑の他に縄文時代早期の竪穴住居跡が２軒検出されているが、その場所は２軒とも調査区の西寄りであった。同遺跡での溝状土坑の分布密度をみると、竪穴住居跡周辺は薄く、逆に竪穴住居跡のない調査区東側は濃くなる傾向が看取できる。新納屋（１）遺跡の溝状土坑群は、この幸畑（１）遺跡Ｂ区東側の溝状土坑群に連続するものとも考えられる。

このような遺構の分布傾向は、遺跡内外の地形を反映した結果と思われる。第２章－第１節で既に述べたように、新納屋（１）遺跡は、市柳沼周辺の湖沼や河川の浸食に取り残された狭長な舌状台地の先端付近に位置しており、集落の形成には不向きな土地と思われる。幸畑（１）遺跡Ｂ区も新納屋（１）遺跡の西側に隣接して同じ台地状に位置しているため、地形的には両遺跡とも同様な条件下にあり、集落形成の適地というよりは溝状土坑群の適地であったと考えられる。溝状土坑が落し穴の一形態であるとする考えが妥当であるならば、両遺跡周辺は生活の場というよりは狩猟の場としての性格付けが与えられよう。

新納屋（１）遺跡での溝状土坑の分布を見ると疎密の傾向が看取されるが、大別すると図32のように３群に分けることができる。以下、それぞれの群を北西からＡ群、Ｂ群、Ｃ群と仮称する。各群はＡ群10基、Ｂ群28基、Ｃ群18基で構成され、最も集中するのはＢ群である。Ｃ群は集中度こそ高

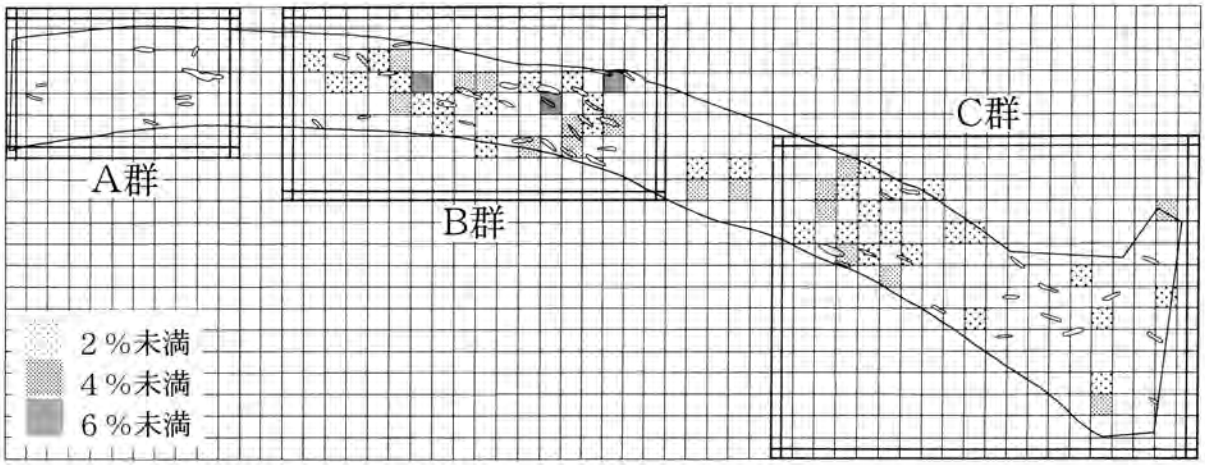


図32　遺構外出土土器分布図（総点数に対するグリッド毎出土比率）

くはないが、ある程度の間隔をおいて散在し、調査区外まで広がるようである。

遺構外の遺物分布も同様に疎密の傾向が看取される。B群からは130点、C群からは195点の土器が出土しているが、A群からは出土していない。B群とC群の間からも11点の土器が出土しているが群内に比べると出土数は非常に少なく、土器の分布と溝状土坑の分布は無関係ではなさそうである。石器の分布傾向も同様でA群からは1点、B群から87点、C群から54点、B群C群間から3点の石器が出土している。

伴出遺物が少ないため各溝状土坑が構築された時期を個別に特定するのは困難であるが、以上の分布状況から類推すると遺構周辺に分布する土器の時期と遺構の構築時期に大きな差はないようにもみえる。時期の特定できる土器は縄文時代早期日計式から白浜式期にかけてのものがほとんどであることから、遺構もその間に断続的に構築されたものと推定することも可能である。しかしながら、溝状土坑の性格を落とし穴として捉えると、遺物が遺構に伴うものであると考えるよりは、遺構構築時または構築後に混入したものであると考えることもできる。また、形態的にみても本遺跡の溝状土坑の類例は前期以降にも多数見出すことができる。層位的にみても、遺構に関連する鍵層もなく、時期が特定できる遺構の切り合いもないため、本遺跡では土層から時期を推定することができなかった。

以上から、新納屋（1）遺跡の遺構土坑の構築時期は縄文時代早期の可能性を考慮しつつも、あえて特定しないでおくこととする。（太田原 潤、野村 信生）

第2節　新納屋(1)遺跡出土土器について

第1群は少量の出土で早期前葉の日計式に相当するもの、第Ⅱ群は早期中葉の白浜・小舟渡平式に相当するものと考えられ、当遺跡の主体を占める。第Ⅲ群については、その他として分類したが地文に貝殻条痕を施す特徴を有することから早期中葉の貝殻文系土器に相当すると考えられる。第Ⅰ群とした5・6・7・8については、白浜・小舟渡平式のバリエーションとして考え、早期中葉の貝殻条痕文系土器の範疇と考えるのが妥当かもしれない。出土土器から確認できる部位をみると、口縁部は16片、胴部は 194片、底部は7片出土した。口縁部や底部に比べ胴部が圧倒的に多いようである。口縁部の出土は少量であるが、その中にも数種類のバリエーションが確認できる。ここでは口唇部の特徴に着目してⅠ～Ⅳ型に分類し、模式図を作成した。

Ⅰ型は口唇部に平坦面を形成するもの。Ⅱ型は垂直あるいは内湾し、口唇部が断面三角形を形成するもの。Ⅲ型は口縁部内面に屈曲を持ち、断面三角形を形成するもの。Ⅳ型は口縁部が外傾し、口唇部に平坦面を形成するもの。口縁部については出土資料が少ないため口唇部の模式図を提示するだけにとどめる。（野村 信生）

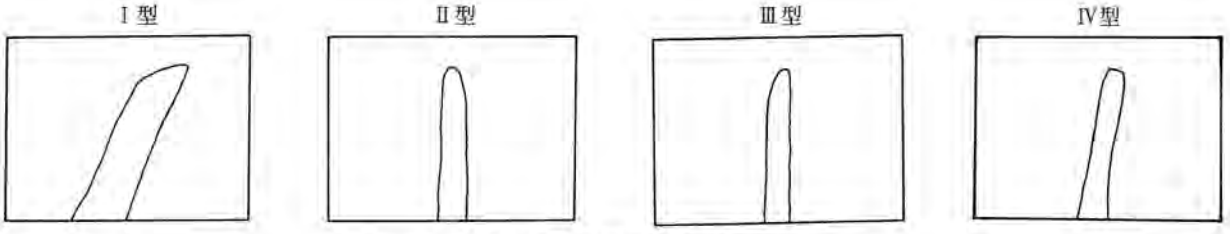


図33 口唇部断面模式図

調査区全景（北から）

調査区全景（南から）

調査区全景（上空から）

調査区全景（上空から）

基本土層

溝状土坑確認状態（SK48）

調査風景

調査風景

写真１　調査区全景、基本土層他

SK 1、2 平面

SK 1 断面

SK 2 断面

SK 3、12平面

SK 3 断面

SK 4 断面

SK 4、5、30平面

SK 5 断面

写真 2　溝状土坑（ＳＫ 1～5、12、30）

SK 6 平面

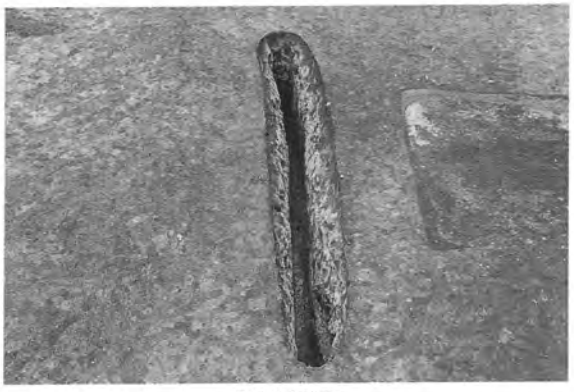
SK 6 断面

SK 7 平面

SK 7 断面

SK 8平面

SK 8 断面



SK 9 平面

SK 9 断面

写真３　溝状土坑（ＳＫ６～９）

SK10平面

SK10断面

SK11平面

SK11断面

SK13平面

SK13断面

SK14平面

SK13、14付近

写真４　溝状土坑（ＳＫ10、11、13、14）

SK15平面

SK15断面

SK16、21平面

SK16断面

SK17平面

SK18平面

SK19平面

SK19断面

写真５　溝状土坑（ＳＫ15～19、21）

SK20平面

SK20断面

SK22平面

SK22断面

SK23平面

SK23断面

SK24平面

SK24断面

写真６　溝状土坑（ＳＫ20、22～24）

SK25平面

SK25断面

SK26平面

SK26断面

SK27平面

SK27断面

SK28平面

SK28断面

写真７　溝状土坑（ＳＫ25～28）

SK29平面

SK29断面

SK32平面

SK32断面

SK33平面

SK33断面

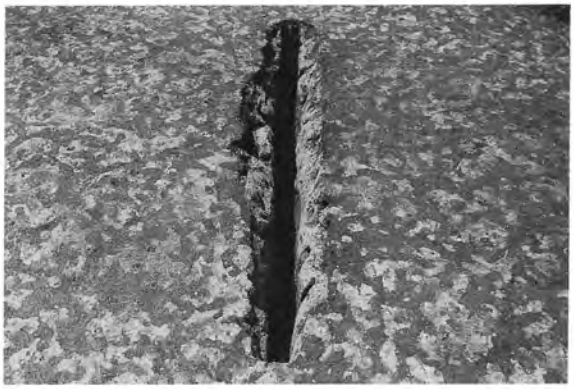
SK34平面

SK34断面

写真８　溝状土坑（ＳＫ29、32～34）

SK35平面

SK35断面



SK36平面

SK36断面

SK37平面

SK37断面

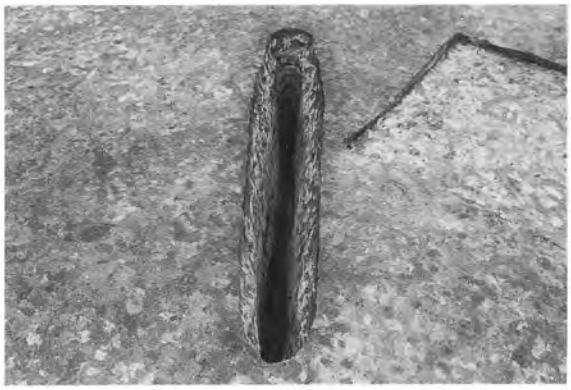
SK38平面

SK38断面

写真９　溝状土坑（ＳＫ35～38）

SK39平面

SK39断面



SK40平面

SK40断面

SK41平面

SK41断面

SK42平面

SK42断面

写真10　溝状土坑（ＳＫ39～42）

SK43平面

SK43断面

SK44平面

SK44断面

SK45平面

SK45断面

SK46平面

SK46断面

写真11　溝状土坑（ＳＫ43～46）

SK47平面

SK47断面

SK48平面

SK48断面

SK49平面

SK49断面

SK50、52平面

SK53、54平面

写真12　溝状土坑（ＳＫ47～50、52～54）

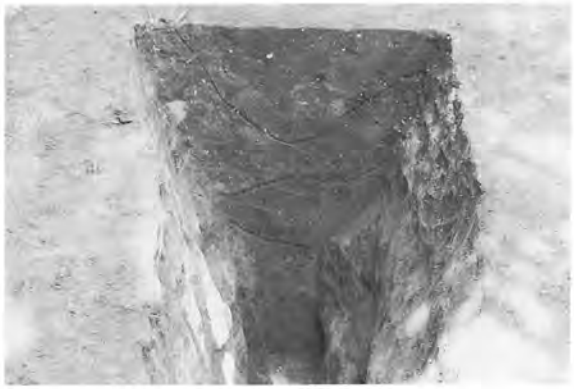
SK53断面

SK54断面

SK55平面

SK55断面

SK56平面



SK56断面

SK57平面

SK57断面

写真13　溝状土坑（ＳＫ53～57）

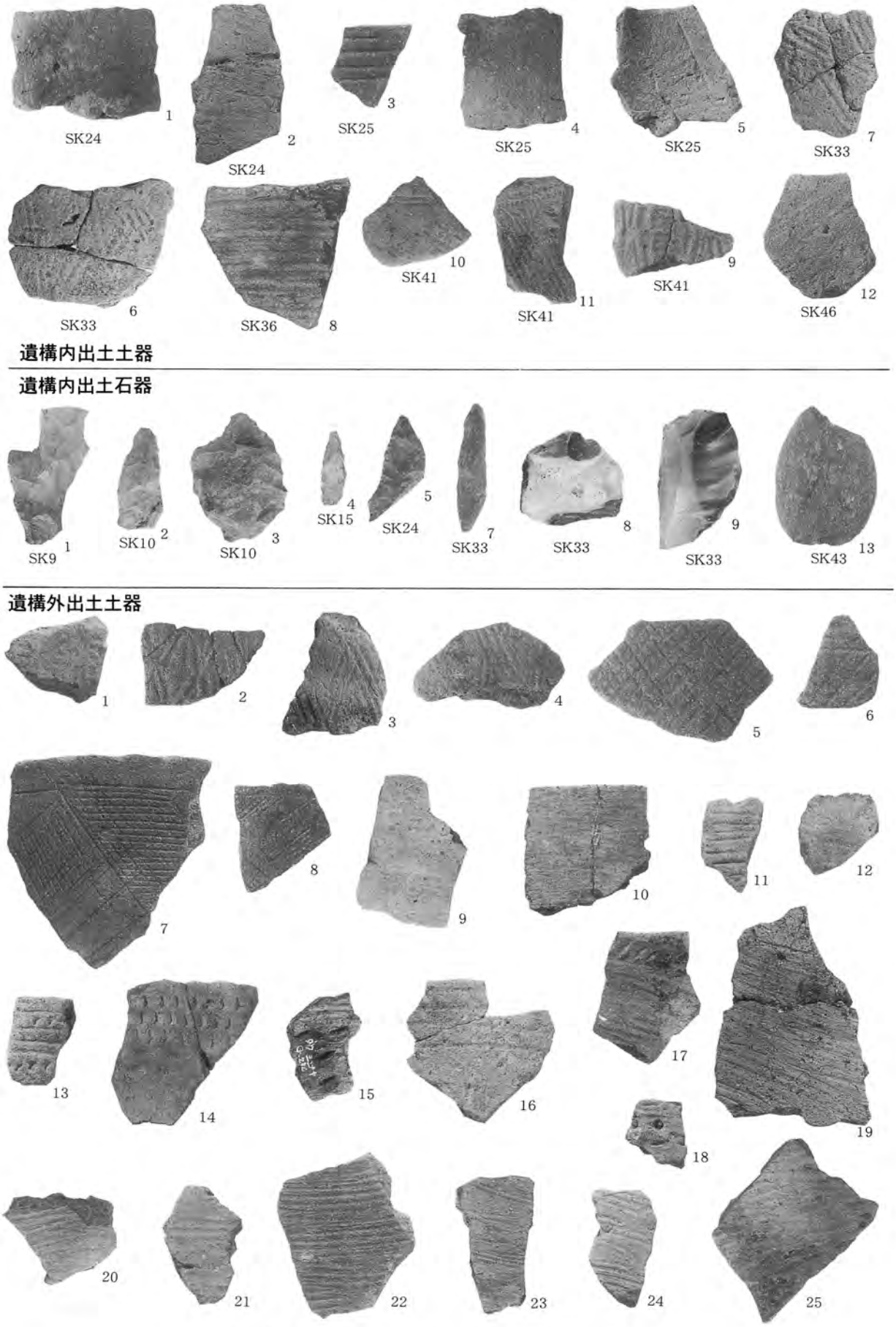


写真14　遺構内出土土器、石器、遺構外出土土器

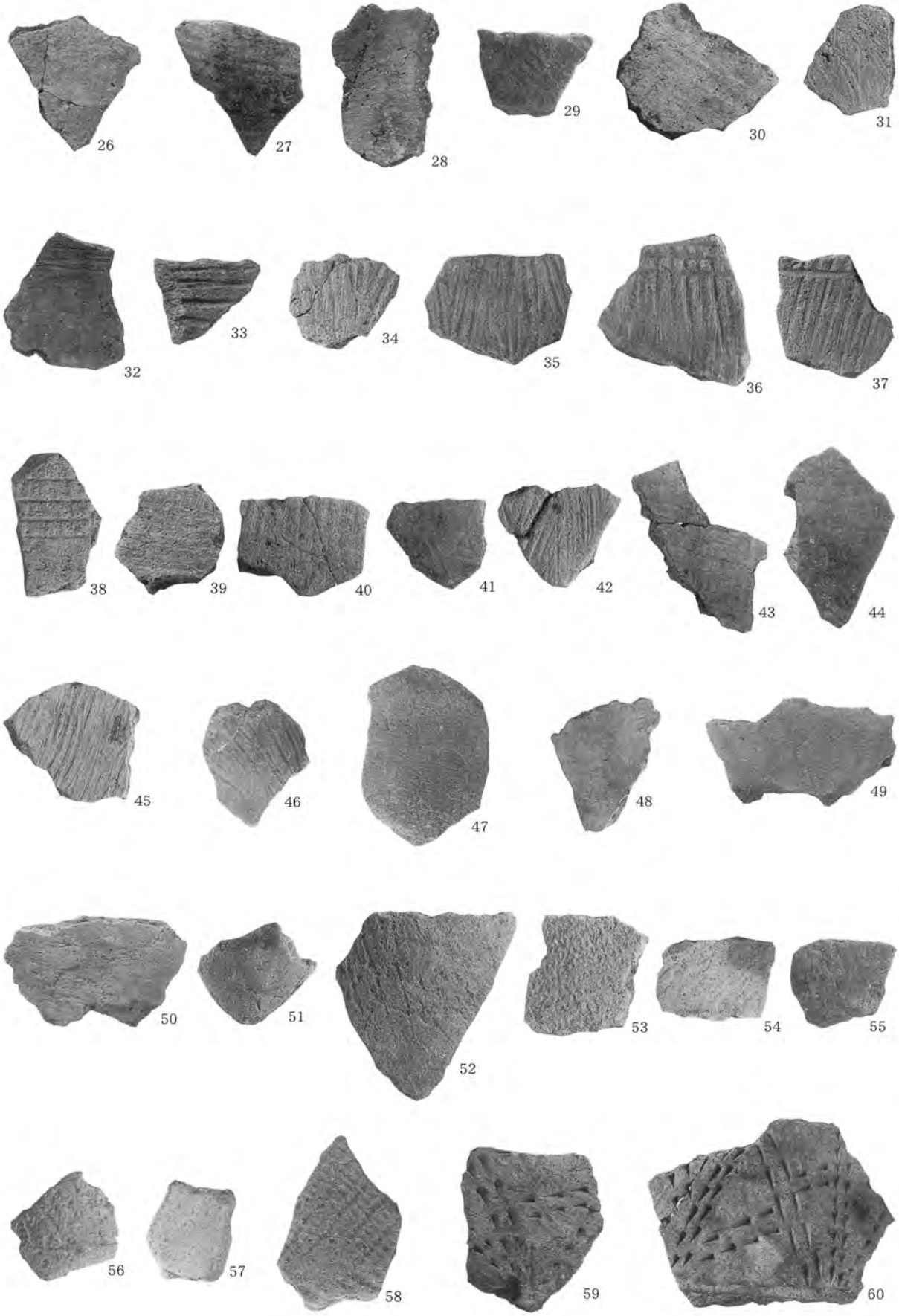


写真15　遺構外出土土器

写真16　遺構外出土石器

引用・参考文献

青森県教育委員会　1976『千歳13』青森県埋蔵文化財調査報告書　第27集

青森県教育委員会　1978『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』青森県埋蔵文化財調査報告書　第36集

青森県教育委員会　1978『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』青森県埋蔵文化財調査報告書　第42集

青森県教育委員会　1980『長七谷地貝塚遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第57集

青森県教育委員会　1982『発茶沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第67集

青森県教育委員会　1984『牛ヶ沢(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第86集

青森県教育委員会　1985『売場遺跡発掘調査報告書　大タルミ遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第93集

青森県教育委員会　1986『沖附(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第100集

青森県教育委員会　1986『沖附(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第101集

青森県教育委員会　1987『弥栄平(4)(5)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第106集

青森県教育委員会　1988『上尾駮(1)遺跡A地区』青森県埋蔵文化財調査報告書　第112集

青森県教育委員会　1988『上尾駮(2)Ⅰ遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第114集

青森県教育委員会　1988『上尾駮(2)Ⅱ遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第115集

青森県教育委員会　1989『表館(1)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書　第120集

青森県教育委員会　1990『幸畑(7)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第125集

青森県教育委員会　1990『表館(1)遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書　第127集

青森県教育委員会　1993『家ノ前遺跡・幸畑(7)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書　第148集

青森県教育委員会　1997『幸畑(10)・(6)・(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第222集

青森県教育委員会　1998『西張(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第233集

青森県教育委員会　1998『幸畑(4)遺跡・幸畑(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第236集

坂本真弓・杉野森淳子　1997「青森近県における陥し穴集成」『研究紀要』2　青森県埋蔵文化財調査センター

領塚正浩　1996「東北地方北部に於ける縄文時代早期前半の土器編年(上)」『史館』27　史館同人

領塚正浩　1996「東北地方北部に於ける縄文時代早期前半の土器編年(下)」『史館』28　史館同人

六ヶ所村史編纂委員会　1997『六ヶ所村史』六ヶ所村史刊行委員会

報告書抄録

ふりがな	しんなや（1）いせき
書名	新納屋（1）遺跡
副書名	県道尾駮有戸線改良事業に伴う遺跡発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第256集
編著者名	太田原 潤 ・ 野村 信生 ・ 下山 純子
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038－0042 青森市大字新城字天田内152－15 TEL0177(88)5701 FAX0177(88)5702
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
新納屋（1） 遺跡	青森県上北郡六ヶ所村大字鷹架字道の下29－203、外	02411	29060	40° 54′ 38″	141° 22′ 30″	19970501 ～ 19970625	4,000	県道尾駮有戸線改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新納屋（1） 遺跡	溝状 土坑群	縄文	溝状土坑57基	縄文土器 石器	早期前葉～中葉

青森県埋蔵文化財調査報告書　第256集

新納屋(1)遺跡

－県道尾駮有戸線改良事業に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日　1999年3月31日

発　　行　青森県教育委員会

編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター

〒038－0042 青森市大字新城字天田内152－15

TEL0177－88－5701　FAX0177－88－5702

印 刷 所　(株) 三栄企画印刷

〒038－0121 青森市妙見3－2－19

TEL0177－38－0040

活彩あおもり
―輝くあおもり新時代―